
誓約の翼

灯里

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

誓約の翼

【Nコード】

N8966W

【作者名】

灯里

【あらすじ】

少女が望まなかった力、少年が望んだ力。

女神に祝福された世界で今、始まりの鐘の音が鳴り響く。

この翼にかけて誓う。私は……シグを一人にしない。

異世界シルヴァニスで紡がれる見習い悪魔被いたちの物語。

著者HPより加筆、修正したものを掲載しています。

登場人物紹介

『でも絶対に守ってみせる。……シグは死なせない』

ノルン

物語の主人公。十六歳。教戒に属する悪魔被い（見習い）。

幼い頃、家族が悪魔に襲われた際に聖人の力を覚醒させ、強制的に教戒に連れて来られた少女。

基本必要ないこと以外は喋ろうとせず、他人に対して距離を置いている。

美人であるが、他人と関わる気がないために他の者たちとの交流は無いに等しい。

悪魔被い、魔導師としての才はあるものの、全てに諦めに似た達観をしている事もあってやる気はまったくと言っていいほどない。

だがある時、ペアを組むことになったシグフェルズとの出会いで少しずつ変わり始める。

人との係わりを避けているため分かりづらいが、取り分け感謝や親愛と言った自らの感情を表すことが苦手といった不器用な面がある。

『本当にノルンには敵わないな。君はいつも僕が欲しい言葉をくれる』

シグフェルズ

ノルンと同じく教戒に属する悪魔被い（見習い）。愛称はシグ。精霊因子を視る才はあるものの、魔力がないため、魔術を使うことが出来ない、ある意味魔導師よりも稀有な人物。

聖人ではないが、悪魔被いの適性がありバクルスの扱いに関しては他の追隨を許さないほど。

悪魔憑きとなった兄を探すために悪魔被いの道を志した。両親は三年前に兄の手によって死去している。

初めは十分な力を持っているのにその力を活かそうとしないノルンをあまり良く思っていないかった。両親が死去した時より、兄と刺し違えるつもりだったが、ノルンと出会ったことで芽生えた思いに戸惑ってモいる。

『人間ってさ結局、無い物ねだりなんだと思うよ。力にしたって何にしたって、必ずしも己が望むものとは限らないし』

ハロルド

優秀な悪魔被いにして“光の監視者”や“神の友”の名で呼ばれる異端審問官の青年。悪魔被いや異端審問官としての彼は真面目できっちりしているが、仕事から一歩離れれば割と気さくなお兄さん。ノルンやシグとは五つほどしか変わらないものの、培って来た経験や職業柄の観察眼から二人を導くよき相談役でもある。

若いながらもノルン同様聖人としての力を持ち、凄まじい力を有することから異端審問官の中でもかなりの上位に位置する。

実はシグフェルズと同じ孤児院の出身で、教皇アルノルドに悪魔被いとして見出された過去を持つ。

『わたしも強くなりたい。ノルンさんのように』

ラケシス

ノルンやシグフェルズと同じく悪魔被い見習い。魔術の才を持つが、その力を上手く使いこなせない自分を齒がゆく思っているらしくノルンに憧れている。

左目の眼帯は片時も外さず、入浴する時も滅多なことでは外さない。防御や治癒魔術は得意だが、攻撃に関する魔術はからつきし駄目。

家族を下級悪魔に殺害されており、駆けつけた悪魔被いによって救出された。

運動神経は悪くなく、むしろ良いくらいだが、全体的にどんくさい感じが拭えない。

死を視ることが出来る魔眼を持つオストヴァルドの一族の中で最も強い力を受け継いだ。それにより、魔眼の力を片方の瞳にのみ移し、普段は特殊な眼帯によって力を封印している。

『お前のそばにいるのに理由なんていらないだろ。俺は死なない。ラケシスを残しては』

クロト

ノルン、シグフェルズに次いで悪魔被いに近いとされる少年。ラケシスとは幼馴染で魔術もバクルスの扱いも得意である。とっつきづらい印象を受けるが、実は面倒みがいい兄貴肌。

ただラケシスに対して世話を焼いているのはそれだけではない様子。悪魔被いになるうと思つた理由はラケシスが関係している。

ラケシス同様、特殊な力を持つとされるが詳細は不明。少なくとも

もその力を好いてはいない様子。その力を抑えるために魔具である
緑柱石の耳飾りをつけている。

愚かな子供

私には何一つ自由なんてない。力という鎖に縛りつけられた愚かな子供。それが私だ。力を望んだ訳ではない。なのに平凡に生きることは許されなかった。

強大な力を持つ者には責任と制約が付き纏う？ 糞くらえだ。だから私は“全て”を諦めた。何をしたって、どう足掻いたって無駄なのだから。

闇の中に一筋の銀の軌跡が走る。神の祝福を受けた聖杖は鮮やかに悪魔の体を両断した。あまりに一瞬の出来事に断末魔の悲鳴すら上げる暇もない。虚空に消えて行く闇色の粒子を見上げながら、女は銀色の杖——バクルスの武器化を解いた。すると役目を終えた杖は十字架に戻る。

見上げた彼女は女と呼ぶには少々若い。せいぜい十六、七歳だろう。闇の中に浮かび上がる白磁の肌、すらりと伸びた肢体。

薄く紫掛かった白雪を思わせる銀の髪はまるで銀冠のように少女を彩っている。象眼された宝石のようなラピスラズリの瞳は吸い込まれてしまうのではないのかと錯覚させる。

誰もが思わず見とれてしまいそうな美貌だったが、彼女が浮かべる表情のお陰でどこか冷たいような雰囲気を与えていた。

くだらない。本当にくだらない。どうせ私には選択肢なんてないんだから何をしても同じだ。だから私は全てに諦めて絶望しているのだ。

少女はさつさとその場を去り、いつものように報告を済ませてその足で食堂に向かう。彼女が食堂に入った時、殆どの者が席に就いていた。

皆同じように白糸の刺繍が施された悪魔被いの見習いを示す、黒い聖衣を身につけており、中には同じデザインの、こちらは白地に黄糸の刺繍がされた聖衣を纏っている。

食堂全体は見渡すほどに広く、高い天井に部屋の端から端まであるような大きなテーブルがいくつも置かれている。少女——ノルンもまた空いている席に腰掛けた。

瞬間、周囲から囁き声が聞こえてきたが、当然のごとく無視。短い祈りを終えて黙々と用意された食事を口に運んだ。

ノルンたちが暮らすこの世界、シルヴァニスの全ては精霊因子でエレメント・ファクター構成されているという。

そしてこの食堂にいる殆どの者が、世界を構成する精霊因子を視認し、己の魔力によって集束させるという異能の力、魔術を操る扱う者たちだ。その力を持つのはおおそ二千人に一人。

何故、この場にいる殆どが異能の力を持つ者たちなのかというと、答えは簡単だ。ここは異能の力を扱う者たち——魔導師を育成する機関の一つ、教戒だからである。

簡単な食事を終えたノルンは、最後の祈りを終えると、最後まで囁きに耳を傾けることなく立ち上がった。

僕に力があれば両親と兄を救えたのだろうか。僕の目の前で父と母は死んだ。……悪魔憑きとなった兄の手で。あんなにも優しくかった兄さんが笑いながら両親を殺した。

望んだ力など手に入らなかった。

だから僕は教戒に入った。僕に精霊因子を、魔術を操る力はない。だけど後悔はしていない。何故なら全てを忘れて生きていくことなど不可能なのだから。

シグフェルズ・アーゼンハイトは背中を苛む痛みを目を覚ました。目を開ければ一点の染みもない白い天井。辺りはまだ暗く、カーテンの隙間から覗く月の光がまだ夜中だということを教えてくれた。

「くっ……」

断続的に背中を襲う痛みを歯を食いしばって耐える。僅かに声が漏れるが、同室の人物に心配を掛けたくない一心で口を抑えた。

闇の中に彼の金に近い琥珀色の髪が揺れる。普段は穏やかな光を湛える紅茶色の瞳は、今やシーツを掴んで痛みに耐えるのに精一杯だ。

滅多にないのだが、今夜のように彼の背中に刻まれた古傷が激しく痛む時がある。魔術で治そうにも、高位の悪魔によって付けられた傷は、治すことは出来ないと魔法医療師に太鼓判を押されたからだ。

そう、この傷は悪魔に魂を売った兄につけられたもの。だから、ただひたすらに痛みが治まるのを待つしかない。癒えぬ烙印。これがある限り逃げられないのだ。過去からも兄からも。

あれから何分経ったのか、あるいは何十分だったのか痛みが徐々に治まってくる。いつの間にか荒くなっていた息を整え、シーツから手を離す。かなり強く掴んでいたのだろう。随分と皺になっている。

汗で湿った服を着替えようと脱げば、背中には真つ赤な血がついていた。血は直ぐ洗わなければとれなくなる。だがこんな夜中には無理だし、同室のロヴァルが物音で目覚めるかもしれない。

シグフェルズは、側に置いてあるタオルと包帯、着替えを手にとった。滲み出た血を拭き、包帯を巻いて服を着る。着ていた服を血がついた部分を見えないように畳んで同じ場所においた。

着替えたからと言って到底直ぐに眠れるはずがないのだが、明日は実習だ。寝不足で挑む訳にもいかない。シグフェルズは仕方なく瞳を固く閉じ、眠りについた。

愚かな子供（後書き）

この辺りは二年程前に書いたものです。果たして進歩してるんでしょうか……。

憂鬱な朝

かつて女神アルトナは混沌の海より世界を創造した。

神は全ての祖となる精霊因子から空、大地、海を創り、月と太陽と星を浮かべた。そして獣が生まれ、人が生まれた。

僅か七日で創世を終えた女神は、最後に世界を創造して尚余りある秩序と混沌の力を聖なる枢に封じた。けして解けぬ戒めと共に。そうして作られた大地はこう呼ばれた。女神と精霊に祝福されし世界シルヴァニス、と。

——エルヴァ創世記 第一章一節『祝福されし地、シルヴァニス』より抜粋。

教戒の朝は早い。日の出と共に起床し、礼拝堂で朝の祈りを捧げる。

次に掃除に洗濯、食事の用意と割り当てられた役割をこなしていく。

ノルン・アルレーゼは未だ眠気眼のまま、モップを手にして廊下を掃除していた。

廊下と言っても教戒の敷地内であることから無駄に広い。それこそ何十人も行き交えるほどの広さだ。

そんな所を掃除するというのだから当然、時間と手間がかかる。しかしこんな朝早くから駆り出されてやる気が出るはずがない。少なくともこの生活を続けてもう五年近くになるノルンにとってはそうだ。

「ねむ……」

廊下のだ真ん中で堂々と欠伸をする。もし誰かに見られていたのなら間違いなく懲罰ものだが、ここにいるのはノルンだけだ。掃除も早々に切り上げ、モップの柄の先に顎をついてもう一度欠伸をした。

もう直ぐ朝食の時間だと思えば嫌でも憂鬱になってくる。

朝は食欲がわからないから本当は食べたくないのだが、ここ——教戒ではそういう訳にもいかないらしい。

仕方ないので少しでも腹が減るように食前の運動でもしてみようと持っていたモップをバクルスに見立てて振り上げる。

モップは木の棒とは思えない速さで孤を描き、虚空を薙ぐ。絞りきつていなかった水分が飛び散るが、ノルンは気にもとめない。

ふつと息を吐いて腹に力を入れると振り向き様にモップの柄を背後の人物に突き付けた。

その動きは寸分のぶれもない。今まで眠そうにしていた少女と同一人物とは思えないくらいである。

「何か用？」

無表情でモップを突き付けたままノルンは問う。しかし突き付けられた方はたまったものではない。現に金系の刺繍がされた白い聖衣を纏った青年は顔を引き攣らせている。

「ノルン・アルレーゼ殿ですね？」

案の定、出た声も上擦っていた。普通の神父である青年が一介の悪魔被い見習いである自分に何の用があるというのだろう。声を出すのも面倒で頷けば、青年は慌てて礼をした。

確かに悪魔被いは他の聖職者より地位は上になる。だが悪魔被いとは言え、ノルンは見習いであるし、見ず知らずの人間に朝っぱらから呼び止められる理由もないはずだ。

「朝早くに申し訳ありませんが、マラキ大司教がお呼びです。私と共に来て頂けますね？」

面倒なことこの上ないが、それがなんであれノルンに拒否する権利はない。わざわざ聞かずとも連れて行けばいいのに。そう思いながらもノルンは形式的に返事をした。

「分かった。案内して」

青年に突き付けていたモップを下げて、無造作に廊下の端に片付ける。こうしていれば誰かが勝手に片付けてくれるだろう。

それでは、と歩き出す青年にノルンもついて行く。長い回廊を通り、渡り廊下を過ぎた先、マラキ大司教の部屋の前で青年は止まった。

「中へどうぞ」

ノックは必要なかった。ノルンが扉の前に立った時、部屋の中から入りなさい、との声が返って来たからだ。

「失礼します」

部屋の中には二人の人物がいた。美しい金糸の刺繍がふんだんに施された白い聖衣を纏い、大きな机の前に置かれた椅子に腰掛けた壮年の男——ノルンを呼び出したマラキ大司教に後ろ姿しか見えな
いが、若い男だろうか。
彼が纏う黒い聖衣には、悪魔祓いの見習いを示す白糸の刺繍が見える。

「朝早くに呼び出した事は謝りましょう。しかしアルレーゼ君ともう一人、アーゼンハイト君の耳に早く入れなければならぬ事でもあるのです」

ノルンはアーゼンハイトと言われた彼の隣に並んだ。視線だけを隣の人物に向ける。

若い男というよりはまだ少年と言っても差しさわりないだろう。

背はノルンより頭一つほど高い。

絹糸を思わせる髪は金に近い琥珀色で、長い睫毛に縁取られた瞳は紅茶色をしている。

優しげでそれでいて、どこか影を感じさせる美しい顔立ちの少年だった。

予想外の話

「シグフェルズ・アーゼンハイト君」

シグフェルズ・アーゼンハイト。それが少年の名らしい。確かにノルンにも聞き覚えがある。

精霊因子を視る才はあるものの、魔力がないために魔術を操る術を持たない彼は、それでも数多くいる悪魔祓い見習いの中でもノルンと並び、最も悪魔祓いに近いとされている少年である。

彼は確かに魔術を操る術はない。だが悪魔祓いが扱う聖なる武器、バクルスを扱う才があると聞いたことがあった。

「はい」

シグフェルズが頷く。男にしては少し高い、心地よい声だった。マラキ大司教のココア色の目がノルンを捉える。

「ノルン・アルレーゼ君」

「……はい」

ノルンもシグフェルズに倣って返事をする。朝早くから呼び出して置いてどうせろくでもないことなのだろう。

“聖人”という力を崇める反面、利用しているだけ。こんな力、欲しければくれてやる。

出来るならノルンとてそうしたい。だが聖人とは魂の資質だと教皇アルノルド・ヴィオンは言った。本当にそうならこんな自分が、神を信じていない自分が聖人なのは随分な皮肉だとノルンは思う。

「教皇猊下直々の伝えです。両名には本日より、授業とは別に実習について貰います。猊下からは実戦に近い形式だと聞いていますのでくれぐれもお気をつけなさい。詳しい事は君たちの講師であるハロルド・ファース司教から話があると思いますので。私からの話は以上です。わざわざ呼び出してすみませんでしたね」

マラキ大司教の口から出たのは、彼女の予想を外れた、否、予想以上に厄介な話だった。

だがシグフェルズは律儀にもそして淀みなく分かりましたと返事をする。ノルンもやや遅れて彼に倣う。

つまりノルンはシグフェルズと組んで普段の授業とは別に実戦に近い“特別授業”を受けるということらしい。しかも教皇猊下直々となれば相当のことだ。

それに自分たちの講師となる人物、ハロルド・ファースとは弱冠二十一歳にしてノルンと同じく聖人の力を持つ悪魔扱いであり、“光の監視者”の二つ名で呼ばれる異端審問官である。

「それでは失礼致します」

ノルンは形式的な礼をすると真つ先に大司教の部屋を出た。するともう用はないはずのシグフェルズが追って来る。

仕方なく振り向けば、彼はノルンに右手を差し出していた。けだるげに手をとればシグフェルズは柔らかく微笑んだ。

「よろしくね」

「……よろしく」

意外なことにそれほど不快ではない。だがノルンはそれを顔に出す術を知らなかった。だからただ無表情で手を握り返すことだけしか出来ない。

それでもシグフェルズは気を悪くした様子もなく、ノルンに向けて微笑んでいた。

ハロルド・ファース

“聖人”というのは通常の人間と比べて内包する聖の気が格段に多い人間を指すらしい。魔の存在である悪魔に唯一対抗出来る存在、それがノルンを含めた聖人たちだ。

だが聖人の力は何も悪魔だけに対して力を発揮するものではない。

人の身に余る強大な力は当然、人にとっても脅威となる。

表面上はやれ聖人様だと持ち上げていても腹の中は何を考えているか分からない。

利用しようと考えているかもしれないし、力を恐れて化け物だと思っているかもしれない。だからきつと教師や他の悪魔被い見習いたちも同じなのだろう。

聖人の力を恐れ、自分たちとは違う存在だと割り切って接してくる。

だから私が話を聞いていないと分かっているても教師は当てもしない。

ノルンにしてはただの言葉の羅列でしかない聖典のページを適当に開いたまま、上の空で授業を受けていた。

あまりにも暇だったので教室の中を見渡してみる。皆一様にノルンにしては馬鹿みたいに真面目に授業を聞いている。

悪魔被いの見習いとは言っても一応は聖職者だ。様々なことに通じていなければならないと言うことで、神話や創世期についての面白くも何ともない話を聞かされている。

誰もがノルンにはどうでもいい人間である中、一人の少年が目に入った。ここからでも目立つ不思議な金に近い琥珀色の髪。

シグフェルズ・アーゼンハイト。同じ授業を受けたことも一度や二度ではない。

だがノルンがシグフェルズに見覚えがなかったのは、他人に興味のない彼女は一人の顔など覚えていなかったのである。

いつでも友人に囲まれているらしい人間と特別授業何て面倒だったらありやしない。

だけど皮肉なものでいくら嫌でも私に拒否する権利はないのだ。

その時、大聖堂の隣に位置する鐘楼から終了を告げる荘厳な鐘の色が響き渡る。

皆真っ先に教室を出て行く中、ノルンだけは最後まで残った後、教室を出る。

何のことはない。ただ人混みが嫌なだけだ。とその時、扉を閉めたノルンの前に一人の青年が立っていた。

「君がノルンちゃんだね」

まだ若い二十歳前後の青年だ。肩近くまで伸びた鮮やかなワインレッドの髪に片方だけ覗く瞳は深い琥珀色。

正式な悪魔被いを示す黒地に銀系の刺繍が施された聖衣を纏っている。

見惚れるような端正な顔は人好きのする笑みに彩られているが、まるで底が見えない。

何故かは分からないが、ノルンは彼から自分と“同じもの”を感じた。

「誰？」

突然目の前に現れた青年にノルンは不信感を露にする。同じ聖職者だから疑われないとか彼女には皆無らしい。

それに青年からは同じ匂いがする。言葉では表しがたい“何か”が同じなのだ。

「あれ？ マラキ大司教から聞いてない？ オレはハロルド。ハロルド・ファース。一応二人の講師、ってコト」

青年——ハロルドの言葉にノルンは嗚呼、と思った。彼は間違はなく、ハロルド・ファースだ。この感じ、同じ聖人の力を持つ者だからこそ、何かを感じたのだ。思えば教皇アルノルド・ヴィオンと相對した時もこんな感じだったと思う。

何分三、四年も前のことなので分からなかったのも無理はないだろうが。

「そう。それで何か用？」

「冷た！ ノルンちゃん、仮にも講師であるオレにそれはないんじゃない？ これでも忙しんだよ、オレ」

不満そうな声を漏らすハロルドも黙っていれば美貌の神父で通るだろうに。確かに彼の言うことに偽りはないのだろう。

“光の監視者”ハロルド・ファースは教皇直属の悪魔祓いにして異端審問官だ。

本来なら見習いの講師をしている暇などないだろうにご苦労なものである。

「それは大変ね」

「ノルンちゃんはクールビューティだねえ」

感情の籠らぬ声で返せば、茶化しているのかハロルドはお世辞にも笑えない一言を返して来る。本当ならハロルドに対して敬語でなければならぬのだが、本人は全く気にしないようだ。

ノルンにしてもその方が有り難い。何にしてもこれ以上、彼の茶番に付き合うのも勘弁だ。

「用件は？」

「それは勿論、“特別授業”について。シグ君にはもう話したけど、授業が終わった後、大聖堂前に集合ね。詳しいことはその時話すから」

口調はそのままだが、がらりとハロルドの雰囲気が変わる。最初からそうしていればいいのに。きっとこれが本性なのだろう。

普段はふざけた偽りの仮面を被っているようだが、実に食えない人間である。

「それじゃあ、私、行くから」

時間を無駄にしたようで気分が悪い。無駄にしたと言っても特に用事もないのだが、用は気分の問題だ。ノルンは用件を聞くとさっさとハロルドの前から去った。背後から聞こえて来たハロルドの制止の声を無視して。

特別訓練

そこはまさしく“白”と“青”に彩られた空間だった。四方を囲む壁は、まるで空に浮かぶ雲海のように一点の染みもなく、床は澄み切った水面を思わせる透明で、どこまでも鮮やかな青い色をしている。

室内には一切、調度品の類いはなく、ただ水を打ったような静寂が支配しているだけ。

その中心に一人の少女が佇んでいた。歳の頃は十代後半。十六、七だろう。紫掛かった銀の長髪は照明を反射して淡い金の色に染まっている。薔薇の蕾のように愛らしい唇はきつく結ばれ、白磁の肌には玉の汗が浮いていた。

『アークエンジェルス
大天使級第二簡易結界展開。それでは始めて下さい』

ぶん、と虫の羽音のような音がしたかと思うと室内は、薄い光の膜のようなもので覆われている。響いた女性の声に少女——ノルンは声を出すことなく目を閉じ、緩やかに呼吸を繰り返した。そうすることで自らの中の力を高めて行くのだ。

ふっ、とノルンの口から息が漏れる。

次に関かれた美しい瑠璃色の瞳は、何も映していない。外部からの情報を取り込む余裕がないのだ。次の瞬間、揺らぐはずのない床が波紋のように揺らいだ。否、或はそう勘違いしただけなのかもしれない。

それは正しく“翼”だった。だが空を舞う鳥のような羽毛の翼ではない。妖精の羽根に似た、だが全く違う、金粉を散らし透き通った薄青の光の翼。この世の全ての神秘を凝縮したような奇跡がそこ

にあった。

そしてその翼はノルンの背から広がっている。青い翼は言わば彼女の聖人としての力を具現化したもの。

だが人の身に余る力は少女の肉体と精神を激しく摩耗させる。聖人の中でも特に力の強いノルンだからこそだが、彼女の場合は少し状況が違う。

聖人としての力を水、力を扱う聖人を蛇口と例えらるとう。ノルンは確かに他の者と比べて一度に出せる力の量は爆発的に多い。

だが今の彼女は強大な力を制御できていない。つまり蛇口を捻った所で出る水の量を調整出来ないと同じことだ。

開始直後、周りを簡易結界で覆ったのもそれが原因だ。しかし本当にノルンが力を暴走させた場合、大天使級、短時間ながら上級に近い悪魔ですら戒める第二簡易結界でも防ぎきれないだろう。

それから約一時間後、少女はやっと、したくもない特別訓練から解放されたのだった。

特別訓練（後書き）

情景描写が上手になりたいです。後は戦闘描写も。

馴れ合いなどいらない

特別訓練を終えたノルンはシャワーを浴び、大聖堂へと向かった。時刻は三時を少し過ぎた所。

既にハロルドもシグフェルズも待つており、だがノルンは急ぐ様子もなく、緩やかな足取りで歩いていった。

「揃ったね。それじゃ、詳しい説明なんだけど、君たち二人は見習いの中でも頭一つ飛び抜けてる。そこで実戦に近い“特別授業”を受けて貰いたい。既にノルンちゃんはやってると思うんだけど、今日からシグ君と一緒に受けてもらおうよ」

聖人であるノルンは教戒に引き取られてから様々なことを教えられた。

力の扱い方、バクルスや魔術の使い方。生来の才能も相まって彼女は苦もなくその全てを身につけたのだ。

つまりノルンの今の力は他の悪魔抜い見習いと比べて頭一つ以上飛び抜けている。

だからこそ下級とは言え悪魔との実戦もこなしてきた。

なのに今になって何故、シグフェルズと組まなければならないのだ。

他人のフォローなどしたくもない。一人で十分だ。これまでもそうしてきたように。

「どうして？ 理由を言ってくれなければ私は納得出来ない。……まあ、しょうがしまいが私に拒否する権利なんて無いだろうけど」

自嘲気味に笑うノルンは吐き捨てるように最後の一言を呟いた。

他人と馴れ合う気なんてさらさらない。そんな茶番に付き合うためにここにいる訳ではないのだ。

だがその一方で、では何のためにここにいる？　そう嘲笑する自分もいる。

どうせ何を言っても無駄なのだ。愚かな子供、ただの操り人形のくせに。

「そりゃあね、正式な悪魔被いになったからと言っていつも一人で行動する訳じゃない。むしろ魔に近いものと相対するには危険だ。つまり人外の相手をするには連携は大事ってコト。悪魔と違ってオレたちには体は一つしかないんだからね。教皇猊下からのご指示だよ」

いくら悪魔被いが対悪魔戦に特化しているとは言え、所詮は生身の人間。強大な力を持つ悪魔を一人で相手にするには聖人で無ければ難しい。

そのため、悪魔被いたちは二人一組、ペアで行動する場合が多いのだ。しかし二人の息が合っていなければそれは命の危険に繋がる。ノルンとシグフェルズが組まされることになったのは、その予行練習のようなものだ。

「……分かった。反対しようにも真つ当な理由だし。ただし、アーゼンハイト、足手まといになるなら私は遠慮なく切り捨てる。それで構わない？」

例えそうだとしても馴れ合いなどいらない。人の領域^{なか}に入りたくないし、自分の領域^{なか}にも入ってこないで欲しい。

だって他人なんて誰も信じられないから。必要以上の干渉をしな

いで。ノルンはそう言い含めたつもりだった。

「心配しなくても足手まといにならないから大丈夫。君は僕なんか気にしないで」

だがそんなノルンの含みに気付かずにはわりと笑う始末だ。初めてシグフェルズを見た時に感じた影はなんだったのか。確かに自分と同じ“影”を纏っていたのに、微笑む彼からは一切読み取ることが出来ない。

「……そうする。で、ハロルド、今日から早速あるんでしょう？」

「ま、そうなんだけど、いきなり実戦ってワケにも行かないでしょ。ってことで今日は二人で組み手してもらおう。ペアを組む相手の実力を知らないじゃいくら何でも駄目でしょ？」

自身もノルンちゃん、シグ君と呼んでいるくらいだ、ハロルドと呼び捨てにされた事を気にもしていない。

ノルンはシグフェルズの力を知らないし、シグフェルズもノルンの力を知らない。お互いの実力を把握していなければ、上手くいくものも上手くいかないだろう。

「そうですね。僕もアルレーゼさんの実力、知りませんから」

それはそうだ。ノルンは滅多に実技に出席しないし、したとしても力を抑えている。つまりシグフェルズはそう言う意味で実力を知らないと言ったのだろう。

「移動しましょう。視線、気になってしょうがないから」

先程からかなり見られていることにノルンは気付いていた。まあ、ハロルドは中身はアレだが見目だけは良いし、シグフェルズもその容姿と穏やかな性格から普段、人に囲まれていることが多い。

大方一人でいる事が多い自分がシグフェルズや、正式な悪魔被いと共にいるのが珍しいのだろう。

「おっけー、おっけー。早速行こうか」

どこに行くのかと思いきや、ハロルドはそのまま大聖堂へと入って行く。てつきり組み手は訓練場でやるのだと思っていたようだが、どうやら違うらしい。

大体まだ祈りの時間でもないのに。だがここで突っ立っている訳にもいかずにノルンは仕方なく、ハロルドの後に続いた。

本気を出せる相手

まだ祈りの時間ではないので本来なら多くのアルトナ教徒で埋め尽くされる大聖堂も今はひっそりと静まり返っている。中に居るのは先に入ったハロルドとノルン、シグフェルスだけ。

口を挟めるような雰囲気でもないので、黙ってハロルドの後を歩いて行く。

ノルンはこう言う場所は嫌いだ。神への信仰心に満ち溢れた静謐な場所は。

こんな場所にいると嫌でも自分が聖人だと言うことを突き付けられる。

聖人は女神アルトナと同じく、アルトナ教徒から敬われる存在だから嫌なのだ。彼らが崇め、敬うのは聖人としての自分、もしくは聖人という存在だけ。

私自身は何の価値もない人間なのに。馬鹿らしい。馬鹿らしくて笑えてくる。本当にこんな力、手放せるくらいならとつくに手放している。

「そいじゃ、こつちね」

ハロルドが壁に施された鳶の彫刻に触れると表れた地下へと続く螺旋階段。見事な作りからして有事の際に使用される通路でもない。だが地下へと続く階段はどこまでも続いている。下りる事、約五分。ついに終わりが見えた。

「本当なら儀式とかに使われる部屋なんだけど。ここなら周りを気にすることなく戦える」

勿論、許可は取ってるよ、とハロルドが軽く言う。ノルンが特別授業を受けた時に張られたものと同じ、大天使級結界に覆われているため、ハロルドが言った通り、ちょっとやそつと暴れたくらいでは破れない。悪魔すら戒めるものなのだから当たり前なのだ。

天井には最低限に備え付けられた淡い光を放つ照明に、床には何十にも描かれた魔法陣。儀式に使われることだけあり、結構な広さだ。二人の人間が戦うには十分だと言える。

「二人とも早速準備してね。後組み手には練習用のバクルスを使ってもらうから」

とハロルドが差し出したのは銀色の輝きを秘める二本の杖——バクルス。勿論殴られれば痛い、刃引きもされている。ノルンは一本を受け取り、何度か振ってみた。彼女が使うバクルスと比べて若干軽い。

ノルンとシグフェルズ。二人を部屋の中央に残してハロルドは部屋の端に下がる。

「一応、危なくなったら止めるけど、好きにやってね」

ハロルドの声を背に互いに向かい合った。始まりの合図なんていない。どちらともなくバクルスを構え、白い床を蹴った。

甲高い音を立て、二本の銀色の杖が触れ合う。かと思えば一瞬で離れ、また触れ合うの繰り返し。バクルス同士が触れ合う度に金属がぶつかり合う特有の音が響き、火花が散った。

「なかなかやるわね」

何度目かの顰め合いの時、ノルンは唇の端を上げ、楽しそうに笑った。ここまで齒ごたえのある相手も久方ぶりだ。授業の時は間違っても本気など出さないから、直ぐ終わってしまう。自分と打ち合っただけでもったのは、シグフェルズが始めてだ。普段の生活の中で全力を出せる機会なんて限られている。

ハロルドならノルンより腕は上だろうが、何分手合わせしたことはない。

そしてノルン同様、シグフェルズも笑っていた。だが楽しいと思う反面、彼の中にある思いが生まれていた。

卓越した武術の腕に強大な聖人としての力。それに加えて魔術の才まであるという。では何故、彼女はその力を活かそうとはしないのか。

授業には欠かさず出席しているがいつも上の空で本当の力さえ出そうとしない。シグフェルズには分かる。ノルンをずっと目で追っていたのだから。自分が望んでも決して手に入れることの出来なかった力を持つ彼女を。

「そろそろ本気、見せて欲しいな」

「そっちょこそ」

ハロルドは微笑しながら、楽しそうに組み手をする二人を見つめていた。どちらも頭一つ以上、飛び抜けた力を持っているため、普通の授業では物足りないのだろう。

ノルンとシグフェルズ、今の二人は数年前のハロルド自身を見ているようだった。ハロルドも見習いの中で飛び抜けた力を持っていたこともあり、退屈な日々を過ごしていたから。

シグフェルズがノルンのバクルスを受け止めた直後、一瞬、ほんの一瞬だけシグフェルズは突然襲った痛み顔に顔をしかめた。

その瞬間、僅かにバクルスを受け止める力が緩んだのをノルンが見逃すはずはない。力を込め、シグフェルズのバクルスを跳ね上げる。

バクルスが光を弾いて宙を舞い、甲高い音を立てて床にたたき付けられた。

気が付けば息が上がっていた。ノルンはバクルスから手を離して床に寝転がる。

シグフェルズも息を整えるように何度も深呼吸を繰り返すと、同じように身体を床に倒した。

「一応初日だから今日はこれで終了ってことで。休んだらもう戻っていいよ。そいじゃ、オレは先に行くから」

ハロルドは言うなり息も絶え絶えな二人を残し、地下室を後にした。

無い物ねだり

お互いの間に会話はなかった。

ただ二人の息遣いだけが部屋に響く。もう一度深く息を吸ってノルンは身を起こした。思った以上に汗をかいていたらしく、首筋を一筋の汗が伝う。

シグフェルズの方を見れば、彼もまたノルンを見つめている。髪に隠れて表情は見えない。沈黙はどれほどの時間だったのだろう。シグフェルズはぼつりと呟いた。

「……どうして？」

「え？」

その声は小さすぎて聞き取れず、ノルンは思わず問い返す。

起き上がったシグフェルズの顔がよく見えた。

それはノルンが初めて彼を見た時に感じたどこか思い詰めた影のある表情。この少年に最も似合わぬ顔だった。

「……何故、君はその力を活かそうとしないんだ！？ 僕がいくら望んでも手に入らなかった力を持ちながら！」

ノルンは体の芯が冷めていくような感覚に捕らわれた。冷ややかな視線をシグフェルズに投げ掛ける。

何も知らないくせに。力を活かす？ 何に活かせばいいのだ？ そんなの知ったことではない。私はこんな忌まわしい力なんて要らなかったのに。

「……お前に何が分かる！？ 私には選択の自由すらなかったのに

「！！」

ノルンは吐き捨てるようにシグフェルズを鋭く睨み付けた。他人に自分のことを理解して貰おうとは思わない。

だが何も知らないくせに好き勝手言われることだけは我慢ならなかった。

お前に何が分かる？ 何一つ自分で選択出来なかった者の思いなど分かるものか。

もうシグフェルズの顔を見るのさえ耐えられなかった。

ノルンはそれ以上、何も語ることなく、早足で部屋を出た。シグフェルズの耳には彼女が遠ざかって行く靴音だけが聞こえていた。

苛々はいつまで経っても納まらず、ノルンは人知れずため息をついた。夕食を済まして、入浴を済まして中々消えることがない怒り。

だが逆に言えば、ここまで感情を乱されたのも久しぶりだった。

相部屋であるため、自室に戻る気分にもならず、ノルンは回廊を歩いていた。

吹き抜ける夜風が冷たくて心地よい。ふと視線を前方に向けると回廊の手摺りに腰掛けるハロルドの姿があった。

「ハロルド……」

どうしてここに、と言う一言を飲み込んだ。

ただの偶然かそれとも意図したことか。声で気付いた訳でもないだろうが、振り向いたハロルドはノルンの心を見透かしたかのような言葉を口にした。

「そんな顔してると、綺麗な顔が台なしだよ、ノルンちゃん。大方シグと喧嘩でもした？」

ハロルドの問いにノルンは答えない。

だがそれは肯定と同じだった。彼女の答えが分かっていたからこそ、ハロルドは視線をノルンから外し、月明かりが照らす外へと向けた。

「ノルンちゃんにしてみれば、何も知らないくせにって思うでしょ。でもそれはシグだって同じさ。あいつの両親は、悪魔に殺されたんだよ」

ハロルドの琥珀色の瞳は未だ外に向けられたまま、まるで世間話でもするような口調だ。

口元は笑っているような気がしたが、表情は見えない。

「それは……」

別段珍しいことではないのではないか。悪魔抜いを目指す者としてはありきたりと言ってもいい。だがノルンが言い終わる前にハロルドが口を開いた。

「悪魔憑きとなった兄の手で。大怪我を負いながらもシグだけは助かった。まあ、それも本人に言わせるなら生かされたってコトらしいけどね。……シグはただ一人の家族となった兄を悪魔から解放するために力を求めたらしい。けど、あいつには魔術を操る力も聖人としての力もなかった」

「そんな……」

予想していなかった答えにノルンは言葉に詰まる。

ノルンが望まざるとも持ち得た力をシグフェルズは、何一つとして手に入れることが出来なかった。魔術を操る魔力も、彼女が要らないと称する聖人の力も。

だから彼は血の滲むような努力をした。脆弱な人の身で悪魔に対抗するために。だがノルンはその全てを持っていた。しかし彼女は力を嫌うだけでそれを活かそうともしない。それがシグフェルズには許せなかったのだらう。

「勿論、ノルンちゃんにはノルンちゃんの事情だつてあるよね。だから喧嘩両成敗ってことで。人間ってさ結局、無い物ねだりなんだと思うよ。力にしたって何にしたって、必ずしも己が望むものとは限らないし」

力とは案外そういうものだ。望まぬものをノルンは持ち、シグフェルズは望んだものを手に入れられなかった。現実とはなんて残酷なのだらう。

ノルンは力を持つが故に平凡を望み、シグフェルズは力を持たぬが故に力を望んだ。

自身が持たぬからこそ、それを望む。もしかしたらそれは人間の真理なのかもしれない。

変わるべき時

「それに……もういいんじゃない？ 君が自分自身の足で歩き出さなければ、世界は変わらない。世界は君が思うほど、捨てたものでもないさ。だから……」

自分の世界に引き込もっていても自分を取り巻く世界は変わらない。己の意思で歩き出さなければ、何も変わらない。世界は優しいだけではない。残酷でもある。

だがそう捨てたものではないとハロルドは思うのだ。ハロルドが言ったところで、急に全てを理解出来るものでもないだろう。

だが誰かが言ってやらなければ、彼女はその一歩すら踏み出せないかもしれない。

「……分からない。私にとって世界は残酷なだけで優しくなんてなかった」

まさしくそれは、ノルンが初めて他人に明かした本心だった。ずっと自分の世界に閉じこもって来た。与えられる全てを否定して、与えられることさえ諦めて。

ノルンは結局、自分のことしか考えていなかったのだ。人にはそれぞれ違う事情がある。ノルンが力を望まなかったようにシグフェルズが力を求めた理由も。

だけどそれが分かったからと言って何をするべきかなんて分からない。

他人との接し方も、シグフェルズに何て言うべきかも。

「大丈夫なんて言うのは無責任かもしれないけど、こればかりはノ

ルンちゃんの問題だからね。ただ一つ言えることは、物事なんて見る角度で捉え方は違って来る。世界は確かにノルンちゃんに取って残酷かもしれない。だけど、一步踏み出してみればその見方も変わるかもしれないよ？ あ、シグなら西棟の空中庭園にいると思うから」

ハロルドに言われてもまだ、どうすれば良いかなんて分からなかった。

でもシグフェルズに会わないといけない。その思いだけはすんなりと心に入ってきた。

一步踏み出すことは難しいのかもしれない。だけど半歩くらいなら踏み出せるかもしれない。

「……分かった。まだ私の中で答えは出ないけど、このままじゃいけないことくらい分かってる。ありがとう」

いつも険しいと言うか、冷たい印象を与えるノルンの表情が一瞬、和らいだ。ややつつかえながらもハロルドに礼を言くと、どこか吹っ切れたような顔で走り出す。

ノルンを見送ったハロルドはふっと笑い、まるで年寄りのように呟いた。

「若いつて良いねえ……」

柔らかに降り注ぐ月の光が頭上の硝子を通って庭園全体を照らしている。シグフェルズはそこで何をする訳でもなく佇んでいた。ここは心が落ち着く。

今考えれば恥ずべきことだ。感情に任せて彼女に言ってしまった。これからペアを組みというのに最初からこれでは先が思いやられる。

『これはただの嫉妬だ。醜い僕の』

シグフェルズはため息をついて空を仰いだ。

「……アーゼンハイト」

誰もいるはずのない、貸し切り状態である空中庭園に自分以外の誰かの声が響く。驚いて声がした方を振り向けば、そこには最悪の別れ方をしたはずのノルンの姿があった。

初めて見た時のような冷たい顔でもなく、様々な感情の入り交じった、とても一言では言い表せない複雑な表情をしている。

「アルレーゼ……さん」

何故彼女がここにいるのか。そこでシグフェルズはある考えに行き着いた。ハロルドである。大方、彼がこの居場所を教えたのだろう。

「その……上手く言えないけど、私は何も分かっていなかった。アーゼンハイトのこと、ハロルドから聞いた。ごめん、なんて言う資格も私にあるかどうかなんて分からないけど」

力を疎ましく思うだけで捨てたいとばかり願っていた。

だがそれは何て自分勝手な思いだったのだろう。例え望まなくても力を手にした者にはそれ相応の責任がある。

しかしノルンはそれさえも否定し続けていた。自らが望んだ力ではないからと。

シグフェルズのような人の思いなんて考えたことすらなかった。自分一人が苦しいんだと俯いて、前を見ないようにして自分の世界に閉じこもった。

ハロルドの言う通り、このままではいけない。

「その、僕も謝らないと。ハロルドさんから聞いたよ。君のこと。何も知らないのは僕の方だった」

何の変哲もない、だがそれ故に満たされた毎日は五年前、脆くも崩れ去った。

ノルンの家族が悪魔被いから逃げ出した悪魔に襲われた時、彼女は聖人としての力を覚醒させた。

後に駆け付けた悪魔被いたちが見たのは、一瞬で悪魔を消滅させた神々しい輝く翼を背負う少女だったという。

しかし事態はそれで収まらなかった。

聖人としての力を覚醒させた者は本人の意思とは関係なく、教戒の保護下に置かれる。例外はなく、ノルンは家族と引き離され、悪魔被いとなることを運命付けられた。彼女が自分の力を嫌う理由も

もつともだ。

変わり始めた世界

ノルンもシグフェルズも次の言葉が出なかった。何かを言わなければならぬ事は分かっている。だが何を言えばいいのか。それが分からなかったから二人は、沈黙するしかなかった。

静寂が満ちる庭園を淡い月の光が優しく照らしている。

「……手合わせの時、一瞬だけ痛そうな顔したんじゃない？」

シグフェルズの表情は揺らがなかったが、紅茶色の瞳が僅かに見開かれる。彼がノルンのバクルスを受け止めた時だ。ほんの僅かに顔が苦痛に歪み、バクルスを持つ力が緩んだ。

だからこそノルンが勝てたのだが、何かが腑に落ちなかった。

「そう、かな。何ともないよ」

微笑するシグフェルズにノルンは素直に頷かない。嘘だと分かっているから。他人と関わることは好まないが、ノルンは他人の感情を見抜く聡い少女だ。シグフェルズが笑っていても、それが本心ではないことくらい分かる。

だからノルンは自らの勘に従って、普段の彼女なら絶対にしないことを実行した。シグフェルズの聖衣に手をかけたのだ。

「ちょっと見せて」

その一瞬で意味を悟った少年は抵抗するが、ノルンの方が早い。ノルンは思いきり、彼の聖衣を引っがした。

黒い聖衣が取られ、シグフェルズの背中が露になる。白く透き通るように月光を弾くそこには、滑らかな肌に不似合いな醜い傷痕が

刻まれていた。

左肩付近から斜めに右下まで走る傷は、普通の人間には分からないだろうが、微弱な魔素を帯びている。ハロルドがシグフェルズだけが、大怪我を負いながらも助かったと言っていたから、その時の傷だろう。

ノルンは思わず息を呑む。聖人である彼女には手に取るように理解出来る。これは高位の悪魔によって付けられた傷。一種の呪詛。傷を付けた契約者（彼の場合は兄）の命を絶つか、契約した悪魔を滅さなければこの傷は、一生癒えることなく、シグフェルズを苛み続けるだろう。

見られた本人も無駄だと悟ったのか抵抗を止め、されるがままになっっている。

だがノルンはまるで魅入られたかのように傷から目を逸らすことが出来なかった。

「……醜いだろう？ 君が見ても楽しいものじゃないよ」

そう言っただけでシグフェルズは悲しげに微笑すると、はだけた聖衣に手を掛けた。だがそれは伸びて来たノルンの手に阻まれる。

驚いて彼女を見れば、無言で前を向かされた。すると背中に、傷痕を暖かい何かが触れる。ノルンの手だ。

触れられた手の平から暖かい何かが流れて来た。

「……暖かい」

「そう、よかった。悪魔に付けられた傷なら、聖気を当てれば楽になるかと思って」

しばらくすると、じくじくシグフェルズを苦しめていた痛みが無くなった。ノルンの手は淡い光を帯びて輝いている。

魔の存在である悪魔に付けられた傷なら癒すことは出来ないが、聖人の力で痛みを和らげることが出来るかもしれないと思ったからだ。

「私は……人との付き合い方なんて分からない。これからアーゼンハイトに迷惑を掛けるかもしれない。それでもいい？」

傷痕に手を当てたまま、ノルンは問う。前を向いているため、シグフェルズの顔は見えない。ありがとう、と言ってシグフェルズは服を直し、振り向いた。

「アルレーゼさんのペースでいいよ。僕は気にしない。君は君なんだろう？」

初めて話したあの時と同じように右手を差し出して来る。そこに彼を見る度にどこかで感じていた影はない。綺麗な紅茶色の瞳を細めて笑い掛ける。暖かな光がそこにあつた。

シグフェルズの本心からの笑顔を見たノルンの表情が和らいだ。それはシグフェルズが初めて見る彼女の笑顔で、思わず何度も瞬きする。

綺麗だ。とシグフェルズは思う。ノルンは驚く少年に気付かず、手を取ってしっかりと握り締めた。

「ありがとう、アーゼンハイト」

「どういたしまして。あ、僕のことはシグでいいよ。アーゼンハイトもシグフェルズも長いから」

「分かった。じゃあ私もノルンでいい。私だけ呼び捨てにするのも変だから」

はにかみながらノルンは顔を逸らした。第一印象は、少し冷たい人なんだろうかと思ったが、そうでもないらしい。感情を表に出すことが苦手なのかもしれない。

「改めてよろしく、ノルン」

「よろしく……シグ」

この時、ノルンは初めて自分の世界から一步を踏み出した。それはほんの僅かな一步かもしれない。それでも彼女の世界を変えるのには十分。

ノルン・アルレーゼはまだ歩み出したばかりだ。

変わり始めた世界（後書き）

やっと第一章、終了です。でも先はまだまだ長いです……！

期待と落胆

聖霊祭。現在では女神アルトナが天地を創造し人や獣を作り出した日を祝う祭であるが、もとは天の恵みに感謝し、失われた魂を悼むために始められたものである。

普段は静かな雰囲気にも包まれる法都シェイアードも、この時期ばかりは少し活気づく。

それは教戒の中でも同じことで、ノルンたち見習いの悪魔抜いも含め、聖職者たちは色々忙しい月なのである。現に今も普通の授業ではなく、聖霊祭で送りの聖火の後に歌う賛美歌の最終練習中だ。普段なら彼女たちが纏う聖衣は黒だが、当日は儀礼用の聖衣に着替えるため白になる。

今、ノルンが着ているのも白の聖衣だ。白は嫌いだ。でも今はシグのお陰でそれ程嫌いではない。今までの自分なら考えられない、驚くほどの変化だった。

最後に高音が伸び、パイプオルガンの低い音色で歌は終わった。聖霊祭まであと三日。解散が済むと我先にと大聖堂を出て行く。未だ人の波に慣れないノルンは、長椅子の端に座って待っていた。下を向いて考え事をしていれば、誰かが自分の名を呼んだ。

「ノルン」

ここ二週間ほどで聞き慣れた穏やかな声。緩やかな動作で顔を上げれば、そこにはノルンと同じように白の聖衣に身を包む、シグフェルズ・アーゼンハイトの姿がある。

儀礼用の聖衣は、まるで彼のために誂えたかのように良く似合うが、悔しいので絶対に言ってやらない。

「シグ」

「行こうか」

頷いて立ち上がる。あれからノルンは、シグフェルズと共にいる事が多くなった。

彼と共にいると、見えて来るものも多い。例えば彼は他人を引き付ける不思議な魅力があること。

ごくたまに考えにふけて、憂いを帯びた表情をしている時がある。

「ノルンはやっぱり白が似合うよ」

後は感情表現が豊かと言うか、割と思ったことをストレートに口に出すらしい。

だがノルンは逆に返事に困ってしまう。ありがとうと言うべきか、それともそんな事ないと返すべきか、はたまたシグの方が似合うと言えいいのかさっぱり分からない。

「白はあまり好きじゃない……でもシグのお陰でそれほど嫌じゃないから」

そう言うのが精一杯だ。シグフェルズはノルンが呟いた最後の一言が聞こえていなかったらしく、そっか、とにこにこしながら返すだけ。

やっぱり感情を他人に伝えるのは苦手だとノルンは思った。

「そうだ。明日街に出ようと思ってるんだけど、ノルンも一緒に来る？」

誰も居なくなつた回廊を歩きながらシグフェルズが尋ねる。もう五年近くシェイアードに居るが、ゆつくりと街中を歩いた経験は殆どない。もっぱら教戒の中から眺めるだけだ。

それに今までは街に出る余裕なんてなかったからだ。

「私は……どちらでもいい。けど通り魔のお陰で当分外出禁止じゃないの？」

ここ最近、シェイアードでは聖職者を狙った通り魔事件が多発している。幸い死者はまだ出ていないが、大怪我を負った者もいる。

犯人がまだ捕まっていない以上、無闇に歩けない。それはノルンたち、見習いの悪魔抜いたちも同じである。

「それがね、通り魔は中央区から離れた東区に現れるみたいなんだ。一人は流石に無理だけど、中央区は人も多いし、二人なら外出届けを受理してくれるって聞いてね」

シグフェルズの言葉に軽い落胆を覚えたノルンは、そんな自分に驚いて立ち止まる。シグフェルズが心配してどうしたの、と声を掛けてくるが、まるで耳に入らない。

彼が自分を誘った理由は分かりきっている。なのに一体何を期待していたのだろうか。では何故、自分だったのか。多くの人間に囲まれているシグフェルズなら、わざわざ自分を誘わずとも誰か居る

だろうに。

考えれば考えるほど、シグフェルズ・アーゼンハイトと言う人間が分らない。

「ノルン？」

自分の名前を呼ぶ声と間近にあるシグフェルズの顔。

暖かい紅茶色の瞳が心配そうにノルンの顔を覗き込んでいる。

ノルンは慌ててシグフェルズから顔を背けた。心臓に悪過ぎる。

これではいつもと同じではないか。乱れた呼吸を何とか整えて顔を上げた。

「どうかな？ 十時頃から行こうと思うんだけど、大丈夫？」

シグフェルズの方はノルンの変化に微塵も気付いていない。

ここまで鈍感なら、きっと他意なんてないのだろう。だがそれ故に腹が立つ。

しかしそれを彼にぶつけても意味が無いことくらいノルンにも分かっている。という訳で平静を装って頷いた。

「ありがとう。明日、部屋まで迎えに行くから」

「え、あ、ちょっと……いいつてば」

シグフェルズは顔を綻ばせて礼を言い、一方的に迎えに来ると告げてノルンを追い越した。

良いと言っているのにまるで聞こえていない。

「全く……仕方ないわね」

だが言葉とは裏腹にノルンは笑っていた。

たまにはこう言うのも悪くないかもしれない。行きたいような、行きたくないような相反する気持ちを楽しみながら、緩やかな足取りで自室の扉を開けた。

微妙な距離

ノルンは滅多に見ることのない姿見の前に立っていた。いくら休日と言えど聖職者は聖衣を身に付けなければならぬため、今日も変わり映えのしない黒の聖衣である。

せめて髪くらいはいつもより丁寧に梳かしたのだが、どこかおかしい所はないかと気が休まらない。少し前の彼女なら考えられない変化だった。

『馬鹿、みたいね』

そう、忘れてはならない。世界は優しいだけではないことを。完全に信用した訳ではないが、シグフェルズとハロルドは少なくとも信頼に値する人物……だと思う。

だがそれでも他人が自分にした仕打ちは変わらない。

結局、ノルンは人を信じるのが怖いのだ。信じれば裏切られるかもしれない。信頼が深ければ深いほど、突き放されるのが怖い。

裏切られるのが嫌なら人と関わらなければいいのだ。

でもそれを心の中で躊躇う自分がいる。ノルンには自分が分からなかった。

その時、控えめなノックの音が聞こえた。同室の者も出掛けているから訪問者は分かっている。時間は約束の丁度五分前だ。

ノルンは最後にもう一度姿見を一瞥するとはい、と短く返事をして扉を開けた。

「ちょっと早かったかな？」

開けた扉から部屋の中の時計を見比べ、はにかむシグフェルズの

姿があった。

ノルン同様、黒の聖衣を纏い、首からバクルスでもある銀の十字架を下けている。柔らかい琥珀色の髪に温かみのある紅茶色の瞳。

容姿だけを見れば自分よりよほど聖人らしいと思う。光を受けてきらきら輝く髪も、優しさを帯びた穏やかな瞳も。だがそんな仮定の話に意味はないし、シグフェルズも望まない。

「そんなことない」

己の中に渦巻く様々な思いを振り払い、ノルンは答えた。

外出届けは既に提出しているため、後は街に出るだけだ。ノルンの胸元にもシグフェルズと同じように十字架に変えたバクルスが下げられている。

いくら休日でシェイアードの街中と言っても悪魔祓いの命と言えるバクルスは手放せない。必要なくとも持っていないければ不安だということも勿論あるのだが。

「行こうか」

「そうね」

部屋を出て鍵をかける。鍵がちゃんと閉まったことを確認すると鍵を仕舞い、シグフェルズに並んで歩き出す。

二人の距離は正につかず離れず、微妙なものだったが、今のノルンにしては上出来だった。

二人が足に向けたのは中央区、教戒の近くでもある。ノルンとシグフェルズは一通りの買い物と昼食を終え、大通りを歩いていた。シグフェルズの用事は彼が持つ紙袋の中、包帯や痛み止めなどの薬品類である。見習いの悪魔祓いには必要な殆どの物品が支給され

るが、それにも限りがあるし、薬品類は手に入らない。

だが傷を極力人に知られたくない彼は教戒で事情を話して貰うより、街に出たほうが気が楽なのだ。痛み止め程度ならば医師の処方も必要ない。

勿論、シグフェルズの傷は魔術では治せないし、薬品も同様だ。どうにもならない痛みばかりは痛み止めを飲んで我慢するしかない。

行きかう人々に目を向けながらノルンは小さくため息をついた。ずっとじろじろ見られている。

自分もシグフェルズも。

「……見られてる」

「僕は慣れてるし、ノルンは綺麗だからね」

不機嫌そうに呟けばシグフェルズがくすりと笑う。何が可笑しいのかと睨み付ければまたにつこりと笑われた。

シグフェルズの口から発せられた言葉にノルンは穴が空くのではないのかと言うくらい、少年を凝視していた。綺麗、という単語が出るとは思わなかったからだ。

「そう……初めて言われたわ」

シグフェルズが見られる理由は分かる。ノルンなどよりずっと“綺麗”だから。

自分を嫌い、世界を嫌うノルンなんかより。向けられる視線は憧れに羨望と言ったところか。

だが複数の視線に混じる微かな殺気。それに気づかないノルンではない。一応これでも悪魔被い見習いなのだ。

「シグ……」

「分かつてる」

小声で隣を歩くシグフェルズに声を掛ければ、彼は前を見据えたまま頷いた。さりげなく歩く速さを上げて角を曲がった。まだ視線は感じる。気のせいではない。狙いは完全に自分たちということか。二人は大通りを抜けて人の疎らな路地へと入った。だが角を曲がった先に、先程まで一緒に居たはずのノルンの姿はない。シグフェルズただ一人だ。

少年は何事もなく、しかし神経は研ぎ澄ませて歩き続ける。人通りが全く見られなくなったところで胸元の十字架に触れると、銀色の杖——バクルスに変化させる。そして背後にいるであろう人物にバクルスを突き付けた。

「僕に何か用かな？ いや、正確には僕たちに、かな？」

黒き翼、背負う者

シグフェルズがバクルスを突きつけた先にいたのは三十代前半ほどの女だった。何の変哲もない普通の恰好をした黒髪の女性。だが見る者を惑わせるような紫水晶の瞳だけが妖しい光を宿している。

女は銀の杖を向けられてもなお、平然としていた。それどころか血のように紅い唇を歪め、薄笑いを浮かべている始末だ。

「人であつて人ではない。『中』にいるお前は誰？」

消えたはずのノルンが女の背後にいた。手にはシグフェルズと同様にバクルスが握られている。

ノルンの言葉に女は声を上げて笑った。心底面白そうに、或いは何かを楽しむように。

「へえ、最小限に抑えたボクの力を感知するなんて君、普通の人間じゃないね。光に愛された者、聖人か」

そう言つて女は笑った。声は確かに女のものだったが口調はまるで若い青年のようだ。明らかに食い違ふ口調と容姿にシグフェルズが困惑する。

ノルンとシグフェルズ、二人にバクルスを突きつけられようと女は笑みを絶やすことはない。顔は未だ不気味とも思えるほど、蠱惑的な笑みに彩られたまま。

「私のことはどうでもいい。何者だと聞いている」

こうしてただ立っているだけで肌が泡立つ感じがする。目の前の人間は武器さえ持っていないと言ふのに、この背筋を駆け上がるよ

うな悪寒は何だ。

そしてそれはノルンだけが感じている訳ではない。バクルスを構えたままのシグフェルズも言い表せない何かを感じていた。

「ボクはボク、ただの悪魔さ。じゃあ、試してみる？」

ノルンはバクルスを握る力を強める。馬鹿な、ここまで力の底が見えない悪魔がただの悪魔であるはずがない。沈黙を保つノルンに女は嗤った。

瞬間、女が一瞬で掻き消える。驚くノルンの背中に強い衝撃が走った。

突き飛ばされたとかそんな次元ではない。咄嗟に足に力を入れたが踏み止まらない。吹き飛ばされる。

「ノルン！」

壁に叩き付けられる寸での所でシグフェルズの腕の中に包まれていた。

だがノルンを庇ったシグフェルズが背中から壁に叩き付けられる。かなりの衝撃だ。少年は膝を付いたまま立ち上がれない。

「シグ！」

「ふうん、でも聖人の力はそんなもんじゃないでしょ」

今や女の背からは悪魔、いや、堕ちた天使の証である黒き翼が生えていた。ノルンは自分の代わりにまともに衝撃を受けたシグフェルズを持たれさせて立ち上がる。

「いいわ。相手してあげる」

言うなりノルンは石畳を蹴って女に肉薄する。薄暗い路地にバクルスが閃いた。だが女は次々とくり出される一撃を難なく受け流す。しかも素手でだ。魔力を纏わせているのだろう。女の両手は薄い紫色の燐光を帯びている。

シグフェルズはノルンに加勢するどころか未だ立ち上がることさえ出来ずにいた。背中が燃えるように熱い。

魔術を操る魔力を持たない彼だが、精霊因子を視る力はある。

シグフェルズの目には確かに、僅かだが集まり始める光の精霊因子が見えていた。

「その余裕、気に入らないわね。嫌いよ、そんな奴は」

バクルスを振り下ろしながら、ノルンは瑠璃色の瞳で女を睨み付けた。不快感を露にする彼女に女は声を上げて笑う。いや、嗤った。だが女は攻撃を受け止めるだけで、何もしようとはしない。まるで玩具を見つけた子供が楽しんでいるかのように。

「いい加減、本気出してくれないかな？ それともアイツを殺せば本気になる？」

シグフェルズを見据えた紫の瞳に狂気の光が宿る。さあと血の気が引くのが分かった。言ったからには悪魔は自分を殺すだろう。しかしシグフェルズにはあの時と同じように強大な悪魔の力に抗う力はない。

それは瞬く間の出来事だった。女が凄まじい速さでノルンの脇をすり抜け、シグフェルズに迫る。

「白き翼の眷属よ、我が声に応えよ。其は遙か悠久の時に潰えし意志にして遺志。我が導きにて揺らめく魂を光鎖へと変え、悪き者を

縛めよ！ レージング・レイ」

だがそれを許すノルンではない。少女の口から紡がれた詠唱――精霊の詩により導かれた精霊因子が集束する。ノルンの眼前にまばゆい魔法陣が描かれたかと思うと陣から現れた無数の光の鎖が女の身体を拘束した。

この女、いや悪魔が連続で発生している通り魔事件に関係していないはずがない。

滅するよりも捕らえて思惑を聞き出さねばならないだろう。だが悪魔の身を拘束するのは、彼等を消滅させる以上に難しい。

「小賢しい」

悪魔は舌打ちし、鎖から逃れようともがくが、ノルンも負けじといつそう魔力を込める。

鎖を破壊しようとする悪魔の力と拘束しようとするノルンの力がぶつかり合い、光鎖が悲鳴を上げた。

墮天使

悪魔を縛めている鎖に僅かな亀裂が入った。あり得ない。

だが即座に否定する。現実を見なければ。ノルンは焦らず、鎖を維持することだけに全神経を集中させる。それでもこのままでは碎けるのも時間の問題だ。

「墮天使、上級悪魔……」

ノルンの顔には焦燥が刻まれていた。女は間違いなく悪魔の中でも高位に属するものだ。でなければこの鎖に抗えるはずがない。

レージング・レイは悪魔や墮天使といった魔の存在を拘束する術であり、ましてや聖人の力を込めた鎖に亀裂を入れるなど、下級や中級と言った悪魔では不可能である。

しかも苦痛に顔を歪めることさえしない。それどころか笑っているのだ。艶やかに、それでいて優雅に。

「ふふふ……そうだよ。ボクもさ、まだ君たちと遊んでたいけど、早く戻ってうるさいしさ。だから残念だけど時間切れだね」

すると突然、女の体が不自然に歪んだ。次に視界に入ったのは女ではなく青年。

年の頃は二十歳前後と言ったところだろうか。息を呑むほどに美しい青年だった。

美しいと言う言葉でさえ陳腐に思える所か、どんな賛辞でさえ青年を表現するには至らない。

さらりと流れる紫の髪に、長い睫毛に縁取られた蠱惑的な瞳は、大粒のアメジストを思わせる。

紅も引いていないと言うのに、形の良い唇はいやに赤い。笑みの形に歪められたそれは禍々しいほど艶やかだった。

悪魔、それも上級に属する悪魔はまるでこの世のものではないような美しさを持つとされていた。それを考えれば、この悪魔は間違ひなく上級であろう。

もし彼が纏う翼が白であつたなら、正に神の意志を伝える天の使いであつたに違ひない。

しかし女神に仇なした背徳の証である黒の翼を持つ彼の美しさは毒を含んでいる。艶やかな薔薇に棘があるように、青年の美しさは禍々しいとしか表現出来なかった。

その時だ。それまで一部にしかなかった亀裂が鎖全体に走つたのは。

『砕ける……！？』

青年はまるで蛹が羽化するように緩やかに両翼を広げる。

刹那、甲高い音を立てて光の鎖が四散した。彼を縛めるものはもう何もない。ふわり、と爪先から青年の体が宙に浮く。

「それじゃあ、サヨウナラ。結構楽しかったよ、悪魔被いサン。今日は見逃してあげるけど、縁があればまた会つ時があるかもね」

「待て！」

ノルンが聖気を込めたバクルスを投擲するが、するりと青年をすり抜け壁に突き刺さる。次の瞬間、悪魔の姿は二人の目の前から忽然と消えていた。

もうどこにも悪魔の痕跡は残っていない。幻のように消え失せて

しまった。やはりただの悪魔ではない。こうして生きていられることは僥倖だろう。

気が抜けた所で体が震え始めるが、それより先にすることがある。

「シグー！」

急いでうずくまるシグフェルズに駆け寄った。

彼の苦しみようは尋常ではない。既にバクルスを維持することも出来ず、銀の十字架は石畳に転がっている。大きく肩で息をする彼はどう見ても大丈夫ではない。

触れた背中中は黒い服のために分かりづらいが、血で滲んでいた。

ノルンは彼の血がついた手を握り締めると、一言断わって聖衣を脱がせて傷の具合を確かめる。白い肌に無残に走る傷、兄の手によって付けられた傷が開いていた。

確かに壁に叩きつけられたが、その衝撃で傷が開くはずはない。もう三年前の傷だ。

だが現に背中からは鮮血が滴り落ちている。早く止血しなければ……。

シグフェルズが持っていた紙袋の中から包帯を取り出し、きつめに巻いて行く。

本来なら消毒したいところだが生憎ここにはない。治癒魔術が使えれば一番良いのだろうが、ノルンに治癒魔術の才はないし、この傷には魔術も効かない。

「ごめん、手間掛けさせて……」

俯いたままのシグフェルズが搾り出すように声を発した。

この様ではとても兄と契約した悪魔を倒し、兄を救うことなんて

出来ない。

ノルンに助けられた不甲斐ない自分に腹が立った。

悔しい。シグフェルズではノルンのように悪魔と対等に渡り合うことなんて無理なのかもしれない。彼女のように聖人の力も持たず、魔力も持たない自分には。

「そんな事、気にしてないから。立てる？」

「大……丈夫」

シグフェルズは心配ないよ、と微笑むとふらつきながらも一人で立ち上がり、落ちていた紙袋を拾った。

無理しなくていいのに。辛そうに笑う彼を見るのは心が痛い。

だがシグフェルズが背負う覚悟を知るが故に、ノルンは黙って彼の隣に並ぶことしか出来なかった。

聖人

シグフェルズに歩調を合わせ、ノルンは教戒へと戻って来た。その途中、シグフェルズは何度か辛そうな顔をしたが、最後まで助けを借りることはなかった。恐らくは通り魔と関係がある悪魔については、ハロルドに報告すべきだろう。異端審問官であり、正式な悪魔祓いである彼なら詳しい事情に通じてもいる。

「あれ……ハロルド？」

「取り込み中みたいだね」

大聖堂の前に差し掛かった時だ。ノルンの視界を鮮やかなワインレッドが視界を横切った。

シグフェルズの方も顔色も良く、だいぶ楽になったらしい。

確かにハロルドである。しかも一人ではない。誰かと一緒にいるようだ。遠くからでは分かりづらいが、恐らくはノルンたちと同年代の少年少女たちだろう。

金髪の少女と青灰色の髪の少年、ライトブラウンの髪をした少年、董色の髪の少女に朱色の髪の少年の五人である。

「聖人……」

五人の少年少女をじっと見据えていたノルンがぼつりと呟いた。瑠璃色の瞳は五人の中のただ一人に向けられている。すぐに気づいた。彼は『普通』ではないと。

そんなノルンにシグフェルズは不思議そうな顔をしている。

「え？」

「茶の髪の彼……私と同じ聖人」

茶の髪の彼、と言うのは優しげな面差しをした深緑の瞳の少年のことだろう。

聖衣を纏っていないことから教戒の者ではない。

だが何故だろう。ノルンもシグフェルズも彼に見覚えがあるような気がしてならなかった。

聖人と言うのは魂の資質だというが、こうして離れていても分かる強い力だ。

しかしまだ覚醒はしていない。

会話までは聞こえなかったが、こちら気付いたらしいハロルドが二人に視線を向ける。僅かな口の動きから、ノルンは彼が何かを言ったのが分かった。

「そこ……で待て？」

多少とは言え、ノルンにも読唇術の心得はある。

自分達の様子を見て何かに気付いたのかもしれない。こちらを一瞥したハロルドの顔は真剣そのものだった。

後ろに控えていた二人の騎士がライトブラウンの少年を連れ、いずこかへ消えて行く。

残された四人は大聖堂に向かってようでハロルドが踵を返し、こちらに向かって来た。

「シグ、無理はするなと言っただろ。一体何があった？」

ハロルドの視線はシグフェルズ、正確には背中に向けられている。普通なら一見したところで気付きはしないだろうが、ハロルドは

血の匂いを敏感に感じ取った。

シグフェルズは街での出来事を包み隠さず打ち明ける。

通り魔との何らかの関係があると考えられる悪魔の存在、聖人であるノルンの力を破ったことまで。

「……先ほど、通り魔と思しき人物が拘束された。だがこれまでの事件を一人で起こしていたとは考えられない。何らかの繋がりがあると考えてまず間違いないな。悪魔についてはオレから報告しておく。ノルンちゃん、シグを部屋まで頼める？」

「分かった。……でも一つだけ。あれはただの悪魔じゃない。下手をすれば公爵級かもしれない」

これまで起こった通り魔事件は決して少なくない。これまでの事件をたった一人で起こしていたとは考えづらいだろう。

たった一人に破られるほど教戒の包囲は甘くない。協力者や仲間がいると考えるのが自然だ。

そう、例えばノルンとシグフェルズが相対した悪魔のような。

ノルンと戦つてもなお、あの青年は本来の力の何分の一さえ出していなかった。

人間など初めから相手にする気がなかったのだろうが。

彼らにとって邪魔になるはずの自分達すら見逃したのはただの気まぐれか、それとも……。

「だろうね。悪魔の言葉からすると心配ないと思うんだケド、しばらくの間は一人で行動しちや駄目だからね。胆に銘じて置いて」

ハロルドが言うように、悪魔の気が変わる可能性だってある。教戒の中にいる限りは安全だろうし、複数だから大丈夫だと言う保障

もないが、一人よりはマシなはずだ。

ノルンとシグフェルズは一にもなく頷いたのだった。

辛い記憶

久々の休日と言うこともあり、シグフェルズと同室の人間はまだ帰って来てはいなかった。

他人と関わりたくないノルンと、傷を知られたくないシグフェルズには好都合である。

自分でするからと言い張るシグフェルズを黙らせて、ノルンは塗らしたタオルで傷口を綺麗に拭き、新しい包帯を巻きつける。

巻いたばかりの包帯は血を吸って紅く染まっていた。
有無を言わず服を着替えさせ、シグフェルズをベッドに寝かせる。

ノルンは傍にあつた椅子を引き寄せて腰を下ろした。

「大丈夫だって言ってるのに……」

不満そうに呟くシグフェルズを睨み付ければ、ぱつと視線を逸らされる。

慣れているのか知らないが、見ている方の身にもなったもらいたいものだ。

そう考え、ノルンは彼を心配していた自分に気付いて微妙な顔になる。

「どうかした？」

「別に、何でもない。少し眠ったほうがいいんじゃない？」

絶対にそんな事はない。心配なんてしていない。

ただ目の前で倒れられるのは勘弁してもらいたいただけだと言い聞

かせて平静を保った。

シグフェルズはそんなノルンの変化には気づいていないようだ。

「そう言われても直ぐに眠くはならないよ」

「じゃあ、何か話しましょう」

そうは言ったものの、何を話せばいいか分からなかった。

人付き合いとは無縁だったせいであるが、せめて言う前に考えればよかったと思う。

だが言ってしまったことは仕方ない。

ノルンが黙っていると、シグフェルズが口を開いた。

「……僕の話聞いてくれる？」

「ええ」

窓を眺めている彼の顔はノルンから見えない。

ただシグフェルズが出した声が僅かに震えていることにノルンは気付いていた。

だからせめて自分くらいはそれに気付いていないように何でもなく振舞う。

「……三年前の僕は間違いなく『幸せ』だった。優しい両親と自慢の兄、何の不満もなかった。それなのにあの日、酷い雨の日だった。……ずぶ濡れで帰ってきた兄さんを心配して母さんがタオルを持って駆け寄った次の瞬間、兄さんは持っていた剣を……母さんに振り下ろしたんだ」

三年前のこととはいえ、全てを口に出す事は躊躇われた。

こうやって話しているだけでありありと思い出せる。忘れたことなんて一日もなかった。

幸せであることが当たり前だった。

優しい両親と自慢の兄、ずっとこの幸せが続くんだと何の疑いもなく信じていた毎日。

それは三年前のあの日、無残に打ち碎かれる。

激しい雨の日、いつものように母は夕飯の仕度をして、シグフェルズと父も台所で雑談をしながら兄の帰りを待ち侘びていた。

ドアが開く音と激しい雨音に兄が帰宅したことを知った母は、タオルを手にして玄関に急ぐ。

シグフェルズも同じように少し遅れて母の後に続いた。

だが次の瞬間、シグフェルズの目の前で、兄は持っていた剣を母に振り下ろしたのである。剣が肉を裂く嫌な音が届き、赤い、赤い花が咲いた。

その時の兄の表情を、シグフェルズは忘れる事が出来ない。忘れられない。血に濡れた剣を持って妖艶に微笑んでいた兄を。

母と同じはずの^{ほしほ}様色の瞳ではなく、妖しい赤紫の瞳で兄は笑っていた。優美に、そして妖しく。

「兄さんの異変にいち早く気付いた父さんは僕を庇って……僕の代わりに斬られた。兄さんは動かなくなった父さんをまるで汚いものでも見るように退けると僕に……」

話し始めてしまえばもう、自分の意思では止められなかった。言葉が堰を切ったように溢れて来る。

シグフェルズは無意識に自分の腕を掴み、かき抱くように震えていた。見間違いではない。あの時、兄の背中には確かに堕ちた天使

の証である漆黒の翼があった。

全身に父と母の返り血を浴びても尚、兄は笑っていたのだ。まるで夢を見ているように。

兄の目は異常であったとしかいいようがない。人を惑わせる色香を含んだ赤紫の瞳に映っていたのは“父”と“母”ではなかったのだ。

人間という取るに足らない存在。そしてシグフェルズを視界に捉えた兄は、血のように赤い唇を歪ませた。

「シグ、愛しい弟、か……ふふふふ、あはははは！」

狂ってる。そう思った。あれは優しくかった、自分の自慢であった兄ではない。人の姿をした悪魔だと。

そう思わなければとても正気ではいらなかったのだ。

「もういい。もういいから……」

これ以上、見ていられなかった。ノルンは無言を言わず、シグフェルズを横にしてブランケットを被せた。そうすることでしか彼を止められなかったから。

ノルンにはシグフェルズの気持ちは分からない。けど想像することとは出来る。

でも何故彼は、思い出すことさえ辛い記憶をノルンに語ったのだろ。だって自分とシグフェルズはただの他人なのに。

「ごめん……」

「……どうして謝るの？ シグは何も悪くない」

何を謝ることがあるというのだろう。

思い出すことも辛い記憶を他人に話すだけでも勇気がある。

ノルンとて自分が教戒に保護された経緯など話したくもない。

「そうだね。でも、ごめん」

「馬鹿。辛い時くらい笑わなくてもいいじゃない」

するとシグフェルズは困ったように笑った。謝らなくていいのに。ノルンは胸辺りまであるブランケットを引つ張り、顔まで被せた。ノルンは嬉しい時ですら笑えなかった。笑い方を知らなかった。それなのにシグフェルズはいつも笑っていた。辛い時でさえ無理をして。

「うん……ごめん」

「だから謝らなくていい」

一体何回謝るつもりなのだろう。だけどシグフェルズらしいとノルンは思う。

少年の顔にブランケットを被せたまま、ノルンはシグフェルズに気付かれないように小さく笑った。

幸せだったあの時

それからしばらくして、規則正しい寝息が聞こえて来る。シグフエルズは口では平気だと言っていたが、やはり疲れていたらしい。このまま部屋を去るのは憚られてノルンは椅子に腰掛けたまま、部屋の中を見回した。

ベッドや机など備え付けられた物を除いて、部屋は簡素なものだった。絨毯やカーテンも無地であり、愛想の欠片もない。

いつも人に囲まれている人物の部屋とは思えないほどがらんとしている。まるでいつ居なくなってもいいような、そんな印象を受けた。

唯一目についたのは戸棚の上に置かれた写真立て。そこには幸せそうな家族が写っていた。寄り添って笑う男女に、十代前半だと思われる琥珀色の髪の少年。そして彼の隣に並ぶのは十五、六歳ほどの亜麻色の髪の少年だ。

こうして見ればシグフェルズの髪の色は母譲りで、瞳の色は父譲りだと分かる。

だがその幸せが壊れる日が来るなんて、写真の中で笑う誰もが予想出来なかっただろう。悪魔と契約した彼の兄でさえ。

屈託のない笑顔を浮かべる少年はとても両親を殺すような人間には見えなかった。

ノルンが写真に見入っていたその時、外の扉を誰かがノックする音が聞こえる。

ノックをすると言うことは、ルームメイトではないのだろう。

気は進まないが、ぐっすり眠っているシグフェルズを起こすこともしたくない。ノルンは静かに立ち上がり、扉を開けた。

次の瞬間、猛烈に閉めて鍵をかけたいと思ったのは許して欲しい。

「あ、やっぱりここにいたんだ」

扉の外にはにつこりと笑うハロルドの姿があった。思わず扉を閉めかけたノルンだが、素早く彼の手が滑り込んで来たためそれは叶わなかった。

どこまでも食えない人物だ。ハロルドは不機嫌そうなノルンに構わず尋ねる。

「シグはどう？ 寝てる？」

「ええ」

それにしてもハロルドがわざわざ訪ねて来ると言うことは、何か用事でもあるのか。ノルンの顔から何かを察したハロルドは、口を開きかけて止めた。ここでは誰が聞いているか分からないからだ。心配ないだろうが、念には念を入れておいた方がいい。

「悪いけど、ちょっと入らせてね。立ち話もなんだし」

「はいはい」

どうせ自分に拒否権はないのだ。ノルンはぞんざいに返事をする、扉を開けてハロルドを招き入れた。彼は部屋に入るなり、

「……急な話なんだけど、しばらくの間、護衛につくことになったんだよね。で、その間は二人の講師が出来なくなるワケ。ゴメンね」

「それがわざわざ幻影で来た理由？」

やっと合点がいった。彼が『ここ』にいないことをノルンは知っていた。

今、目の前にいる彼はハロルドであってハロルドではない。ハロルドは驚いたようにひゅうと唇を吹く。

この短時間で見破られるとは思っていなかった。流石は稀代の悪魔抜い見習いか。

「さっすがノルンちゃん、そうだよ。今、ここにいるオレはオレじゃない。ファントム・リアライズで作り出した幻影。でもこれ、離れた場所から動かすの面倒なんだよホントに」

ファントム・リアライズは本来、幻影を『作り出す』だけの魔術だ。ハロルドのように幻影を自身ののように動かし、会話するには術の効果を正確に把握し、術にアレンジを加えねばならない。

ハロルドは軽く言っているが簡単なことではないのだ。

離れた場所から動かす、と言っていることから、彼は教戒にはいないのだろう。わざわざ幻影まで使ってそれを伝えに来たのか。意外に律儀な人なのかもしれない。

「護衛対象……あの聖人の子？」

「んにゃ、彼も勿論入ってるけど、大聖堂の前にいた五人ね。ってやっぱり気付いてたんだ、ノルンちゃん。あの子が聖人だって」

「あんな力持ってたら分かる」

ノルンはそう言って、あのライトブラウンの髪の少年を思い浮か

べた。深いエメラルドのような瞳が印象的な少年。会った事などないはず。

だが彼はノルンの知る誰かを彷彿とさせた。しかしそれが“誰”なのか分らない。思い出せない。

「ま、そりやそうか。一応、学園アカデミーの生徒だからねえ。ウチが関わるコトでもないんだけど。それじゃ後でシグにも言っておいてね」

アカデミー
学園は教戒に並ぶ魔導師育成機関であり、四大元素を初めとして光や闇、無など様々な魔術を指導している。本来なら学園アカデミーの生徒を護衛する事態なんてないのだろう。何か事情があるに違いない。

ハロルドは笑みを浮かべると、ひらひらと手を振る。ノルンが何か言う前に、彼は光の粒子となって消えた。

「……勝手な奴」

今更言うまでもなく分かっている事だが、言わなければノルンの気が済まない。ハロルドの話からすると、しばらくは特別授業はなしと言う訳だが素直に喜べなかった。

だが聖霊祭に近いこともあって有り難いのは有り難いのだ。呆れ半分に息を吐き、椅子に腰掛けたその時だ。シグフェルズが目を見ましたのは。

「ん……ノルン？」

女神に仇なす者

「起こした？」

「ううん。ハロルドさん、来てたの？」

シグフェルズは首を振ると、上体を起こしてほんの数秒前までハロルドがいた場所を見つめた。彼は魔力を持たないが、精霊因子を視る力はある。ハロルドが来たのか、と尋ねたのは『そこ』には僅かな残滓が感じられたからだ。

「ついさっきまで。しばらくはあっちの事情で特別授業ないみたい。シグにも伝えて置いてって言ってた」

言いながら、ノルンはシグフェルズをベッドに寝かせる。特別授業がないなら、今の内にしっかり休んでおいた方がいい。無理に動くのは体にもよくないし、何よりシグフェルズは絶対に無理をするだろうと思ったからだ。

彼との付き合いは短いが、ノルンとてそれくらいは理解しているつもりである。

「そっか。異端審問官も大変なんだね」

「でもハロルド、異端審問官になんて全く見えないと思わない？」

異端審問官の任務ではないのだが、それは別にいい。

ぱっと見は普通の司教にしか見えず、ましてや重要な役である異端審問官とは結びつかない。

異端審問官。異端を審問し、必要とあらば排除する。独自の権限

を与えられた彼らは、聖職者の中でも異質な存在である。

まだ実際戦っている所は目にしていなが、ハロルドは異端審問官の中でも相当な腕を持っているらしい。

「確かに。だけどハロルドさんは強いよ。上級悪魔とだって渡り合える」

茶化すように笑うノルンに、シグフェルズも困ったように微笑む。シグフェルズは彼が戦う場面を一度だけ目にしたことがある。

だがハロルドはシグフェルズにこう零したのだ。この力があつても救えなかったものは沢山あると。

ノルンと同じく、魔術の才を持ち、聖人である彼の力を持つてしても救えなかったもの。どれだけ力を手にしても、本当に守りたいものは自分の手からすり抜けていくのだろうか。

「そつみたいね。……少しだけなら私も」

「え？」

「何でもない」

何でもないと言を振り、街での戦いを思い返す。

ノルンは今日の悪魔との戦いで力不足を痛感した。悔しかったのだ。歯が立たなかったことが。例え相対したものが上級の悪魔で、聖人といえども退けることが容易でなかったとしても。

だから少しでも頑張ってみても良いと思ったのだ。

シグフェルズ、そして何より自分のために。

「私、もう行くから。あと無理は駄目、分かった？」

「うん、分かっているよ」

椅子から立ち上がった瞬間、ルームメイトが帰って来たのが扉が
開く音がする。ノルンは彼が玄関に当たる扉を潜り、自分の部屋に
戻ったことを確かめると、静かに部屋を出た。

「まだまだ……まだ早い。この体、もって貰わなければ困る」

法都シェイアード。往来の激しい街中で、男は荒くなっていた息
を整え呟いた。

だが街行く人、誰もが彼に注意をはらうことはない。まるでそこ
に誰もいないかのような奇妙な光景だった。

年の頃は二十代後半か三十代前後の男である。銀色の髪に珍しい紺と紫のオツドアイ。

恐ろしく整った美貌ではあるが、見る者に冷たさを感じさせる、そんな顔立ちである。

とその時、唐突に男の前に何者かが現われた。まだ年若い青年である。

胴衣もズボンも黒と言う簡素な装いであったが、彼の美しさを隠すには不十分だった。

一見すれば天使も霞むほどに美しい。すつと通った鼻筋に真珠のように滑らかな肌。風になびく髪は綺麗な紫色でアーモンド型の瞳は紫水晶のように鮮やかだ。

『楽しかったよ。聖人と遊べてね』

「そうか。感付かれてはいないな？」

青年の薔薇の蕾を思わせる紅い唇から紡ぎ出された声もまた、心地よい響きである。

だが目の覚めるような美しさを持つ青年を前にしても男は表情を崩さなかった。

それは問いと言うより確認に近いもの。青年を信頼しているのか、それとも何か別の理由があるのか、短い会話から男の真意を窺い知ることは出来なかった。

『ボクが大悪魔アスタロトであるとはね。でもこの件に悪魔が関わっていることくらい、教戒の人間は気付いているよ』

自らを大悪魔、魔界の公爵アスタロトと名乗った彼の背中には六

枚の翼があつた。

だが女神に仕える白ではない、黒だ。黒は天より墮とされた証であり、六枚の翼は彼が天使であつた頃、高位であつた名残である。それに高位の悪魔はこの世ならざる美貌を持つという。その点では間違いなくこの青年は位の高い悪魔なのだろう。

「十分だ。それで構わない。それとフィリルが捕まつたらしい」

『フィリル？ 誰それ？ それよりさ、ボクの役目、ちゃんとあるんだらうね？』

男の言葉に青年、いやアスタロトは不思議そうに首を傾げた。取るに足らない人間の存在などいちいち覚えてもいないと言うことか。彼ら悪魔にとって人間などちっぽけで弱いだけの存在だからか。

「呪力結界を張る時の手伝いならな。どうも力を使うのは苦手だ」

『分かった。まったく、ボクがいないと駄目なんだから』

そう言つてアスタロトは笑つた。無邪気に、そして妖艶に。男はそこで初めて苦笑する。

だがそれも一瞬のことで直ぐに冷たい美貌に戻る。

二人は雑踏に紛れるようにして消えて行く。最後まで彼らの会話を耳にした者はいなかった。

女神に仇なす者（後書き）

やっと第二章、終了しました！

美しき貴人

血よりも深く、薔薇よりも紅い絨毯を踏みしめ、長い廊下を歩く一人の女性の姿があった。

否、正しくは彼女が歩いている訳ではない。何故なら女性は、のっそりと我が物顔で廊下を歩く、ヒトコブラクダの上に乗っているからだ。

年の頃で言えば二十歳から半ばくらいだろうか。見る者をはっとさせる美貌を持つ美しい貴人であった。伏せれば影を作る長い睫毛に、白磁の肌は僅かに薔薇色に染まっている。

綺麗過ぎる泉に生物が棲めないように、薄青の瞳はどこまでも透き通っていた。

しかしその美しい瞳を見続けていれば魅入られしうものではないか。そう思わせる魔性のようなものが彼女の瞳にはあった。

長い白金の髪は闇の中で光る一点の星のように輝いており、ダイヤモンドやルビーなど様々な貴石を散りばめた王冠を頭に乘せている。身に纏う外套は深い色合いの紺の天鷲絨てんがじゅうだった。

だが廊下の真ん中（しかも豪華な絨毯の上）をヒトコブラクダが独占している割にはすれ違う者、誰も文句も言わない。それ所か傍を通る度に皆、恭しく礼をするのだ。

それもそのはず、彼女——パイモンはルシファアの忠実な部下にして元主天使、現在は二百の軍団を従えし西方の王である。

ヒトコブラクダの歩みは遅く、自分の足で歩いた方がいいのではないのか。他者ならそう思うだろうが、彼女は気にも止めない。

あらゆる学、術に通じ、ベルゼブルと並ぶ強大な力を持つ墮天使ではあるが、実はラクダのようにマイペースなのかもしれない。

「ベリアル、いい加減に姿を現しなさい。西の王である私が直に貴方を訪ねていると言うのに」

唐突にヒトコブラクダの歩みが止まる。

彼女が口を開いた瞬間、辺りが轟音に震えた。何十もの獣の唸り声ではないのか。そう思わせるほどの轟音が響き渡る。彼女の傍に置かれていた調度品は吹き飛び、絨毯までもがめくれ上がった。

パイモンはこれでも加減をしているのだ。彼女が本気で声を出せば地獄の城とて無事では済まない。

するとこれ以上、城を壊されては不味いと思ったのか、彼女の前に一枚の扉が表れる。パイモンは不機嫌そうな面持ちで金縁の扉を潜った。

そこは贅の限りを尽くされた玉座の間だった。敷かれた絨毯は複雑な金系の刺繍が施され、柱に使われているものは間違いなく金、嵌め込まれているのは大粒のルビーである。

まるで炎の海の中にいるような錯覚を起こしそうだ。

金と赤で作られた間の中央、玉座に腰掛けるのは一人の男。

外見上の年齢はパイモンよりも僅かに上、二十代半ばほど。息をするのさえ忘れてしまうほどの美貌の持ち主だった。適度に筋肉のついたしなやかな肢体。緩やかに曲線を描く朱がかった金の髪は背中を流れ、まるで光の帯のように煌いている。

蠱惑的な色を宿す赤紫の瞳は長い睫毛に縁取られていた。

「西の王であるお前が何の用だ？　パイモン」

「ルシファア様からご命令を受けてここに来ました。ベリアル、いえ、『炎の王』、『虚偽と詐術の貴公子』よ。貴方ほどの悪魔が

ヒトと契約しているようですね。……しかもそれを何年も隠していた。どういうことですか？ 答えによっては裁きを受ける覚悟は出来ているのでしょうか？」

見下ろされる形となるパイモンは、心底嫌そうな表情を浮かべている。ただでさえ地位だけで言えば、シオウルの支配者である彼より西を治める彼女の方が上なのだ。

それに加え、他の悪魔に対して態度の悪いベリアルをパイモンは嫌っている。敬愛するルシファアの命でなければ近付きたくもない相手だというのに。

「逐一報告する義務はないだろうか？」

薄い笑みを貼付けてベリアルは言った。確かに彼の言う通り、契約したことをルシファアに報告する義務はない。

だがベリアルほどの力を持つ悪魔となれば別だ。ベリアルは美しい外見をしているが、口に出す言葉は殆どが偽り。

パイモンやルシファア、彼の腹心であるベルゼブルにアモンはベリアルを“敵”だと認識している。

「ええ、ですがお前ほどの悪魔となれば別です。私は確かに伝えましたよ。ルシファア様への申し開きは自分自身の口から言ってください。それでは」

パイモンはこれ以上、話もしたくないと言った風に用件だけ伝え、そそくさと身を翻す。

二人の間に流れる険悪な雰囲気の中、ヒトコブラクダだけが我関せずと言ったようにマイペースに欠伸をした。

不機嫌の塊、そんな雰囲気を漂わせていたパイモンはベリアルの

城の絨毯を遠慮なく踏み付ける。どうせ腐った絨毯だ。いくら踏みつけてもいいだろう。どうせベリアルは何も言わないのだから。

すると何を思ったのか、パイモンは手綱を引き、ラクダを止めた。

「ゴモリー」

彼女の薔薇色の唇が微かに動いた。呟いたのは何者かの名だろうか。

瞬間、“そこ”はベリアルの城ではなかった。闇だけが支配している空間には彼女と、そしてもう一人、若い女性がいた。

「お呼びでしょうか？」

鈴を転がしたような声の主は二十歳前後。パイモンが艶やかな薔薇なら彼女は白百合だろうか。美しい青み掛かったマラカイトグリーンmalachite greenの瞳に、しっとりとした長い濡れ葉色の髪は肩や背中を流れている。

白いレースが縫い付けられた紺を基調とする異国情緒溢れる礼服を身に纏い、羽と房飾りがついた帽子を被り、宝冠を腰に結んでいる。

その顔立ちは正に名のある芸術家が心血を注いで作った女神像のように美しい。そして彼女もまたパイモンと同じように大きなラクダに跨っていた。

「ベリアルの監視は任せましたよ」

「仰せのままに」

頭を垂れた彼女はただの悪魔ではない。

名をゴモリー。吟詠公爵の名で呼ばれ、二十六の軍団を従えし偉

大なる大公爵なのだ。その美しさと洗練された優雅な振る舞いからルシファアの寵妃であるとも言われているが、彼女は笑って否定している。

ゴモリー曰く、ルシファア様はとても一途な方です。私^{わたくし}なんて眼中にないですから、だそうだ。

彼女はパイモンやルシファアの側近であるベルゼブルやアモンのように『全て』を知っている訳ではない。

しかし聡明で過去・現在・未来を見通す力を持つ彼女は、全てを知って主のために知らぬ振りを続けているのかもしれない。

「ですが危険だと感じたら直ぐにお止めなさい。いいですね？」

「承知しております。それより、パイモン様にはそんな不機嫌そんなお顔は似合いませんわ。笑ってくださいませんか？」

ふんわりと微笑む彼女に毒気を抜かれたのか、パイモンは困ったように微笑んだ。本当に彼女は昔から変わらない。

何もかもがあの頃とは違ったしまったというのに。目の前にある存在だけは時が止まったままのよう。

「貴女は変わらない。昔がとても懐かしく思えますよ」

主天使であつた自分、熾天使であつたベルゼブルに最も美しき天使であり、天使長をつとめていた暁の御子、ルシファア。ルシファアに絶対の忠誠を誓っていたアモン。

ゴモリーは今と変わらない美しき月の女神だった。

今はもう戻らないものだからこそ、こんなに懐かしいと思うのだろうか。

「そう、ですね。あの頃が懐かしい。既に捨てたものであるからこそ余計に……それでは何かありましたらまた連絡致します」

言うなりゴモリーの姿は掻き消える。

次の瞬間、パイモンは何事もなかったかのように城の中を歩いていた。麗しい公爵の姿もなければ闇もない。『炎の王』ベリアルの宮殿だ。

しかしパイモンの表情は先ほどのように絵に書いたような不機嫌な顔ではない。穏やかな微笑を湛えたものだった。

美しき貴人（後書き）

やっとここを第二章開幕です……！

心境の変化

ハロルドの言う通り、聖霊祭当日まで彼が姿を見せることはなかった。ノルンとシグフェルズはそれまでと何ら変わらない生活を送り、特別授業という繋がりを無くした二人が話す事もなかった。

聖霊祭と言っても見習いであるノルンたちには殆どすることはない。午後から行われる洗礼の儀で聖歌を歌うくらいだろうか。

普段は祈りや勉強などに追われる見習い悪魔抜いたちもこの日ばかりは様々なものから解放される。

それは今のノルンも同じで少しだけ気持ちが高ぶっていた。今までの自分ならそう思わなかっただろう。だが僅かだっていい、自分は変わったのだ。

面と向かって言うつもりはないがシグフェルズとハロルドには感謝している。他人への不信感がなくなった訳ではない。

しかし人間も捨てたものではないと教えてくれたのだから。

ノルンはクローゼットに仕舞ってあった儀礼用の聖衣に着替え、簡単に髪を梳かした。

儀礼用の聖衣は普段着る聖衣と違い、正装だけあって付けなければならぬ装飾が沢山ある。

着るだけでも時間が掛かると言うのにまったく面倒臭い限りだ。

小さくため息をついて全ての装飾を付け、白いストールをかける。最後に金系の刺繍が施されたミトラを被った。

まだ見習いであるから装飾も少ないものの、正式な悪魔抜い、例えばハロルドなどは自分よりずっと面倒に違いない。

鏡でミトラの位置がおかしくないか確認する。儀礼用の聖衣は見

る分にはいいが、長い時間着ていると肩がこりそうだ。準備を終え、部屋を出ようとしたノルンの耳に控えめなノックの音が届いた。

こんな時間に訪ねて来るのはろくなことではない。ノルンは返事をせずに扉を開ける。外に立っていたのは一人の少年。

温かな光を宿す紅茶色の瞳に、彼女と同じミトラが飾られた金に近い不思議な琥珀色の髪が揺れる。

こちらにもノルンと同じ裾の長い儀礼用の聖衣に、白いストールといたった装いだ。少年の登場にノルンは酷く驚いていた。ハロルドが戻るまで会わないと思っていたのだから。

「……シグ」

「良かった。まだ部屋にいたんだね。じゃあ行こうか」

驚くノルンにシグフェルズは間に合ってよかった、言って笑顔を見せた。

避けていたつもりではないが、まさか彼がわざわざ迎えに来るのも思っていなかったからである。

瑠璃色の瞳をぱちくりさせるノルンに構わず、シグフェルズは彼女の手を取って歩き出す。状況がうまく飲み込めないノルンはシグフェルズにされるがままだ。

「え、ちょっと……」

「ノルン、最近僕を避けてたでしょ？ 何かあった？」

まさかシグフェルズにばれているとは思わなかった。避けていた、と言われればそうなのだろう。自分では自然なつもりだったのだが、顔を伏せ、押し黙るノルンに少年はくすりと笑い声を漏らした。

「じゅめん、まさか本当だと思わなくて」

「……はあ、もういい」

もう腹すら立たない。怒りを通り越して呆れしか感じなかった。
ここ最近、意外にシグフェルズが碎けた人物であるとノルンも段々分かって来た気がする。

「それにしても正装、すごく似合ってるよ」

惜しげもない称賛にノルンはどう反応していいか分からなかった。
だからどうして、そんな簡単に他人を褒められるのだろう。人に褒められるなんてこそばゆい。他人から向けられる感情には疎いと自分でも分かっているつもりなのだが、分かっているにもかかわらずならないことだってある。

「……シグだって似合ってる」

「ありがとう」

散々悩んだ末、ノルンも褒めてみると、シグフェルズはにこにこ
と笑っているだけ。慌てている訳でも、照れている訳でもない。何
だか悔しい感じがする。

「お、ノルンちゃん、シグ！」

向かい側から駆けて来るのはここ数日見ていなかったハロルドだ。
随分焦っているようだが、よく見ればノルンたちのような儀礼用
の聖衣ではない。

いつもと同じ、悪魔抜いの黒い聖衣である。洗礼の儀まで一時間を切ったというのに間に合うのだろうか。

「詳しく話してる暇ないからまた後でね」

ハロルドはノルンが何かいう前に竜巻のように二人の間を駆けぬけて行った。正に一瞬の間である。二人はしばらく無言だったが、シグフェルズが怖ず怖ずと口を開いた。

「ええっと、僕たちは東塔に行こうか？」

「そうね。ハロルドは放って置いても問題ないし」

ハロルドなんかに構って遅れたりすれば大問題だ。

ただでさえ教戒の内は広いし、いくら聖霊祭と言っても授業と同じで出席しなければ単位を貰えないのだから。

物々しい雰囲気

洗礼の儀が行われるのは教戒内の東塔である。普段、強固な結界で覆われる教戒も今日ばかりは結界が僅かに弱まってしまふ。

表面上は穏やかなものの、通り魔事件のこともあり、教戒は微かな緊張感に包まれていた。それはこうして教戒内を歩いているノルンたちにも分かる。

しかし、いくら警戒しているとは言え、今日教戒を訪れる人々の数は半端なかった。アルトナ教徒から観光客までその全てを調べるのは無理に等しい。

だが通り魔事件だけで洗礼の儀を中止することは出来ないのだ。

普通の人々にとって教皇アルノルド・ヴィオンを目にすることが出来るのは、この聖霊祭と冬に行われる聖誕祭のみ。

ノルンのような聖職者であっても拝見出来るのは数回なのだから、信者の気持ちも少しは分かるというもの。

「物々しいっていつか、変な感じだね」

聖騎士の姿もやけに目につく。聖騎士というのはシグフェルズたちのような聖職者ではない。いや、厳密にはそうかもしれないが、役割は全く違う。

彼らは魔導の才を持たない者になる、言わば女神に仕える騎士なのだ。シグフェルズも本来なら騎士であつたのかもしれない。

だが悪魔と戦う事が出来るのは悪魔祓いのみ。幸い彼はバクルスの扱いに長け、魔力は持たないが、精霊因子を視ることが出来たため、今この場所にいる。

「通り魔事件で警戒してるのよ。ただでさえ捕まったとは言え、裏に何かあるんだし」

通り魔が捕まった事さえ、一般の聖職者には伝わっていなかった。だがハロルドから教えられた事と相對した悪魔から推測することは出来る。何をしたのは知らないが、単独犯では到底納得できないものがあるのだ。

いくら魔術の使い手であっても、教戒の包囲から逃れられるはずがない。しかも総本山である法都シェイアードでだ。

今まで僅かな証拠すら残していなかった事も考えると協力者がいる。

「何も起こらなければいいけど……」

周囲を見回しながらシグフェルズが呟く。それはノルンも同感だが、彼らは結界が緩む今日を見逃すはずがない。

信者や観光客に紛れるにしても、あるいは教戒の人間になりすますにしても絶好の機会だ。

「……今日を見逃すほど犯人も甘くない。協力者が他にいるなら多分、仕掛けてくる」

二人が洗礼の儀が行われる東塔に着いた時には、既に殆どの見習いたちが集まっていた。遅くなったつもりはないが、色々話している内に遅くなったのかもしれない。

シグフェルズと二人で来たノルンに痛い視線が突き刺さるが、ノルンは全く気にしない。

どうせ何をしたって同じだし、何を言っても同じだからだ。それ

にこんな視線、痛くもなんともない。ただ面倒なだけである。

一方シグフェルズはそんな視線に気付いていないのか、いつものように微笑を浮かべているだけだ。割と鋭い所のある彼も人から向けられる敵意や好意には疎いらしい。

「どうかした？」

「……どうもしてない」

「気にしない方がいいよ。ノルンは別に悪くないし」

振り返ったシグフェルズがけろりと言い放った。全く気付いていないのかと思いきや、そう言う訳でもないらしい。

まだ東塔内には、彼女ら見習い達しかない。

しかしもう間もなく開場時間だろう。塔とは言ってもその作りは大聖堂と変わりなかった。半球状の天井は見上げるほど高く、吹き抜けとなっている。

名のある美術家の作品なのだろう。黄昏色に染まる天界に女神アルトナに大天使ミカエルが描かれている。

最奥に据え置かれたパイプオルガンは非常に強大で鍵盤だけでも塔内の半分を締めていた。

両側の壁の半分はステンドグラスが嵌め込まれ、もう半分は天より墮とされた最も美しき天使、ルシファーと彼の右腕的存在であったミカエルがまるで鏡合わせのように描かれている。

最奥には複雑な彫刻が施された十字架が掲げられており、四方にはそれぞれミカエル、ウリエル、ガブリエル、ラファエルの像が置かれていた。

「ハロルドさん、間に合うかな？」

「大丈夫じゃないの」

洗練の儀の担当であるハロルドは、数ある聖職者の中から選ばれた十人の内の一人である。その彼が肝心の儀式に遅刻したら本当に洒落にならない。

心配して一人そわそわするシグフェルズ対し、ノルンはこれっぽっちも心配していなかった。受け答えも適当である。ハロルドなら絶対に間に合うだろうと思ったからだ。

洗礼の儀

洗礼の儀が行われるのは午後一時からである。既に定刻を迎えた東塔内は、多くの人々で埋め尽くされている。パイプオルガンが奏でる低い音が塔内を満たしたかと思うと奥の扉から教皇アルノルド・ヴィオンが選ばれた十人の司教を伴って入室した。

その中には勿論、ハロルドの姿もある。どうやら間に合ったらしい。皆、ノルンたちと同じような白の聖衣を纏っている。

だが作りが少し違う。材質は絹で出来てはいるが、使われている銀糸と金糸はより高価なもので刺繍も細やかだ。ハロルドも他の司教も儀式に使う特殊なバクルスを携えていた。

儀式の始まりを告げるようにノルンから見習いの司教たちが聖歌を歌い、洗礼を施される子供達が前に出た。洗礼の儀とは十代前半の子供たちに行われる祝福。

悪魔は魔力を持つ者の魂や無垢な子供の魂を好む。洗練の儀は悪魔から子供たちを守るための儀式なのである。

儀式には使われるのは、司教のバクルスと聖水。聖水とは女神アルトナが祝福を授けたとされる聖泉の水でそれ自体が強力な聖気を帯びているらしい。

普通の人間にはただの水にしか見えないが、ノルンのような聖人や聖気に敏感なシグフェルズはただの水と聖水の区別くらいは出来る。

『聖霊の御名において洗礼を授ける』

祝福されたバクルスと聖水が合わさり、祝福を受けた子供たちは淡く光輝いた。順調に祝福が行われ、儀式も佳境に入ったその時、

聖歌を歌っていたノルンの耳に入った鋭い音。

キン、と金属音がした瞬間、目に見えない圧力が東塔内の人々を襲った。体が上手く動かせない。まさしくこれは高密度の魔力を練り上げた呪力結界、それかなり強力なものだ。

ノルンは確かめるように手を握ってみる。手や足は何とか動かせるが、立ち上がれるかどうか……。

「シゲ……！？」

ノルンが足に力を入れたその時、シゲフェルズの様子がおかしいことに気づく。座り込んでいるのは皆と同じだが、彼は明らかに変だった。

ノルンでも動くのがやっとだと言うのに、魔力を持たないシゲフェルズはノルンを見て絞り出すように声を出した。

「この間……悪魔の……力」

この間の悪魔、あの青年の姿をした悪魔の力だと言うのか。のろのろと顔を上げれば、そこには信じられない光景。一人の司教が教皇の首筋に刃を押し当てているのだ。

強すぎる呪力結界の中で平然としているのは、結界の発動者である者の仲間だと思われる何名かの司教と教皇アルノルド、ハオルドだけ。

しかしノルンは動こうにも動けなかった。強力な呪力結界で押さえつけられていることもあるが、何より結界の発動者は東塔にいる人間全てを人質に取っていると同意義だ。

だからこそ結界の中で動けるハオルドは動けない。教皇に刃が向けられていることは勿論、彼自身が視線でハオルドを制したのだ。

「何者だ？」

静まり返った、いや、静まるしかなかった塔内で嫌に響くアルノルドの声。するとアルノルドに刃を突きつける聖衣の男は、まるで宣言するように高らかと言い放った。

「……我らは逆十字^{アンチクロス}。女神アルトナに仇なす者！」

では何故、彼らはアルノルド以外に武器を向けようとはしない？ 女神に仇なす者であるのなら、ここにいる全員が彼らの標的だろう。それとも結界で十分だと言うのか？

ノルンが疑問に思った瞬間、強大な魔力が解き放たれた。未だ刃を押し当てられているアルノルドを中心にだ。

「すごい……魔力」

その絶大なる魔力の奔流は刃を向けていた男を吹き飛ばし、魔力を感じることさえ出来ない人々まで震え上がらせた。圧迫感さえ感じる絶対的な力。これが当代最強と謳われる悪魔祓い、アルノルド・ヴィオンの力だというのが。

『七耀の煌めきよ、我が声に応え具現せよ。プリズム・アーク』

澄み渡る声が響いた瞬間、アルノルドが翳した手に浮かび上がる光の魔法陣。棒立ちになっていた男たちが虹色の光を放つ結晶に封じ込められた。

プリズム・アークは光に属する魔術で、結晶は一種の簡易結界でもあり、強度は術者の魔力に比例する。

つまり虹色の結晶は見た目の美しさとは裏腹に、破ることの難しい光の檻なのだ。

結晶に捕らわれた男の一人、アルノルドに刃を突きつけていた男は自らの喉元に短剣を突き立てようと刃を振り下ろし、そして止まった。

ノルンからはまるで見えない何かに阻まれたかのように見える。

「命を捨てるなんて感心しないね」

声の主は珍しく怒りの表情を浮かべているアルノルド。女神より与えられた命を自ら絶つということは、神を冒瀆する行為に他ならない。

そして何より、彼は許せなかったのだ。教皇としてではなく、アルノルド・ヴィオンという一人の人間として。

アルノルドは手首に付けていた宝石があしらわれた銀鎖を外して床に叩き付け、結界を発動させた。

『サンクチュアリ』

大悪魔アスタロト

『サンクチュアリ』。その一言で東塔内を幻想的な光が舞い踊る。そのあまりの美しさに人々は身動きが取れないことすら忘れ、思わず息を呑んだ。

サンクチュアリは儀式で使われる退魔結界である。本来ならいくつもの下準備と人手がいるものをアルノルドは、魔力を込めた宝石の補助があつたとは言え、一人で、それもたつたの一声で発動させたのだ。

それなのに息一つ乱れていない。恐るべき魔力容量である。こんな真似が出来るのは当代最強の魔導師と謳われる《学園》の学園長、クリス・ローゼンクロイツか、かつて英雄と称され、現在は対魔導師組織《黄金の暁》の首領とされるリデル・メイザースくらいではないのだろうか。

「体が軽い……これが猊下の力？」

圧迫感が一瞬にして消え、体が自由にある。ノルンは信じられない思いで手足を動かした。同じ聖人でもアルノルドの力は桁違いだ。嘘のように体が軽い。それは魔力を持たない人々も同じようで、皆戸惑いつつ体を起こした。

即座に駆け付けた司教たちが逆十字と名乗った者たちを連行する。だがノルンにはどうでもいいことだ。

「シグ！」

「大丈夫、もうおさまったよ」

ノルンは様々なことを忘れて、シグフェルズに駆け寄る。彼は太

丈夫だと言っているが、相変わらず顔色は悪い。強がりであることはノルンにさえ分かりきっている。他の見習いたちも彼を心配する者もあれば、ノルンに意味ありげな視線を向けている者、今起きた信じられない出来事にざわめく者たちもいた。

ざわめきはやがて塔内全体に及び、この場から逃げ出そうとする人々もいる。

だがそれまで沈黙を保っていた教皇アルノルドが発した言葉に場は水を打ったように静まり返った。

「静まりなさい！」

その一言で人々がある程度落ち着いたことを確認すると教皇はゆっくり、とそして静かに語り出した。

「脅威は去りました。彼らが何者だとしても心配ありません。我ら教戒は人を導き、守るためにあるのですから」

人々を安心させるように微笑んだアルノルドは、まるで女神の声を伝える天の使いであるかのよう。その言葉に涙を流して拝む者まで居る。

それくらいにアルトナ教徒とシェイアードの民に取って教皇アルノルド・ヴィオンは女神の声を代弁する偉大な使徒なのだ。教皇を見つめていたノルンはあることに気付く。ハロルドがどこにもいないのだ。塔内から一人の司教が姿を消したことを一体、何人が気付いただろう。

「ハロルドが……いない」

法都シェイアードが見渡せる小高い丘に二人の男の姿があった。

ただ、人間と言うには二人とも、少し違う。一人は二十代後半から三十代手前ほどの男。薄紫と紺のオツドアイに銀色の髪は光を反射して煌いている。

すっとした鼻筋に切れ長の瞳。顔立ちは整っているものの、見るものに冷たさを感じさせる怜悧な美貌である。何と男の左肩からは翼が生えていた。それも鳥のような白い翼ではない。黒き羽毛である。

そして顔の左側には眉から頬にかけ、刺青に似た黒い紋様が浮き出ており、激しい明滅を繰り返している。それは左腕も同じで二の

腕から手首まで及んでおり、妖しく蠢いていた。

「命の使い所、か……」

今まで一言も喋ろうとはしなかった男がぽつりと呟いた。独り言であつたのか、それとも隣の人物に向けたものかどうかは分からない。

すると隣にいた青年が盛大にため息をついた。恐らく男に分かるようにだろうが、彼が気にした様子はない。

『そうだよ。悪魔のボクが言うのも何だけど、君はもう少し自分の体を省みた方が良くんじゃない』

自らを悪魔と言つた青年は見たところ、十代後半だろうか。絹のような光沢を放つ髪は夜が明ける直前の空のような紫で、長い睫毛に縁取られた瞳はアメジストのようにきらびやかだ。

顔立ちは男以上に整っており、一種の芸術品と言つてもいい。

ただ青年には芸術品にはない妖しい色香を含んでいる。なまめかしい、と言つても過言ではないだろう。彼には人を惑わす何かがある。その点では青年は確かに“悪魔”なのだ。

だがもしこの場にノルンとシグフェルズがいたのなら、厳しい表情を作っていたに違いない。何故なら、青年は彼女たちが目にした悪魔であつたからだ。

「本当にな。仮にも大悪魔アスタロトだろう？」

呆れたように微かに笑う男の顔色は悪い。まるで蠟のようだ。

大悪魔アスタロトと言えば、魔王ルシファーに従う偉大なる公爵。強大な力を持つ悪魔である。

高位の悪魔はこの世のものではないくらい美しいという。ならば青年が“大悪魔アスタロト”であつてもなんらおかしくない。

『あのねえ、ボクの手を患わせないで欲しいだけ。死ぬ時はサクッと死んでよね。それよりさっさと行くよ。力を使ったんだから、忌まishi天使共に気付かれるのも時間の問題ってさ』

「そうだな。お前には迷惑をかける」

アスタロトの言葉からは不思議と冷たい印象は受けなかった。例えるなら不甲斐ない兄を叱る弟のようで、その姿はとも残虐で狡猾な悪魔には見えない。

迷惑を掛ける、という男を呆れた顔で見つめている。

『そうだよ、本当に迷惑なんだから』

アスタロトの背に広がる六枚の翼。

次の瞬間、二人は丘の上から姿を消していた。

咎の烙印

あの後、洗礼の儀は当初の予定通り、ただし時間を短縮して最後まで執り行われた。

結局、ハロルドが東塔に姿を現すことは最後までなかった。ノルンたち見習いはまだ気楽なものだが、他の聖職者たちは夜に行われる送りの聖火の準備に追われている。

ノルンはシグフェルズを一方的に部屋に送り届けると、ある人物を待ち構えていた。

歩いて来たのはワインレッドの髪に琥珀色の瞳。白い儀礼用の聖衣ではなく、いつもの悪魔被いを示す黒の聖衣を纏った青年——ハロルドである。

「あれ？ ノルンちゃん、こんな所で何してんの？」

「ハロルドを待ってた以外無いと思うけど」

あれ、とわざとらしく首を傾げるハロルドに不機嫌そうに返すノルン。でなければわざわざ“ここ”にはいない。

ノルンたち見習いと正式な悪魔被いの宿舎は違う。勿論、ハロルドが直ぐに戻ってくる保証もなかった。

しかしノルンの言葉にもハロルドは驚かない。それどころか、

「まあ、そうだよな。どする？ オレの部屋、入る？」

笑顔でそう言うのだ。ノルンは思わず頭を抱えなくなった。仮にも聖職者で悪魔被いが言う言葉ではないだろう。面白がっているのか、あるいはからかっているのか知らないが、こっちが迷惑だ。

お陰で廊下を歩く他の聖職者たちに変な目で見られているのではな

いか。

「馬鹿言わないで。殴りたいの?」

「いやあ、それも良いかな。何て……」

瑠璃色の瞳が不機嫌そうに細められる。

だがハロルドが気にした様子はない。この状況でふざけられるのも一種の才能ではないのか。

ノルンは尚も飄々と笑うハロルドの足を思いきり踏み付けると有無を言わず、右腕を掴んだ。すると何を思ったのか、こう言ったのだ。

「おう、ノルンちゃんったら大胆ー。オレ期待しちゃうよ」

「ふざけるのも大概にしてよね。マラキ大司教に言い付けるから」

「オレはいつも真面目なつもりだけど? はいはい、分かったから、そんな射殺するような目は止めようね」

この男が悪魔被いで異端審問官でなければ当の昔に殴り飛ばしている。何がいつも真面目だ。不真面目の間違いだろう。

そもそも初めからそうしてくれれば要らぬ心労を増やすことも、変に疲れることもなかったのに。勿論、ウイंकも無視だ。

「で、どこ行くの?」

「邪魔の入らない静かで人気がない場所」

「でもこっちはノルンちゃんたちの宿舎なんじゃ……」

ノルンは先程からハロルドの腕を掴んだまま歩いている。わざわざ人気の少ない回廊を選んで歩いていた。

だがこの先には見習いたちの部屋しかない。ハロルドも怪訝そうな顔をしつつもノルンに手を引かれるがまま歩いている。そして彼女の足が止まった。ハロルドの目が驚きに見開かれる。

「ってここシグの部屋？」

「そう。さっきの事、聞かせてもらおうと思って」

ノルンがハロルドを連れてやって来たのはシグフェルズの部屋である。確かに人はいないし、邪魔も入らない。が、一体何のためにハロルドを連れてきたのだろうか。

さっきの事、が分からぬほどハロルドも鈍くは無い。逆十字を名乗った者たち。ノルンたち見習いには未だ情報は入ってこない。彼女らに知らされるのは全てが分かった後だ。

「ほら、入って」

ハロルドが抵抗する暇もない早業でノルンは彼をドアの向こうに引っ張り込んだ。とは言ってもハロルドに本気で抵抗する気はない。何だかんだ言ってもハロルドはノルンとシグフェルズを気に入っているのだ。

ノルンは不器用ではあるが優しい少女だと知っているし、シグフェルズはハロルドと同じ孤児院（ハロルドとは入れ違いである）で育った弟のような存在だ。

それに教皇猊下からは二人に話すなどの命は受けていない。

部屋にはシグフェルズのルームメイトはいなかった。ノルンはい

つも思うのだが、シグフェルズと同室であるロヴァルなる人物と鉢合わせたことがない。

一度だけ会いそうになったが、その時は急いで部屋を出たため、目にしたことはなかった。勿論、授業では顔を合わせているかもしれないが。

「シグ、調子はどう?」

勝手知ったる家のようにノルンはシグフェルズが横になるベッドの近くにあつた椅子に腰掛ける。ハロルドも椅子を借りてノルンの隣に座る事にした。

「何? シグってば調子悪かったの?」

「大丈夫って言ったんですけど、ノルンがどうしてもって……」

まじまじと顔を覗き込むハロルドに、シグフェルズはいつものように微笑する。言った瞬間、ハロルドは理解した。シグフェルズの不調の原因は背中のあるのだろう。

彼の背に刻まれた傷は一種の呪い。悪魔に付けられたものだ。先ほどの呪力結界は間違いなく高位の悪魔の力。

そしてシグフェルズが付けられた傷も高位の悪魔によるもの。影響を受けたのかもしれない。

「まあ、無理はしない方がいいと思うけど。一応、呪い的一种だからね。ほら、背中見せた」

「いいですよ。大丈夫ですから」

シグフェルズは自分のことになるとどうしても蔑ろにする所があ

る。本当に何でもないならいいが、呪いと言うものは本当にたちが悪い。手遅れになってからでは遅いのだ。

だがどれほど二人が言っても、シグフェルズは頑なに首を縦に振ろうとしない。呪詛がどれほど危険なものなのか、それは彼が身を持って理解しているはずではないか。

「……シグ、一人で無理することだけが強さじゃない。辛い時は頼っていいんだ。オレもノルンちゃんもいるんだからさ」

出会った時からそうだった。シグフェルズは悲しいことも辛いことも全て一人で背負おうとしていた。ハロルドが彼に会ったのは四年ほど前。まだほんの十三歳の子供だというのに。

あるいは、そうすることでしたか自分を保てなかったのかもしれない。悪魔と契約した兄に両親を殺され、自身も悪魔を倒さぬ限り、癒えぬ傷を負った少年には。

「ハロルドさん……」

「問答無用」

言い終わる前にノルンが即座に立ち上がり、シグフェルズの服を捲り上げた。抵抗する暇も声を上げる隙もない。まさに一瞬の出来事である。

現れた背中への傷に二人は思わず息を呑む。白い肌に斜めに走る裂傷は痛々しい。

だが、何よりも二人を驚かせたのはそれではなかった。それはノルンが庭園で目にした時のようなただの傷ではない。

傷ではなく、刻印のように見えるのだ。まるで遙か昔、奴隷に付けられた焼き印のよう。

「……咎の烙印？ まさかそんな……呪いが変化している？」

「咎の烙印って？」

ハロルドが発した咎の烙印、とは何だろう。ノルンの問いに彼も初めて自分が口にした言葉に気付いたらしい。名前からして不吉なものであることは分かる。

だがノルンは咎の烙印など一度として聞いたことがなかった。

「咎の烙印は……死の呪い。どうして呪いが変化したのか、それはオレにもさっぱり。でもあの悪魔の力が引き金になったのはまず間違いないね」

ハロルドはゆっくりと口を開く。咎の烙印、それがシグフェルズの背中に刻まれた死の呪い。

堕ちた天使のような黒き翼を思わせる傷。

しかし通常、呪いは変化することがない。少なくともノルンはそう習った。

「……残された時間は後どれくらいですか？」

尋ねるシグフェルズは驚くくらい静かだった。死の呪いと聞かされ、何故そこまで冷静でいられるのだろう。突然のことで動揺している様子もなければ慌ててもいない。どこまでも彼は普段と変わらなかった。

「オレには何とも。ただ、死に至るまで個人差がある。ん、ちょっと待てよ……もしかしたらどうにかなるかも」

「どういうこと？」

重い息を吐いたハロルドだったが、何か思いついたのか一転して笑顔になる。

ハロルドが一人で納得されてもノルンにはさっぱり分からないではないか。ちゃんと説明してもらいたいものだ。

ノルンが問うと異端審問官の青年は得意げに笑った。

「高位の悪魔による呪いは聖人にも癒せない。だけど、この咎の烙印は変化したものだ。呪いが変化するということは、完全に癒すまでは行かないけど、逆に退化させることも出来るはず」

浄化の奇跡

「それ、本当なの？」

呪いが変化することはないし、高位の悪魔によりかけられた呪いは聖人の力を持ってしても浄化出来ない。それはノルンたち聖職者にとって常識だ。

れともシグフェルズが受けた呪いが相当特殊なものなのか。

「恐らく、としか言えないけど、どする？　ま、別に失敗しても呪いが進行することもないし、リスクも少ないと思う。試してみてもいいんでない？　シグはまだ死ぬ訳にいかないっしょ」

聖人の力はどんな浄化魔術よりも強力だ。しかもその聖人の中でも強大な力を有する彼ならあるいは……。

ただハロルドが言った通り、呪いが変化したという前例がないため、全てが推測でしかない。大丈夫だとは思うが、それでも上手くいくという保証はどこにもないのだ。

決めるのはシグフェルズ自身。ただ、いつ訪れるとも知れぬ死の影と背中合わせに生きて行くのは想像以上に辛いことである。

「……はい、お願いします。僕はまだ……死ぬ訳にはいかない。兄さんを解放するまでは」

発せられた声はいつもの彼と変わらないものであったが、それ故にノルンは心配になる。

今、シグフェルズが言ったこと、裏を返せば兄を助けた後なら死んでもいいということではないのだろうか。

ノルンにはそう聞こえた。シグフェルズに死んで欲しくない。ハ

ロルドもそうだが、何の打算もなしに初めて信じてもいいと思えた人間だから。

だがノルンは嫌だと口に出す事は出来なかった。言ってしまうとそれが真実になるような気がして。

「うし、流石にこの部屋じゃ聖気だだ漏れだから、大聖堂の方へいこつか。今なら誰もいないし。オレはちょよつと使用許可取って行くから、二人とも、先に行つていてね」

言うなりハロルドはシグフェルズの部屋を出て行った。残されたノルンとシグフェルズの間には流れる微妙な沈黙。別に気まずいとか、そういう訳ではない。空気が重く感じるのもきつとノルンの気のせいだろう。

「あの……」

「えつと……」

思わず出した声が重なって更に気まづくなる。

しかしいつまでもこうしている訳にもいかない。どうにか言葉を探して口に出す。

「立てる？」

「うん、ごめんね」

シグフェルズが謝りながら立ち上がった。もうふらつくこともない。足取りはしっかりしている。だがノルンは無性に腹が立った。どうして笑うのだろう。辛いのは彼の方なのに。ノルンはシグフェルズに謝って欲しい訳ではない。ほんの少しでいい、頼って欲しい

のだ。

「馬鹿、謝らないでって言ったでしょ」

だから軽く頭を叩いてやった。いたつと声が返ってきたが、無視。自分やハロルドを心配させた罰だ。これぐらい我慢して欲しい。

ノルンは無言でシグフェルズの手を引いて部屋を出た。

水を打ったような静寂が室内を満たしている。『そこ』に調度品の類は一切ない。あるのは天井に備え付けられた最低限の灯りと鏡のように磨かれた床。ただそれだけだ。

何十にも魔法陣が描かれたそこにはノルンとシグフェルズ、ハロルドの姿が映っている。

この部屋は本来なら、儀式魔術に用いられる一種の閉鎖空間であり、大天使級結界に覆われているため、何の気兼ねもなく聖人の力を使えるという訳だ。

しかしこの部屋の使用許可をハオルドは直ぐに取ってきた。あれから十分も経たないうちにだ。

三人とも手ぶらだった。必要ないからである。

「それじゃ、ノルンちゃんはそこにいてね。シグは魔法陣の真ん中に立つて。そう、そこから絶対に動いちゃダメだからね」

「分かりました」

ハオルドはノルンを魔法陣の外に立たせ、シグフェルズを魔法陣の中央に立たせると自分は魔法陣の直ぐ外に立った。

果たしてそれを何と表現したらいいだろう。ハオルドの背から広がっていたのは光の翼。鳥のような羽毛の翼ではない。黄金色の光に緑を塗したような金緑の翹。

妖精が背負う羽根と似ているが、本質は全く違う。何よりも幻想的で、それでいて穢れを知らぬ光の翼。

ハオルドの聖人としての力は翹の大きさが表している。部屋全体を覆いつくしてしまうのではないか、そう思わせるほどに彼の翹は光のヴェールのように煌いていた。

「凄い……」

ハオルドの力は桁違いだった。こうして立っているだけでも感じる濃密な聖の気。こうして彼の力を前にして初めて、ノルンは本当の意味でハオルドの力を理解する。

刹那、ハロルドから生まれた風が彼のワインレッドの髪を揺らした。

その瞬間、普段は長い前髪で隠れている左目が露になる。右のような深い琥珀色の瞳ではない。ハロルドの背にある翹と同じ、まるで湖底に陽光が差し込んだような金緑の瞳をしていた。

『汝に宿る邪なる力、退け』

ハロルドが発した言葉はただの言葉ではない。精霊の詩とも違う、魔力を秘めた言霊。

浄化の奇跡。それは聖人が使える力であり、悪魔すら浄化する奇跡の御業。余程高位の悪魔ではない限り、聖人の力は悪魔に対して絶対だ。

しかし圧倒的に数が少ない。現在、教戒に属している聖人は教皇アルノルド・ヴィオンを含めて二十人にも満たない。悪魔と比べて圧倒的に少ないが、彼らはそれを補って余りある力を持つ。

ハロルドから溢れ出す膨大な聖気。閉鎖された空間で解き放たれた聖なる力は室内に存在する悪魔の力に向かう。

それは正に一瞬のことだった。シグフェルズが呪いを受けた証――背中が一際強く輝いたかと思うと、部屋中を覆っていた聖気が突如として消失した。

「ノルンちゃん、もう魔法陣の中に入ってもいいよ」

ハロルドの背にあった光の翹はあっけなく雲散霧消する。一瞬だけ見えた金緑の瞳も今は、ワインレッドの髪に隠れて確認することが出来ない。

心なしかハロルドは疲れているように見えた。かなりの量の聖気

を操ったからなのかもしれない。

「シグ！」

ノルンが慌てて駆け寄る。魔法陣の中央にいるシグフェルズはうずくまったまま動かない。常人なら気絶してもおかしくない量の聖気に当てられたからだろうか。

しかし、辛そうではあるが、シグフェルズは意識を保っていた。

「だい……じょうぶだよ」

『呪いの影響か？』

何とか笑みを浮かべるシグフェルズを見て、ハロルドは考えていた。常人が気を失うほどの聖気を浴びながらも、シグフェルズは意識を保っていた。高位の呪いの影響か、それとも……。今の自分には判断することが出来ない。

「傷はどう？」

聞かずとも見なくても大体のことは感じられる。傷がある背中から悪魔の力は感じない。ノルンが傷を確認すると、やはり堕天使の翼を彷彿させる刻印はない。

白い背中にはいつか見た裂傷があるだけ。

「成功？」

「みたい。前と同じ傷に戻ってる」

ノルンの返事を聞いたハロルドは思わず壁に背をついて座り込ん

だ。やはり先ほど、顔色が悪く見えたのは間違いではないようだ。
聖人の力は確かに強力だが、それを扱うのは人間である。人の器
に対して、聖人の力は強すぎるのだ。

「ハロルド？」

「……すぐ治るから。力、使った影響」

ハロルドの持ちうる力は聖人の中でも郡を抜いている。その分コントロールが難しく、一歩間違えば暴走の危険もある。つまり微妙な力の調節にかなり気を使うのだ。

ただ消滅させるのではなく、シグフェルズの体を気遣いながら浄化の奇跡を使った反動のようなものである。

純粹に疲れただけなので、しばらく休めば何とかなるだろう。もっとも、寝すぎた時のような気だるい感じだけは何ともならないが。

「シグの方は大丈夫？」

「はい……何とか」

その直後、安心したのかハロルドの体から力が抜ける。思わず冷たい床に寝そべるはめになった。この後、ノルンに支えられながら戻ることになるのだが、それは言わない方が彼の名誉のためだろう。

天より堕ちたもの

——大聖堂内、謁見の間。温かな夕日を受けて七色に煌くステンドグラスに女神が住む天界が描かれた天井。

名匠の手により命を吹き込まれた美術品の数々。鏡のように磨かれた大理石の床の上には真紅の絨毯が敷かれている。

華美でもなく、それでいて質素でもない。絶妙なバランスを保つ荘厳な美しさがそこにはあった。

見渡すほどの謁見の間に三人の人間の姿がある。皆一様に若い。儀礼用の聖衣を身に纏った男、教皇アルノルド・ヴィオンに悪魔祓いの証である黒の聖衣を着た青年。

もう一人は女と見紛うばかりの美しい青年だった。

「只今戻りました」

黒の聖衣を着た青年は、聖職者が最高位の者におくる礼をすると緩やかに顔を上げた。

歳は恐らく二十代前半だろう。整った中性的な顔立ちに、透き通るような長い青銀色の髪のを三つ編みにして左肩に流している。瞳はサファイアのように深い青。

「やはり猊下のご推測の通りです」

次に水晶の鈴を転がしたような声で言ったのは、白い聖衣姿の青年だった。

光の帯のように広がる金色の髪に澄みきった水を思わせる紺碧の瞳。一見すれば女性にも見える繊細で美しい顔立ちをしている。

「遅れて申し訳ありません！　ハロルド・ファース、参りました」

青年が口を開きかけた瞬間、扉の向こうからハロルドが姿を現した。余程急いで来たのか、彼にしては珍しく声の上擦っている。

だがそれだけではなく、やや疲れたように見える。白い聖衣の青年——ミシエルはハロルドが落ち着くのを確認して再び口を開いた。

「猊下、結界はアスタロトの仕業です」

『アスタロト』。ミシエルの口から紡がれた単語にアルノルドの眉を寄せた。

普通なら悪魔を召喚したとしても女神の力が溢れるこの世界では十分に力を発揮できない。

いくら高位の悪魔といえど元は女神によって創られたものだから。そうなれば答えは一つしかない。女神の加護を受けたこの世界で強大な力を振るえる理由は。

「依り代……か」

ぽつりと呟かれた言葉に黒の聖衣の青年、ラファエルが同意する。依り代、あるいは契約者。逆十字と名乗った者たちの中にアスタロトと契約した者がいる。

他の悪魔もそうだが、魔界の公爵と恐れられるアスタロトと契約した人間は既に人の力を超えている。

魔力を持たぬ人間には魔力を、精霊因子が視えない者には悪魔の瞳を貸し与えることで契約者は魔術を操れるようになるという。

依り代、あるいは契約者と呼ばれる存在はその名の通り、悪魔がこの世界に留まる楔の役割を果たす。その力を欲するが故に悪魔は死後の魂を代償に人と契約を望むのだ。

だが悪魔が人を救うことはない。彼らがもたらすのは破滅のみ。強大な力を得た人間は長くはない。元々悪魔という存在でこそ操れる力なのだ。人間では圧倒的にキャパシティが足りない。

やがて人の体は力に耐え切れず崩壊する。

悪魔と契約した魂に救済はなく、永遠に転生することのない無限地獄に囚われることになる。或いは悪魔によって喰われ消滅するか。

「依り代については私が突き止めましょう。必要であれば“逆十字”についても」

アルノルドに申し出た彼はノルンやシグフェルズに見せているハロルドの顔ではない。既にもう異端審問官にして稀代の悪魔祓い“ハロルド・ファース”の顔だった。

契約者や悪魔を調べるのならハロルドほど適任な人間はいない。聖人であり、異端審問官である彼なら悪魔と言えど遅れを取ることはないだろう。一連の事情を知るハロルドだからこそ出来ることもある。

「ハロルド、頼めますか？」

「お任せ下さい」

ミシエルの確認にハロルドは頷き、膝を折った。

しかしこれでまた二人の講師が出来なくなる。恐らくは喜ぶだろうノルンと残念がるシグフェルズを想像したハロルドはこっそりと苦笑した。

「ではお願いします。ラグ……いえ、ハロルド」

別の名前を口にしたミシエルにハロルドは内心、首を傾げる。誰かと間違えそうになったのだろうか。

だが尋ねようにも、口にしかけたミシエル自身が驚いていた。とても聞ける雰囲気ではないことは確かである。ハロルドは仕方なく忘れる事にして顔を上げた。

「承知致しました。お任せ下さい」

そう言つて立ち上がるうとした時だ。思わぬ来訪者が現れたのは。金系の刺繍がふんだんに施された白い聖衣を纏った壮年の男——マラキ大司教だった。

焦っているのがありありと見て取れる。人払いを命じていた謁見の間に現れたくらいだ。余程の用件に違いなかった。

「猊下、お話中の所申し訳ありません！ 実は逆十字を名乗る者が猊下に謁見を求めているのです……如何いたしましょう？」

教皇への挨拶を早々に、マラキは本題を切り出した。その言葉にアルノルドは僅かに眉を寄せ、険しい顔を作っただけで驚く様子は見せない。

ミシエルとラファエルは憂いに満ちた表情を浮かべている。ハロルドはいつも以上に真剣な顔をしていた。アルノルドはゆっくりと息を吐き出した後、マラキに告げる。

「通しなさい。ここは私とミシエル、ラファエル、ハロルドが居れば十分です。それと……この事はくれぐれも内密に」

ただでさえ昼の一件で人々は不安に駆られている。教戒はこれ以上の混乱は避けたいのだ。それと同時に逆十字の使者が訪れること

は、ここに在る皆が予想していたことである。

昼間、彼らが自分達の前に現われたのには理由がある。教皇を殺すことでもない。それは『逆十字』を知らしめるためだ。自分達は教戒に仇名すものだ。

「御意」

落ち着いた様子のアルノルドを見て幾分か安心したのか、マラキは礼をして謁見の間を後にした。彼の姿が扉の外に消えたのを確認し、ラファエルが口を開く。

「……どう思われます？」

「十中八九、逆十字の手の者でしょうね」

ラファエルの言葉に答えたのはミシエル。十中八九、と言うより間違いない。扉の外から感じるのは呪力結界の主と同じ力、大悪魔アスタロトの気配だからだ。

「何にせよ穩便に済むとは考えにくいですがね」

とはハロルドの談である。ミシエルやラファエルほど力を感じることは出来ないが、これほど近くにあれば嫌でも分かるのだ。濃密な魔の気配。これがアスタロトの気配か。

墮天使と言われればハロルドは、ラフィ・ジエール著、『天より墮ちたもの』の有名な一文を思い出す。

墮天使。其は黒き翼を持ち、闇翔けるもの。女神に仇なす悪魔と言われる彼らの頂点に立つのがサタン、光を齎すものと呼ばれた熾

天使ルシファー。

其のサタンの右腕的存在と言えるのが、“蠅の王”ベルゼブルと公爵アスタロトである。

彼らは共に天使時代の彼の部下であり、彼らに率いられた悪魔の軍勢は高位の天使ですら退けると言う。

ちらつく影

しばらくして、謁見の間に繋がる唯一の扉がゆっくりと開けられた。やや顔色が悪いマラキに見覚えのない青年。彼の後ろを黒の聖衣を纏った悪魔褌が続いた。

青年を見たハロルドの瞳が細められる。間違うはずがない。

「猊下……」

震える声を抑えて大司教は言った。アルノルドは軽く頷き、視線を青年に向ける。確かに『彼』は間違いなく人間だ。

「手数を掛けた。下がちなさい」

なおも落ち着いた様子のアルノルドに大司教と悪魔褌は頭を下げて、青年を残して謁見の間を出る。彼は別段、何か変わった人間ではなかった。

鈍い赤錆び色の髪に切れ長の瞳は妖しさを湛える薄紫。何の変哲もない長衣を纏っている。

「無駄な演技はいりませんよ。アスタロト……他人^{ひと}の体を使うとは悪趣味ですね」

珍しく、冷たい声音で言ったのはミシェルだった。ハロルドにラファエル、アルノルドの視線が一斉に青年に向かう。

大悪魔の名前で呼ばれた青年は笑うと面白くなさげに肩を竦めてみせた。

「なんだもうバレてたのか。ちなみにそこに居るヒトが教皇かな？」

バレてたのか、その言葉に驚きはない。当然だ。ミシエルとラフ
アエルがいるのだから。

そしてそれを示すように、教戒を訪れた時からアスタロトは気配
を隠そうとはしていなかった。笑う青年は『アスタロト』自身の肉
体ではない。本当にただの人間の体である。

大悪魔の力をもってすれば人の体を借りて現世に現れることなど
造作もない。

アスタロトの言葉に答える者はいなかった。

青年はひゅーと口笛を吹くと貴族もかくやというほどの礼をする。

「初めまして『女神の使徒』、『光に愛された者』、『奇跡の紡ぎ
手』。ボクは四十の軍団を率いし魔界の公爵アスタロト。以後お見
知り置きを」

アスタロトが発した言葉。女神の使徒、光に愛された者、奇跡の
紡ぎ手。それは全て教皇アルノルドの異名でもある。

女神の使徒はその名の通り、女神アルトナに使える者、光に愛さ
れた者は聖人を表す。

「貴方がアスタロトですか……。貴方の言った通り、私が教皇アル
ノルド・ヴィオンです。それで魔界の公爵よ、ここに来た理由を聞
かせてもらいましょうか」

アルノルドは静かに言い、今にも動かんとしていたハロルドとミ
シエルを視線で制した。ハロルドは無言でアスタロトを見つめる。
いくら契約者がいるとは言え、ルシファーに従う魔界の実力者の
一人である彼がわざわざ人の姿で現れた理由は分らない。

「ボクはただこれから敵になる人間を見に、ね。それにアルノルド・ヴィオンと言えば当代最強と謳われる悪魔祓い。興味があつたのが本音かな」

警戒心を露にするアルノルドにアスタロトはあくまでも軽く言った。アルノルド・ヴィオンは当代最強と謳われる悪魔祓いだ。しかしそれだけが彼の恐ろしさではない。

聖職者たちを纏めるそのカリスマ性。実に厄介だ。

教皇となつた彼は《学園》の学園長クリス・ローゼンクロイツと魔具職人協会——通称協会のマイスター、前《金剛石》コーラル・レイバスら共に長らく対立してきた《教戒》と《学園》を和解させた。

「“貴方”が訪れた理由は分かりました。ですが“逆十字”の理由ではないでしょう?」

確かにアルノルドの言う通り、アスタロトは見に来てただけと言つた。もし彼が気まぐれに自分達の元に訪れたのなら逆十字の使者だとは名乗らない。

契約者は何か考えがあつてアスタロトを寄越したのではないだろうか。

「ご名答。正式な宣戦布告を申し遣つて来た。“逆十字”には初めからあなた方と、教戒と交渉する気はない」

アルトルドの含みのある言葉に、アスタロトはがらりと態度と口調を変えた。

自らの名を名乗つた時と同じように唇の端を歪め、妖艶な笑みを作る。

「アスタロト、貴方は……なにを企んでいるのです？」

怪訝そうに眉を寄せるミシエルには答えず、懷から何かを取り出した。それは銀色の光を放つ小振りの短剣だった。

隠し持っていたというより、アスタロトが瞬時に精霊因子から作り出したものだろう。

「届け物を届けにね。それでは皆様、いつか本当に相見えることになるでしょう」

アスタロトはアルノルドに挨拶した時のように恭しく礼をすると、何の躊躇いもなく短剣を己——元の持ち主である青年の体に突き刺した。白い床に赤い花が咲く。

アスタロトは腹部に刺さったままの短剣を勢いよく引き抜いた。飛び散った赤が禍々しい薔薇のように見える。

「ッ……まずい！」

それを目にしたミシエルは彼らしくない叫びに近い声を上げた。瞬間、ハロルドはアスタロトがしようとしていることを悟った。ミシエルは小さく舌打ちをすると三人を庇うようにアスタロトの前に躍り出る。

時間にして僅か数秒、描き出された血の魔法陣は、部屋全体を覆い尽くし、血のように赤い光が彼らの視界を覆った。

血のような光が収まった時、ハロルドの視界に映ったのは淡い光の粒子を纏うミシエルと床に崩れ落ちた青年。アスタロトは魔力を解放した瞬間、青年の体から去ったのだろう。

目を閉じたまま、力なく横たわっている。それにしても爆発的な力が解放されたにしては破壊されたものはない。

「……皆さん、無事ですか？」

言うミシエルの背中には六枚の翼があった。ハロルドやノルンのような光の翼ではない。金掛かった白銀の羽毛の翼。神々しく、力強い神秘の象徴。

だがミシエルの顔色は悪く、いつ倒れてもおかしくない。

『あの翼……』

懐かしい。自分はこの翼を何度も見たことがある。

そう、だが自分とは誰だ？ ハロルド・ファースという人間？
それとも……。

「ミシエル！」

「私なら大丈夫です。それよりあの青年を」

ミシエルの言葉を受けたアルノルドは、急いで青年に駆け寄る。短剣を突き刺した腹部から足元にかけて真っ赤な血で濡れていた。傷は見た目よりも軽く、致命傷ではないが直ぐに治療しなければ命に係わる。

アルノルドは傷口に手を翳し、力ある言葉——精霊の詩を紡いだ。

『リザレクション』

翳した手の先に浮かび上がる複雑な薄紅色の魔法陣。淡い金色の粒子が傷口を覆ったかと思うと次の瞬間、腹部の傷は跡形も無く塞がっていた。

リザレクションは万物に宿る気を取り入れることで、致命傷に近

い傷でも癒すことが出来る。治療を終えたアルノルドは横たわったままの青年の体を起こした。

「……ラファエル、ミシエルと青年を休める場所に。ハロルド、予定通り逆十字とそれを率いる者の調査を任せる」

「御意」

ハロルドが頭を下げ、ラファエルが意識のない青年を抱き上げる。ミシエルは手を貸そうとしたハロルドをやんわりと制し、一人で歩き出す。

その時、ハロルドを鈍い頭痛が襲った。今なら忘れていた何かを思い出せそうな気がする。

だが駄目だ。脳裏にちらつく黄金の影。少しだけ髪に隠れた左目が痛んだ。

ハロルド・ファースという自分に宿る魂。前の持ち主は一体誰であつたのだろう。

時折頭に浮かぶ見慣れぬ風景。夕暮れに照らされた庭園と自分に微笑みかける誰か。その中でハロルドは決まって天高く伸びる階段に腰掛け、下に広がる何かを見つめていた。

送りの聖火

聖霊祭で行われる『送りの聖火』は一種の儀式である。死して魂となった死者が行くべき場所を見失わないための道標であり、残された者を慰めるためのものであった。

ノルンはシェイアードに來た時からこの儀式が嫌いだった。もはやこの世にはいない死者と残された生者のためなど、馬鹿らしいとも思っていた。

何故なら死者は何も語らない、語れない。生きる者を慰めるだけの行為になど意味がないと。

だがそれは逃げでしかなかった。他人を分かつともしなかった自分。馬鹿らしいと思うことで考えることを止めていたこの間までの自分。

何よりもそんな自分が馬鹿らしかった。だから本当はこの場にいくべきではないのかもしれない。

だが洩るノルンを誘ったのはシグフェルズだった。そんな彼もあたたかな光を放つ灯籠を手をしている。いつも微笑を絶やさぬシグフェルズだが、少しだけ元気がないように見えた。

夜の帳が下りた大聖堂の隣に位置する憩いの場、噴水の近くに二人はいる。

いや、正確には民や他の聖職者たちも広場に集まっていた。聖水が湧き出る泉のお陰でシェイアードは水に恵まれた都市である。

水路と道路が交錯する街は水の都とも呼ばれており、送りの聖火はその水路に灯籠を流す儀式だ。普段は荘厳な雰囲気包まれるシェイアードもこの日だけは、必要最低限の明かりだけを残し、穏や

かな光に包まれる。

「シグ」

ノルンが話しかけてもシグフェルズは灯籠を持ったまま、微動だにしない。その顔は少しだけ寂しそうで、それでいて痛みを堪えるような表情だった。

「……あ、ごめんね。これを見ると、どうしても思い出すんだ。明日だから。父さんと母さん、二人が……」

悪魔憑きとなった兄に殺された日。ちょうど聖霊祭の前日だった。次の日の予定を確認して、何の疑いもなく、家族で過ごせるのだと思っていた。

死者の魂は本当に迷わず、女神の御許に還ったのか。それすらも自分には分からない。毎年、それも送りの聖火を流す時は感傷的になってしまう。

「無理しなくていい、そう言わなかった？ シグが誘ったんだからそんな辛気臭い顔、止めて。いつものように笑ってよ」

分かってる。あの時、ノルンが彼の心を踏みにじってしまったこと。心無い言葉をぶつけてしまった。もどかしい。

ノルンは気の利くような台詞は言えなかった。だからいつものように不機嫌そうな口調で言うだけだ。

「うん……」

「ほら、早く流す」

シグフェルズは顔を歪め、泣き笑いのような表情を作った。ノルンは持っていた灯籠を皆と同じように、ゆつくりと水路に浮かべる。祈るという行為は今でも好きじゃない。けど、シグフェルズの両親のために祈ってもいいと思う。それは彼と出会う前のノルンからは考えられない変化だった。

この日になるといつも憂鬱になる。原因は考えるまでもなく分かっていて。今日は父と母が死んだ日だから。命日には必ず墓を訪れることにしていたが、やはり気分は重い。

いつもの黒の聖衣を纏ったシグフェルズは花束を手に、墓地を訪れていた。澄み渡る空とは裏腹に彼の足取りは重い。聖霊祭の翌日ということもあるのか、人影も疎らである。

もつともシグフェルズにすれば有り難いことなのだが。この時だけは誰にも会いたくはなかったし、話したくもなかった。それだけではない。古傷が痛むような錯覚に陥りそうだ。改めて部屋を訪ねて来たハロルドに言われた一言がまだ耳に残っている。

『呪いが変化しないとも限らない』

再び強大な悪魔の力を浴びれば、咎の烙印となる可能性があるかと告げられた。それを他人事のように聞いていた自分がいる。

実感が沸かないといった方が正しいだろうか。三年前からシグフェルズにとって“死”は恐怖ではなくなった。シグフェルズ・アーゼンハイトという人間は両親と共に死んだのだ。

だから死の呪いと聞かされても不思議と恐怖は感じなかった。自分はやはりおかしいのだろう。人として壊れているのかもしれない。だからもし、兄を悪魔から解放することが出来たなら、やっと眠る（しぬ）ことが出来る。怖くはない。

何故なら自分は既に死んでいるのだから。そう思った時、シグフェルズの脳裏を紫掛かった銀色が掠めた。どうしてこんな時にノルンのことを思い出したのだろう。

彼女と付き合うようになったのは最近、過ごした時間だって短いのにノルンを思い出した自分をシグフェルズは不思議に思っていた。

もし自分が死にたいといったのなら、彼女は何というだろう。

怒るかもしれない。いや、馬鹿な奴だと呆れるかも。それとも泣いてくれるだろうか。

いや、それだけはない。そう考えた時、シグフェルズはいつの間にか墓の前まで来ていた。

墓碑に使われている石には苔一つついていない。両親の名と生没年が刻まれた石を見ると嫌でも思い出してしまう。

「父さん、母さん、僕はもう死んだのかな？　今までは兄さんを解放したら死んでもいい。そう思ってたのに……今は分からないんだ。おかしいよね。僕という人間はあの日に、とつくに死んでいくのに……」

静かに花束を置いてシグフェルズは重い溜息と共に言葉を吐き出した。

三年前のあの日から生きる屍であった自分。それなのに心のどこかでそれを否定する自分がいる。

シグフェルズは自分自身が理解出来なかった。前は見えていた答えが見えない。ノルンという決意が揺らぎそうになる。変わってしまうことが何よりも怖かった。

駄目だと押し止めても無駄なような気がして。シグフェルズは深いため息をついて空を仰いだ。無論、澄み渡る青空に答えなんて書いていない。

だがそれさえも彼女の瞳に見えて来て、少年は自嘲するように笑い、ゆっくりと瞳を閉じた。

送りの聖火（後書き）

三章、終了しました！

彼女のように

こんな自分でも誰かを守れるようになりたかった。だからわたしは悪魔祓いを志したんだ。

けど、わたしは本当に誰かを守れるかな？ 救うことが出来るのかな？ 怖いよ。でも臆病なわたしはもっと嫌い。彼女のようにになりたいと思った。

紫掛かった銀色の髪を靡かせ、優雅なまでにバクルスを振るう少女、ノルン・アルレーゼのように。

この『力』は嫌い。だって見たくもない光景^{もの}を見せられるから。自分ではとてもコントロール出来なくて、幼い頃はいつも泣いて過ごしていた。

死の影に怯えるわたしに手を差し伸べてくれたのは彼だった。

大丈夫だから、そう言って手を握ってくれた。なのに彼が冷たい目で自分を見るようになったのはいつからだろう。

父と母が死んでから。ううん、二人が悪魔に殺されてから。その時のことをわたしはよく覚えていない。唯一脳裏に残っているのは赤い赤い血だけ。

少女はぼんやりと黒板に目を向けながら、ペンを走らせていた。完全に上の空な様子であるが、しっかりと手は動いていることから考えると話を聞いていない訳ではないらしい。

そんな彼女の耳に終業を告げる鐘の音が届いた。慌てて腕の下の

ノートを見る。どうやらまた手が無意識に動いていたようだ。ほっと一息ついた彼女に近づく人物が一人。

「またちゃんと聞いてなかっただろ、ラケシス」

振り向いた先にいたのは年若い少年だった。年の頃は恐らく十代後半。

さらりと流れる灰色の髪にややつり目がちの瞳はアイスグリーン。顔立ち自体はかなり整っているものの、どこかふてぶてしい、不敵な表情が似合う少年である。

彼もまた彼女と同じく、見習いの悪魔被いが纏う黒の聖衣に身を包んでいた。

「そ、そんなことない。クロトの気のせい……」

反論をしようとして失敗した彼女——ラケシスはクロトから視線を逸らした。見た目はクロトと呼ばれた少年と同世代だろうが、実年齢よりやや幼く見える。

瞳はトパーズを思わせる鮮やかな色をしていたが、見えているのは右目だけで左目は黒の眼帯に覆われている。

愛らしい顔立ちをしているが故に瞳を覆う眼帯は随分と異質だ。服装は少年と同じ黒の聖衣に首から下げた十字架は勿論、バクルスである。

二の腕に届くくらいの薄紅色の髪を両サイドで結わえ、後は肩に流していた。

「ノ、ノートは取ってるから大丈夫だよ」

「ならいい。……ほら、行くぞ。次は実習だ」

ラケシスはクロトに促されるように席を立つ。彼とは幼馴染であるが、何故ここまで自分の面倒を見てくれるのか彼女は知らない。
（でもきつと危なっかしくて、頼りないからだよね）
他に理由なんてないのだろう。何をやらせても不器用な自分を見かねてに決まってる。魔術の素養があっただけでも驚くべきことなのに、それさえも上手く扱えない。

「早く」

「う、うん」

急かされるようにノートを片付けて彼を追う。

しかし次の実習のことを考えれば気が重くなるばかりだった。

実習は何度やっても慣れることはない。逆効果だと分かっているも、いつも緊張してしまう。

しかも今日はラケシスの苦手な攻撃に関する魔術実習だった。結果は言うまでもない。……最悪だ。

見本として皆の前で魔術を披露したのはラケシスが憧れる少女――ノルン。純粹に凄いと思うのだ。自分は何をやってもどんくさいし、魔術だって上手く扱えない。

幼馴染であるクロトもそうなのだが、やはり同性だと感じ方が違う。自分も彼女やクロトのように強ければ、自らの内に眠る力を制御することが出来るのだろうか。

何よりも恐ろしくて呪わしい力。オストヴァルドの一族が持つ特殊な力。ラケシスは一族の中で最も強く、前例のない力を始祖より受け継いだ。

誰かが言った。失われたものだからこそ美しいと。

しかしラケシスにとっては違う。失われたもの全てが美しい訳じゃない。この世から失われたものがラケシスを苦しめる。美しくなんてない。何よりも恐ろしいのだ。

「いた……」

俯いた直後、眼帯をしている左目が酷く痛んだ。助けを求めようにもクロトは別室にいるためそれは無理である。それに今まではこんなこと無かったのに。

針で刺されるような痛みを意識が霞む。気を許せる相手もないのに、ここで倒れては駄目だ。なのに周りの声が豪く遠くに聞こえる。

誰かが耳元で何か言っている。だがそれを聞き取る前にラケシスの意識は闇に堕ちた。

どうして自分がこんな事をしなければならなのだろう。正直なところ少し、いや、かなり後悔していたが、この際仕方ない。彼女の近くにいたのが自分だったただけだ。

突然倒れこんで来た少女の体をノルンは咄嗟に受け止めた。いくら少女が標準より軽いとは言え、意識を失った体は予想以上に重い。

だがそのまま投げ出すことも出来ずに、とは言え一人ではとても運べないので、仕方なくシグフェルズを連れて来て医務室に行くことにした。面倒だったが、授業に飽きていたこともある。

シグフェルズは少女を医務室まで運ぶと授業に戻って行った。どこまでも真面目な人間である。

連れて来たはいいが、ノルンは少女の名前を知らないことに気付いた。見覚えは辛うじてあると思う。思うが、やはり名前までは思い出せなかった。

何よりも目を引くのは左目の眼帯。隻眼なのだろうか。愛らしい少女には明らかに不似合いである。

ベッドに横たえられた少女は未だ目を覚ます気配はない。ノルンが立ち上がるとしたその時、少女が僅かに身じろぎをした。

「ううん……クロ……ト？」

閉じられていた右の瞳が露になる。

しかしトパーズのように鮮やかな瞳はまだ焦点が合っていない。
少女が何か言葉を発した。途切れ途切れで聞き取れなかったが、人の名だろうか。

答えようにも自分は彼女が呼んだ人間ではないし、知り合いでもない。

「私はノルン」

瞬間、少女の目が驚愕に見開かれる。何かおかしいことでも言うたのだろうか。彼女の驚きようを理解できず、怪訝な顔をするノルンに少女はベッドから身を起こし、文字通り全力で謝った。

「す、すみません。わたし……」

「別に貴女は悪くない。わざわざ謝る事でもないから」

いきなり謝られてもノルンとしては困る。確かに面倒だったが、ここまで恐縮されれば怒る気も失せるというものだ。

そんなノルンを見て少女は更に表情を硬くした。シグフェルズはよく自分の態度は誤解を招き易いから、気をつけた方がいいと言われたのだが、もしや誤解を与えてしまったのだろうか。

兄の影

「突然倒れたから、傍にいた私がついていただけ。具合は？」

言いつつもノルンはそんな自分に驚いていた。何の打算もなく自然に他人を気遣えたのはシグフェルズを除いて初めてだ。

怯えたような瞳が教戒に来たばかりの昔の自分と重なったからだろうか。

授業が退屈だったことが理由だが、それでも少女についていたのは、何故か彼女が気になったから。

「す、すみません、ありがとうございます。はい、大丈夫です」

少女は見ていて可愛そうなくらい何度も頭を下げる。そう言えばノルンは彼女の名前を知らないのだ。他人の名前を覚えるのは得意ではないし、今までは覚える気もなかった。

まだ覚えるような気になったのは、間違いなくシグフェルズやハロルドのお陰だろう。

「あ、あの、わたし、ラケシス・オストヴァルドって言います」

「私はノルン。ノルン・アルレーゼ」

「知ってます」

先ほども名乗ったのだが、目覚めたばかりできつと覚えていないだろう。気を利かせてノルンが名乗ると、ラケシスと名乗った少女は初めて笑った。

そもそも自分はそんなに有名だろうか。聖人というだけで目を引

くことにノルンは気付いていない。ハロルドによると、どうやら自分と聖人を分けて考えている所があるらしい。

ふとした所で抜けているとハロルドやシグフェルズに言われるのだが、彼女は真面目である。

「そう……もう行くから。貴女のお迎えも来たようだし」

だがノルンが呟いた瞬間、我に返ったのか、ラケシスの顔から笑顔が消える。おどおどしたような怯えたような顔。これ以上の会話は望めない、そう思ったノルンは椅子から立ち上がった。

そのまま視線を扉に向ける。次の瞬間、凄い勢いで扉が開け放たれた。

「ラケシス！！」

開いた扉から現れたのは十代後半ほどの少年だ。左側だけがやや長い髪は曇天を思わせる灰色で、切れ長の瞳は涼やかなアイスグリーン。着ている聖衣も乱れていることから、余程急いで来たのだろう。

だが名前を呼ばれた当人はぽかんと口を開けて少年を見つめている。

「ク、クロト？」

クロト、と呼ばれた少年はラケシスを見て安心したのか深い息を吐いた。

同時に余計な力も抜けたようで、そのまま床に座り込んでしまうのではないかと思うほど、彼は安心していているらしい。

「……倒れたって聞いた」

「ちょっと左目が痛くなって、それで……。で、でももう大丈夫だよ?」

搾り出すようなクロトの声に、ラケシスは慌てて返事をする。ここまで取り乱した彼を見たことがない。いつも冷静で頼りになる。それが幼い頃から抱いていたクロトのイメージ。

勝手に倒れたことを怒っているのだろうか。

だがあの時、クロトは傍にいなかったし、助けを求めようにも無理だったのだから仕方ない。それは分かっているのだが、ここまで心配されると不安になる。

「じゃあ私、行くから。お大事に」

「は、はい。ありがとうございました」

クロトとラケシスを見比べたノルンは、声を掛けて部屋を出る。最後まで彼女が何を考えていたのか、ラケシスには分からなかった。しかしノルンが部屋を出た後、自分がそこまで緊張していないことに気付く。どうしてだろう、いつもならクロト以外の他人と話すと凄く疲れるのに。

「それで左目は?」

幾分か落ち着いたらしいクロトは、ノルンが座っていた椅子に腰掛ける。ちらりと窺ったクロトの顔はいつも通り、静かなものだった。

ラケシスはそつと眼帯ごしに左目に触れた。痛みはない。痛んだのは一度きり、倒れた時だけだ。それに眼帯を外し、鏡で左目を確認することだけがどうしても出来なかった。

「倒れる前に痛んだだけ。何ともないよ？」

クロトはこの左目のことをいつも気遣ってくれる。ラケシスは笑ったつもりだったが、ちゃんと笑えただろうか？

困ったように笑うクロトがラケシスの髪を優しく撫でる。懐かしい。まるで子供の頃に戻ったよう。

「大丈夫ならいいけど、無理はするなよ。いいな？」

「うん……」

「次の授業も休め。俺から先生に言っとくから」

そこまで言われれば否とは言えない。頷く事しか出来なかった。心配してくれていることくらいラケシスにも分かる。

ゆっくりとまるで壊れ物を扱うような手つきでブランケットをかける。

「クロト」

「なんだ？」

「わたしが眠るまで隣に……いてくれる？」

ちょっとくらい我が儘言ってもいいよね、と恐る恐るクロトを見上げる。今は一人で眠ることが怖かった。眠れば見たくもない『死』を見てしまいそうで。

「ああ、だから安心して眠れ」

不安そうな瞳で見上げてくるラケシスに、クロトは柔らかく微笑んだ。今の彼が減多に見せない笑顔、ラケシスが一番好きな顔だ。徐々に瞼が重くなる。その数十秒後には少女は眠りの世界に誘われていた。

ハロルドは当分の間、シェイアードを離れるらしい。その理由も詳しいことは教えてくれなかったが、逆十字が関係していることはシグフェルズも分かっている。

あの少女——ラケシスを医務室に連れて行ってから、ノルンはまだ戻っていなかった。

シグフェルズはその後も戻って出席したのだが、きっと彼女のそばについているのだろう。

「なあ、シグって最近アルレーゼと仲良いよな」

ばたばたと足音をさせ、シグフェルズの隣に並んだのはルームメイトのロヴァルである。栗色の髪に灰色の瞳、シグフェルズより僅かに背が高い。同じく黒の聖衣を纏っているが、とても聖職者には見えなかった。彼が持つ子供のような雰囲気のお陰だろう。

「そうだね。特別授業のこともあるし」

ここ最近、随分とノルンという時間が長い気がする。

だがハロルドが居ない今、それほど接点がある訳もないのだが、ノルンと過ごす時間はそう変わらなかった。彼女が全てを知っているからだろう。ノルンの前では自分を偽らなくていいから。

「アルレーゼって美人だけどクールというか、とっつきづらくねえ？」

顔をしかめて言うロヴァルに首を振る。彼女は冷たい人間ではない。本来は優しい少女だ。

ただ、教戒に連れて来られた一件がノルンの心を閉ざしてしまっただけ。

「そんなことない。ロヴァルも話してみれば分かるよ」

「ふーん……そりゃ、意外だな。てっきり冷たいのかと思った」

ルームメイトの気のない返事に苦笑する。彼らしいというか何と
いうか。

その時、そんな二人の横を一人の聖職者が通り過ぎた。シグフェ
ルズは見覚えのある顔に思わず振り返る。

だがその時には聖職者は角を曲がった後で顔までは見えない。急
に立ち止まり、振り返ったシグフェルズにロヴァルが心配して声を
かけた。

「おい、シグ？」

ロヴァルの声も最早耳に入らなかった。

三年の時が経とうとも、見間違えるはずがない。あれは確かに兄
だった。亜麻色の髪に榛色の瞳。優しくったはずの、だが今は契約
者となった兄がどうしてここに？

「ごめん、ロヴァル、先行ってくれる？ 忘れ物取りに行つて来る
から」

「お、おお」

適当な理由を付けて走り出す。ロヴァルは突然の行動に驚きなが
らもシグフェルズを見送るしかない。かなり驚いていたようだが、
一体何を忘れたのか。廊下に一人残された少年は首を傾げ、仕方な
く歩き出した。

本当に兄なのだろうか。角を曲がった瞬間、向こうから来た誰か
にぶつかりそうになって立ち止まる。

「シグ？」

「え、ノルン!？」

シグフェルズがぶつかりそうになった相手、それは兄ではなくノルンだった。

居なくなった少年

医務室を出て教室に戻ろうとしたノルンは角を曲がった瞬間、誰かとぶつかりそうになって身を引いた。

確かめるように顔を上げれば、そこには見知った顔。シグフェルズだった。しかもかなり驚いているようで呆然とノルンを見つめている。

「シグ？　どうかした？」

「あ……ごめん。あの、ノルン、ここに来るまで誰かとすれ違わなかった？」

何故そんなことを聞くのだろう。質問の意味が分からない。それにたとえすれ違っていたとしても、注視していなければ、誰かまでは分からないのではないのか。

尋ねる少年は彼らしくない焦ったような顔をしている。訝しげに思いながらもノルンは正直に答えた。

「誰ともすれ違ってないけど、それが？」

一体どうしたというのだろう。医務室を出てからシグフェルズとぶつかりそうになるまで誰とも会っていない。それを聞いたシグフェルズは小さくため息をついて礼を言った。

「そっか……ありがとう」

「一体何があつたの？　さっきから変」

シグフェルズがここまで取り乱すのも珍しい。少なくともノルンはここまで彼が焦燥といった感情を表に出すのを見たことがなかった。やはり何かあったのではないのだろうか。

「……前に話したよね。兄が悪魔と契約したって。その兄が今、ここにいたんだ。見間違いじゃない」

そう、間違いではない。自分が兄を見間違えるはずがないのだ。あれは確かに兄だった。

だが背中が痛まなかったのは何故だ？ ノルンに説明しながらもシグフェルズは訳が分からなかった。ふと下を見れば床に太陽の光を弾いて煌く何かがある。

「これは……」

近寄って手を伸ばし、それを拾い上げる。手の中にある物を見た瞬間、シグフェルズは愕然とした。硬直する少年に気付かず、ノルンも彼の手の中にあるものを覗き込む。

それは元は銀色だったのだろう、くすんだ十字架だった。だが右部分が大きく欠け、赤黒く変色した血がこびりついている。

「兄……さん」

銀色であったはずの十字架は、献身なアルトナ教徒であったシグフェルズの兄が肌身離さず身につけていたものだった。

シグフェルズが発した兄さんとの一言。それはどういう意味なのか。答えを求めるようにノルンはシグフェルズを見る。

悲哀と戸惑い、そしてとても言葉では言い表せない愛と憎しみ、その全てが入り交じったような複雑な表情を少年は浮かべていた。

こんな時、何と声をかければいいのかノルンには分からない。もどかしくて悔しくて、気の利いた言葉すら言えない自分が嫌だった。

「ねえ、ノルン」

「……なに？」

十字架を握りしめ、ノルンを見つめる少年は寸分も弱さを感じさせない、決意を秘めた顔をしている。その表情がシグフェルズらしいと思う反面、目の前の少年が酷く遠くに感じた。

だがノルンは決してそれを顔には出さなかった。出せるはずがない。

彼から事情は聞いた。しかし所詮、自分は他人なのだ。彼と彼の兄との間に立ち入ることなんて出来るはずがない。

「……魔術でこの十字架の持ち主を追うことは出来る？」

シグフェルズの表情と兄との一言からこの十字架の持ち主は三年前、彼の両親を殺し、シグフェルズの背中に癒えない傷をつけた人物。シグフェルズが慕っていた兄。

だがノルンは少年から十字架を受け取ると静かに首を振った。

「……駄目。これだけじゃ追えない」

確かにその人物が持っていた思い入れのある品から持ち主を追う追跡魔術は存在する。存在はするが、この十字架は追跡魔術を行使するための条件を満たしていない。何者かの手で痕跡を消されているのだ。それも追跡魔術すら使えないほど完璧に。

彼の兄と契約した悪魔の力なのだろうか。

だが何故、今になってシグフェルズの前に現れたのだ？

彼を殺すため？ それとも他に思惑があるのか。

だが教戒の総本山に現れたのなら、余程力のある悪魔に違いはない。でなければこの世界でもっとも女神の力に満ち溢れたこの地に現れることなど出来はしないのだから。

「……そう。ありがとう」

十字架を受け取ったシグフェルズはぽつりと呟いた。これが罫であることくらい彼にもわかっている。同時に猶予がないこともシグフェルズは痛いほど理解していた。

悪魔と契約した人間は長くは生きられない。何もしなくとも兄は死ぬだろう。その前に兄を解放しなければ彼の魂は永劫に転生の輪から外れ、悪魔のものとなってしまう。

相手がしかけて来たのなら乗るしかない。たとえ刺し違えることになるうとも、たった一人残った家族なのだ。

それから数日、目に見えてシグフェルズの様子はおかしかった。何をするにも上の空で、ノートを取る手は動いているが、授業など耳に入っていないに違いない。

十字架のせいだ。あれと彼の兄の姿を見たから。唯一頼りになるハロルドもシェイアードを離れており、一介の悪魔祓い見習いのノルンではどこにいるかさえ分らない。

「……考えるだけ無駄、か」

自分が力になれることはないだろうし、シグフェルズがノルンを巻き込むことを望むはずがない。人当たりが良い様に見えて彼は「一人」なのだ。

誰も心の奥底には近づけない。笑っていても心から笑っているわけじゃない。彼自身は気付いているかどうかは知らないが、彼は他人とどこかで線を引いているのだ。

ノルンが初めて彼を見た時、どこか影のある少年だと思った。優しくに微笑んでいるというのに、時折見せる闇を秘めた顔。

あるいは彼は自分と同じなのかもしれない。だからこそ最初は反発した。きっと彼は誰に言うつもりもないのだろう。自分の手で兄を解放するために。

酷く不安になった。シグフェルズはノルンの目の前にいるいうのに、遠い。単純な距離ではない。

それから更に数日経った日のことだった。シグフェルズが姿を消したのは。彼の様子を見に部屋を訪ねたとき、ルームメイトは言った。

「シグ？ ああ、何でも故郷に墓参りに行くとか行ってたな。今日と明日、外出届出してたみたいだけど……」

嘘だ。彼の両親の墓はシェイアードにある。故郷に墓参りのはずがない。

ノルンは目を白黒させる少年を他所に有無を言わさず部屋に入っ
た。

「え、ちょ……。アルレーゼ、何すんだよ」

「いいから黙ってて」

慌てて止めようとした少年にノルンから鋭い視線が飛んでくる。

かと思えばいつの間にかバクルスを突きつけられており、少年はそのまま彫像のように固まった。

ノルンはバクルスを十字架に戻すと遠慮なくシグフェルズの部屋に続く扉を開ける。

「……どうしてこんなに殺風景なのよ」

扉の先、シグフェルズの部屋は前に訪れた時以上にがらんとしていた。殆どのものが片付けられ、きちんと整理されている。まるで死期を悟った人間のような部屋だとノルンは思った。

戸棚の上に立てかけられていた写真立ては倒されている。写真立てを起こせば、写真の中から家族が幸せそうに微笑みかけていた。

「馬鹿……！」

どうして何も言わないの。分かっていたはずだった。けど心のど

こかで少しは信じてくれていると思っていたのに。なのに彼は消えた。

ノルンは写真立てを持ったままゆるゆると床に座り込む。そこに温かみは一切無い。主を失った部屋はただ静かにそこにあった。

どうすればいいかなんて分からない。相談できる相手もない。今までのノルンなら、他人に干渉することをよしとしない自分なら、関わろうとも思わなかっただろう。

だが今の自分は過去のノルン・アルレーゼとは違う。シグフェルズが教えてくれたのだ。家族でもなんでもない他人を思う心。

どうして自分一人で抱え込もうとするのだろう。確かに自分は他人だ。

それならば最初から話さなければよかったのだ。兄のことも両親のことも。聞いた以上、知らないふりをして日常に戻るなんて出来はしないのだから。

握り締めた写真立ての中では色あせる事ない家族が微笑んでいる。仲の良い二人の兄弟と寄り添う両親。

シグフェルズにとっては永遠に失われた、ノルンにはもう手に入らないあたかなもの。たった一人残った家族を助けたいと思うのは当然だろう。

写真立てを戸棚の上に戻し、ノルンは立ち上がる。もしかしたら彼は、シグフェルズは差し違えても兄を助けるつもりなのかもしれない。いつも以上に整理された部屋をみるとどうしてもそう思ってしまう。

杞憂ならいい。だが杞憂だと言える理由などどこにもないのだ。

「……本当に馬鹿。一人じゃ勝てないことくらい、分かりきってるのに」

自分を連れていけば良かったのだ。悪魔に対して絶対的な力を有する聖人であるノルンを。シグフェルズの兄と契約した悪魔はこの間、相対した悪魔と同じく、高位に属するもの。

いくらバクルスを操る才を持つ彼と言えど魔術も使えない人間が契約者に勝てるはずがない。人間が酸素を必要とするのと同じくらい、それは絶対的な理なのだ。

「お、おい、一体どうしたんだよ……」

「何でもない」

怯えたように尋ねる少年にノルンは首を振り、部屋を出る。早くシグフェルズに追い付かなければ。

どうやって？ どこに行ったかも分からないのに。

ノルンは自分の迂闊さを呪いたくなった。シグフェルズのおかしい事に気づいていたのに。まさか一人で教戒を出るとは……。だがそれを悔やんでも現状は変わらない。

ノルンは胸から下げた十字架を握りしめる。もし本当に神がいるのなら、何故世界はこんなにも不条理なのだ。シグフェルズは兄の手で両親を失い、優しかった兄さえも失った。

女神に祈ったって何も変わらない。餓えは満たされないし、強者が弱者を虐げる現実も変わらない。だから私は神なんて信じない。そんな不確かな存在^{もの}は。

死を視る者

問題はシグフェルズの行方だ。ノルンには全く見当がつかない。ルームメイトの少年が言っていた故郷の墓参りというのもシグフェルズの嘘に違いない。わざわざ本当の事をいう理由がないからだ。このままではシグフェルズは死ぬだろう。大袈裟ではない事実だ。ただの人間が高位の悪魔に勝てるはずがない。死に行くようなものだ。あるいは本当に彼は兄に殺されるつもりなのか。

分らない。ノルンには今のシグフェルズの気持ちなんて分からなかった。

昔の自分なら違う人間なんだから当たり前だと笑い飛ばしていただろうが、笑い事では済まない。自分が思う以上に焦っていたのか、ノルンはぶつかるその時まで誰かの存在に気付かなかった。

「きゃっ！ ご、ごめんなさい！」

耳に入った声に我に返り、慌てて声の主の手を掴んだかと思えば、怯えたような声が返って来る。

顔を上げてみれば、そこにいたのは薄紅色の髪に黄玉の瞳、愛らしい顔には不似合いな眼帯を付けた少女——ラケシスだった。この間からどうも彼女と縁があるらしい。そんな事よりシグフェルズをどうにかして探さなければならなかった。

「あ、あの……どうかしたんですか？」

「何でもない。……それに貴女には関係ないし」

そう、彼女には関係ないのだ。だから早く行かなければ。

だが身を翻したノルンの手を彼女が掴んだ。そしてそれはラケシス自身も驚いたようで、自分の手とノルンの顔を交互に見つめる。

「離してくれる？」

「は、離しません。何を焦っているのか教えてくれたら……離します」

真っ直ぐに見つめてくるラケシスにノルンは驚いていた。ノルンから見れば彼女は気弱で、自分の気持ちすら満足に伝えられない少女である。

なのに今のラケシスに怯えの色はない。それとも恐怖に代わる何かが彼女を突き動かしているのか。

「シグの、シグフェルズの行方を探してる。でもこれ以上は話せない。彼の命に関わるからだから」

何故話す気になったのか、ノルンにも分からない。

ただ、そうしなければいけない気がしたのだ。するとラケシスは眼帯に手を当て、静かに言った。

「……わたしなら多分、シグフェルズさんの行方を知ることが出来ます」

「何を……」

怖がるな、大丈夫だと言い聞かせてラケシスは眼帯に手を当てた。この力を使うことで誰かを助けられるのなら、喜んで使おう。

ラケシスは何を言っているのだろう。魔術であっても彼の行方を追うことは出来ないのに。

だが訝しげに彼女を見つめてもラケシスは、真剣そのものといった表情だった。

「……シグフェルズさんが死の危機に瀕しているのなら。あの、アルレーゼさん、手を出してください」

もうどうにでもなれ、そんな気分でノルンは右手を出した。ラケシスはノルンの手を取るともう一方の手で眼帯を外す。

黒い眼帯の下から表れたのはもう片方の瞳と同じ、黄玉を思わせる瞳だった。

（大丈夫、制御出来る）

瞬間、ラケシスの心の中に流れこんで来る様々な思い。慟哭、悲哀、それらがなймаぜになった感情。飲み込まれては、引きずられては駄目だ。気を強くもたねば……。

「これは……何？」

ラケシスの変化は彼女と手を繋いでいたノルンにも起こった。これが今、彼女の瞳にうつっているものなのだろうか。ノルンは思わず目を逸らしそうになり、止めた。

今、ノルンの瞳にうつっていたのは、かつて生きていたであろう人間たちであった。子供の亡きがらを抱えた母親に切断された己の首を持つ罪人。

他にも鮮血を滴らせて歩く女に虚ろな瞳を向ける少女。誰もが半透明で、皆一様に苦痛と恨みに歪んだ顔をしている。

気を抜けば吐き気が込み上げてきそうだった。これが、こんなものが存在していいはずがない。

「これは……未練、です。苦痛に歪み、死した者たちの。いくら教戒と言えど、いえ、教戒だからこそ。異端として滅された魂たちの声なき叫び」

「シグ！」

語るラケシスは先程とは違い、ぐっと大人びて見える。

驚き、人々を見つめるノルンの視界にシグフェルズの姿が入った。思いつめたような表情で教戒を出る少年の姿を。彼女は死した者たちの、と言った。では自分は間に合わなかったのか？

「大丈夫です。幻影がはつきりしているということは、シグフェルズさんはまだ生きています」

「ラケシス！」

絶望しかけたその時、ノルンの耳に入ったのはラケシスの声だった。そう、今はまだ生きている。

だがこのままでは彼は間違いなく死ぬ。でなければこの瞳で視えるはずがない。

どこからか聞こえた切羽詰まった声に二人は振り向いた。息を切らせて二人の、ラケシスの元に駆けて来るのは灰色の髪少年、クロトだった。

切羽詰まったような、それでいて懇願するような声。振り返った先には息を切らせ、今にも泣き出しそうなクロトの姿があった。ずっと一緒にいるラケシスでさえ見たことのない彼の表情。

「クロト……？」

気付いた時には遅かった。ラケシスは今、眼帯をしていない。そう、彼はこの瞳が“嫌い”なのだ。忌まわしい死を視る力の源だから当たり前である。

何があっても絶対に外すな、そう言われたのはいつだったか。それさえも思い出せない。

「ラケシス！ 何故眼帯を外したんだ！？ 力を使い過ぎれば命を削るんだぞ！！ 分かってるだろ！」

「分かってる。分かってるよ……」

駆け寄ったクロトはラケシスの肩を掴み、半ば叫ぶように言った。いつもは冷たい輝きを放つアイスグリーンの瞳は怒りと悲しみに燃えている。

まともにクロトの顔を見れず、少女は俯いた。この忌まわしい力はラケシスの一族が生まれ持つ特殊な才。人はそれを死を視る魔眼と呼ぶ。

そんな一族の中で彼女はもっとも強い力と前例のない力を受け継いだ。

だが強すぎる力は持ち主の体さえ蝕む。だからこそラケシスは制御出来ない魔眼を眼帯で隠していたのだ。

「分かってないだろ！」

俯いたまま、一向にこちらを見ようとしないラケシスにクロトは無理矢理顔を上げさせた。その瞳から流れ出た透明な雫を見て、少年は驚き、沈黙する。

「取り込み中、悪いんだけど、一体、“何なの”これは？」

気まずいを通りこしてぎすぎすした状態の二人に、痺れを切らしたノルンが割って入った。喧嘩するのは勝手だが、説明を要求したい。何が何だか訳が分からない。

今すぐにもノルンはシグフェルズを追いかけて行きたいのに。視えたのは彼が教戒を出したところだけ。全てが終わってからでは遅いのだ。

彼をむざむざ死なせる訳にはいかない。何としても生きて連れ戻さなければ。高位の悪魔と戦うことにもなるかもしれない。

それでも不思議と恐怖はわかなかった。生きて連れ戻す。それだけがノルンの心の中をしめていた。何故そう思うのか、疑問にすら思わない。

「……わ、わたしは死、あるいは未練を視ることの出来る“目”を持っています」

「じゃあ、シグは……」

もう既にこの世にいないとも言っただろうか。

だがノルンの言わんとする事を察したのか、ラケシスは静かに首を横に振った。

もう逃げない

「いいえ、いいえ。シグフェルズさんは生きています。……今はまだ」

ラケシスはシグフェルズは今はまだ生きている、としか言う事が出来なかった。彼の幻は明らかに他の死の幻影とは違う。質感を持つていると言えはいいだろうか。言葉では表現しづらいが、そう感じるのだ。

だが彼に死が迫っていることには変わりがない。このままでは彼は確実に命を落とすだろう。

「だったら、どこに行ったか私は知りたい。貴方が彼女を心配するように、私もシグを死なせたくない」

時間が無いのだ。こうして話している時間さえ惜しい。ノルンが向ける真摯な感情に気付いたのか、クロトは押し黙った。彼女の気持ちいが痛いほど分かってしまったから。

クロトは意を決してラケシスを見る。ついこの間まで小さいと思っていた少女は力強く頷いた。

ラケシスはもう子供ではない。自分は一体、今まで何を見ていたのか。彼女は誰かの助けが必要な幼い少女だと信じて疑わなかった。

「なら、俺も行く」

たとえラケシスが了承しても『死』が見えたのなら、危険だつてあるだろう。

そんな場所に行かせるわけにはいかない。たとえノルンが最も悪魔被いに近いとされる人間であっても。

「分かった。でも貴方が心配するようなことは何もない」

こちらを睨みつけてくるクロトに対し、ノルンは事もなげに言った。

何を心配しているかは知らないが、元より彼女を危険に曝す気はない。これはノルンが勝手にしていることなのだから。

それに高位の悪魔、もしくは契約者を相手にするかも分からないのに、見習い二人を連れていったところでどうにもならない。

本来ならハロルドに連絡を取るべきなのだろうが、待っていられるか。正しい判断だとはノルンも思わない。

けれど、マラキ大司教に報告した所で信じてくれるはずがないから。

「……いいだろう」

「じゃあ、頼める？」

「は、はい……」

集中しなければ見えすぎてしまう。見たくないものまで視界に入ってくるのだ。

ラケシスは大丈夫だと自分に言い聞かせ、心を静める。乱れた心のままだと集中出来ないからだ。シグフェルズだけに意識を集中させる。

「……視えました。どうやら、迎えが来たようです」

ラケシスの魔眼が映したのは、舞い上がった黒い雷鳥。その背中

にはシグフェルズの姿がある。
彼は魔術を使えないと聞いた。ならば迎えが来たと考えて間違いない。

「なら、私たちも空に」

言いつつノルンは集中し、“白き翼もつもの”に呼び掛ける。

ノルンはその身に宿す聖気のためか精霊に好かれやすい。精霊は複数の精霊因子から構成される人とは違い、単一の因子で構成される存在。彼らは人にはない特殊な力を持っている。

精霊は好きだ。人間と違って純粹だから。人なんかよりずっと綺麗で生き生きしている。

もしかしたらノルンは人間ではなく、精霊として生まれるべきだったのかもしれない。聖人でありながら神を信じない自分は。

ノルンが召喚魔術を行使することは殆どない。得意でもあるのだが、召喚対象との意思疎通が出来すぎてしまうのだ。それは召喚魔術を扱う者にとっては良いかもしれないが、戦う時はそれがかえって邪魔になる。

意識を集中させ、ここではない別の場所にいる彼に呼び掛ける。

『我が術と力をもって此処に願う。開け、幻界への門。我が喚び声に応えよ。汝、弱きを助け、生命いのちを守る慈愛の翼。天駆ける白き羽根持つもの』

召喚魔術とは自らより高位の存在——精霊を呼び出す術である。まず召喚対象のイメージを練り上げ、その存在に呼び掛ける。

自身と対象を繋ぐ門を作ること召喚対象の力の一部を借り受けることでもあるのだ。

これより高位の召喚魔術は実体化マテリアライズと言われ、召喚対象そのものを具現化させることも出来る。

『……今こそ汝が姿、我が前に示せ。出でよ、高貴なる光の運び手、ペガサス』

ノルンが掲げた手から描かれる光の魔法陣。複雑な紋様が描かれた円形の魔法陣が一際強く輝いた。視界が光で塗り潰される。耳元で力強く、そしてしなやかないななきが聞こえた。

光が消え、視界が戻って来た時には目の前に幻獣と呼ばれる精霊の姿がある。

真っ白な毛に覆われた優雅な馬。ただ普通の馬と違うのは、背には一点の染みもない純白の翼を背負っていること。海のように深い紺碧の瞳が印象的だ。

「ありがとう、あなたはいつも私に応えてくれるのね」

誓約を交わした訳でもないのに、この天馬はいつもノルンの声に応えてくれる。彼が向けてくれる純粋な好意が嬉しかった。

礼を言えば、穏やかな声が返ってくる。

『私はいつでも君の味方だよ』

年若い青年のような声だった。じっとこちらを見つめてくる青い瞳には深い知性の色が見える。

するとその時、ノルンはラケシスとクロトが驚いたような目で自分を見つめていることに気付いた。

「どうかした？」

「し、召喚魔術はとても素養を必要とすると聞きましたので……」

ラケシスの言う通り、召喚魔術は治癒魔術と並び、最も素養が必要とされる術である。治癒魔術は魔導師の中でも扱える者が限られている。

対して召喚魔術は魔導師であれば誰にでも使えるものであるが、何せ召喚する対象に気に入らなければならないのだ。

例え魔力が低く、魔術の素養に恵まれなかった者でも、召喚魔導師として名を馳せた者もいる。逆もまたしかり。

稀にノルンのように双方とも得意とする人間もいるが、ラケシスやクロトもそれを目にするのは初めてである。

「ごめんね。少し重たいと思うけど、お願い出来る？」

いくらペガサスが大きいとは言え、人間三人を乗せて飛ぶのは辛いだろう。

だが心配するノルンにペガサスは気にするなと笑ってみせた。

『なに、重くはない。他ならぬ君の頼みだ。それくらい我慢するさ』

本当に彼は人間ではないが、人がいいと言うか、思わず笑ってしまふ。人間年齢に換算するならまだ年若い青年なのだろうか。

ノルンは彼の真名も知らないし、年齢だって知らない。自分よりずっと年上であることしか。

ノルンはペガサスに跨がると、ラケシスとクロトにも彼に乘るよう促した。

『行くよ』

「ええ」

ノルンが頷くと同時にペガサスは白い翼を広げ、蒼穹に舞い上がった。ふわり、と体が宙に浮く浮遊感。ペガサスはぐん、と風を切り、更に上昇した。シェイアードの街中が随分小さく見える。

だが今は景色を楽しむ余裕はない。

「頼める、ラケシス？」

「は、はい」

ぶんぶん頭を振り、何度も頷く彼女はひどく怯えているように見える。その証拠にペガサスの鬣を思いきり握りしめていた。痛くないはずはないだろうにペガサスは涼しい顔をしている。

しかし彼女、もしかして高いところが苦手なのだろうか。

クロトの方は今正に思い出したようにしまったという顔をして、頭に手を当てた。この少年はすっかりしていると思っていたのだが、どうやらそうでもないらしい。

ラケシスは必死に鬣を握りしめたまま、黄玉の瞳を空に向ける。

「そのまま真っ直ぐ飛んでください」

彼女の眼に見えるのはうつすらとした少年の姿。先程見た幻より更に色が薄い。残っているはずの僅かな猶予でさえ尽きようとしているのか。

ラケシスは今まで何度も“死”を見た。視えたからと言っても、いつも助けられるとは限らない。だから彼女は力を封じて、嫌なものに蓋をした。

でなければ心が耐えられなかった。死に慣れることなんて出来なかったから。

だがその選択は本当に間違っていないかったのか。今になって、いや、ノルンを見てそう思うようになった。

父と母は何も悪くないんだと言ってくれた。クロトは何も言わずそばにいてくれた。

だけどそれは所詮、逃げだったんだ。どんな理由を並び立てても向き合つのが怖かった。この忌まわしい力と。心が折れてしまいそうだった。

「大丈夫か？」

心配してクロトが声をかけてくれる。力を使った反動が、少しだけ目が痛い。

正直なところ、開けているのさえ億劫だ。

だが、もう決めた。この力から逃げないと。一度だけ目を閉じ、ラケシスは迷いのない声で頷いた。

「うん」

悪夢の再現

初めてその声を聞いた時、信じられなかった。
兄声を聞くことを何よりも待ちわびていたから。

『……シグ、シグフェルズ』

兄が大事にしていた十字架から声が聞こえたのは休みの前日、月明かりが眩しい夜のことだった。

三年ぶりに聞いた兄の声。少しだけ大人びた、だが記憶に残る優しいげな声と同じ。

アルド・アーゼンハイト。それがたった一人残った肉親の名。

憎しみと愛情がないまぜになって上手く表現出来ない。

自慢の兄だった。何でも出来て優しく、不満などあるはずもない。

兄は、兄の声は言った。明日、迎えを寄越すと。自分に会いたいのなら、明日指定の場所に来るように言った後、愛してるよ、シグフェルズ。そう言って声は途切れた。

本来ならハロルドかノルンに相談すべきなのだろう。

だが出来ない。二人には関係ないのだ。これは自分の問題だから。自分がはじめを付けなければならない。それがただ一人生き延びてしまった自分の役割。

シグフェルズは戸棚の上に立てかけてあった写真立てを手に取る。そこには色褪せることのない家族、もはや記憶の中にしか存在せぬ過去の象徴があった。

その写真をまるで瞳に焼き付けるように見つめ、シグフェルズは写真立てを倒した。

首から下げていた十字架を持ち、バクルスを具現化させる。

月光を浴びて光る銀色の杖には悲痛な面持ちをした少年が映っていた。

迷いを振り払うようにバクルスを振る。ひゅん、と風を裂く音が虚しく部屋に響いた。

答えなど始めから決まっている。他に選択肢はない。

兄はきつと昔のままの優しい兄ではない。そうと分かっている、心の中で優しかった兄に戻ってくれるのではないのかと思う自分がいる。

きつと自分を殺すために呼び出したのだ。

それでも構わない。全てを“終わらせる”のだ。歪んだ生も、死も、全て自分が持つて逝く。

それが三年前からずっとシグフェルズが望み、願ったこと。

誰に理解して貰おうとも思わない。きつと間違っているのだろう。でも……。

「僕がやらなければ、誰もアルド兄さんを解放出来ないから」

か弱き人の身では契約者には勝てないだろう。

だが勝つつもりなんてこれっぽっちもない。

シグフェルズの望みはただ一つ。兄を解放することだけなのだから。

右手には兄の十字架を、左手には愛用の銀の十字架を握って、シグフェルズはただ一人『彼』を待っていた。

自分を迎えに来た黒い雷鳥はシグフェルズを降ろすと、まるで役目を終えたかのように消えた。

彼が今いるのはシェイアードを見渡せる草原、緑の草花溢れる高い丘である。時折吹く初夏の風がシグフェルズの髪を揺らした。両親が死に、ハロルドと同じ孤児院にいたのが一年、教戒に来て二年。長いようで短い三年だった。

死を間際にした殉教者のように彼の心は穏やかだった。凧いであといていい。

待ち人はまだ現れない。焦らされているのだろうか。三年待ったのだ。これくらい、いくらでも待ってやる。本来ならあの家に戻るべきなのだろうが、シグフェルズの家はもうない。今は更地となっているだろう。

何故なら兄が悪魔に魅入られてしまったから。悪魔によって命が絶たれた場所。その全てに浄化が行われ、祝福がかけられる。だがそれでもその地に残る慟哭と怨嗟は消せはしない。

「久しぶり、シグ」

聞きなれた、懐かしいとも思える声。

だがそれと同時に押し込めていた感情を溢れ出させる忌まわしい声でもあった。

声の方を振り向けば、そこには確かに『兄』がいる。

アルド・アーゼンハイト。シグフェルズの三つ離れた兄。

艶やかな亜麻色の髪に母と同じハシバミ色の瞳を持つ青年は記憶に残る顔で笑って見せる。秀麗な顔立ちは青年というより女性的な美しさを醸し出していた。

それがあまりに三年前と変わらなくて、シグフェルズは思わず泣きそうになる。

「アルド兄さん……」

突然、周りの景色が変わった。緑溢れる草原ではない。今まで見えていたはずのシェイアードも草でさえも見当たらない。

そこは確かに存在しないはずの我が家。二人は家の中にいた。

記憶に残る家と寸分も変わらない。窓から見えるのはあの日と同じ降りしきる雨。何もかもが同じだった。兄が両親を殺したあの時と。

「おかえり、シグ。僕たちの『家』へ」

それは彼のよく知る穏やかな笑顔ではなく、禍々しくも美しい、妖艶な笑み。正に悪魔と契約した契約者の顔である。

だが契約した悪魔は一度も姿を現さないではないか。

それとも見えないだけで近くににいるのかもしれない。

例えそうであっても、シグフェルズにはそれを感じる力はない。

震えが甦ってくる。

深く思い出さないよう記憶の底に押し込めて、封じたはずの光景を見せ付けられているのだ。平静でいられるはずがない。怯えた様子のシグフェルズにアルドは更に笑みを深めた。

シグフェルズはどうやらシェイアードの外に出たらしい、とラケシスが教えてくれた。

こうしている間にも焦りばかりが募っていく。

早く、早くシグフェルズのもとへ行かなければ……。

『大丈夫かい？ 焦る気持ちも分かるけど、落ち着いて。でなければ見えるものも見えなくなるよ』

考え込むノルンを心配し、ペガサスが言った。海のような青い瞳を前に向けたまま、だがその声は確かにノルンを案じ、嗜めるものだった。

頭から冷水を浴びせられた気分である。彼の言う通りだ。曲がりなりにも悪魔と戦うのつもりなら、冷静にならなければいけない。

焦りを抱えたままではシグフェルズを助けられない、見えるものも見えなくなる。

ノルンは深呼吸をし、瑠璃色の瞳を閉じた。

「……ありがとう。お陰で目が覚めた」

次に目を開けた彼女はいつもの、彼が大好きな『ノルン・アルレ―ゼ』だった。

自分を見失ってはならない。彼を助けたいのなら、感情に流されてはいけない。

『それでこそ君だよ』

そう言っただけは笑った。

風をきって更にペガサスは速度を上げる。

「あそこです、あそこでシグフェルズさんは降りました」

ラケシスが指差した先、そこにはただ緑の草原が広がっているだけ。

小高い丘の上にはシグフェルズどころか人っ子一人見当たらない。

「あそこに降りしてくれる？」

『分かったよ』

ノルンの声にペガサスは速度を緩め、ゆっくりと草原に着地した。空から見た通り、そこには何も無い。シグフェルズがいたという証でさえも。

「ありがとっ、ここで良い。……白き翼持つものよ、汝が在るべき場所へ還れ」

ノルンがペガサスの鬣を撫でながら、静かに呟いた。

途端、純白の翼を持った天馬は光となって消えて行く。仮初の肉体として組み上げた精霊因子の結合を解いたからだ。

「……足跡はここで終わっています」

シグフェルズを探そうにも、魔力を持たない彼を探し出すことは出来ない。出来ないが、ノルンは確信していた。

「……いる」

微かに感じる魔の気配。聖人であるノルンだからこそ分かる。畏かもしれない。それとも誘っているのか。どちらでも良かった。ノルンがやるべき事はただ一つ。

「もういいから、貴方たちは帰りなさい。これ以上留まるのなら、命の保障は出来ない」

そこでノルンはラケシスとクロトを振り返った。シグフェルズの居場所が分かった以上、ラケシスに用はない。

それにここで引き返さなければ、本当に戻れなくなる。

ただ一人の味方

どうして、何故こんなことになってしまったんだろう。何度そう思ったことか。

しかし悔いても時は戻らない。死んだ者は生き返らない。だが全てを諦めてしまうこともまた、シグフェルズには出来なかった。だから彼は唯一生き残った償いをしようとした。契約者となった兄と差し違えることで、全てに決着を付けようとしたのだ。

何度悔い、何度運命を嘆いたことだろう。

三年前の自分は本当に“幸せ”だった。間違いなく。なのにボタンを一つ掛け間違えたのか、ありとあらゆることが狂ってしまった。

あの頃は、何もない日常がこんなにも大切だと気付きもしなかったのだ。

何故なら三年前の自分たちにとってそれは“当たり前”のことだったのだから。

どうしようもなく歪んだものを、狂ってしまったものを正すには壊すしかない。それはものであっても人であっても同じだ。

シグフェルズは怯える心を叱咤して、あらゆる感傷を凍らせて、バクルスを具現化させた。

「兄さん、僕は……」

時が止まった空間で銀色に光る、確かなもの。嘘と偽りによって組み上げられた空間の中で、それだけは何の躊躇いもなく真実だと言えた。

ずっと罪悪感を抱えていきてきた。両親を救えなかったこと、兄

を助けられなかったこと、ただ一人生き延びてしまったこと。
そのどれもがシグフェルズの責任ではない。

まだ十代も半ばの少年にとってそれは重すぎる枷だった。心が壊れてもおかしくないというのに、シグフェルズは唯一残った兄を解放するために悪魔祓いの道を志した。

それを一瞬とはいえ、自分は忘れかけたのだ。
許されないことだと知りながら愚かにも夢想した。“彼女”の隣に立つ自分を。

人並みの幸せなんて望んではならない。この命は父と母、二人を犠牲にしたことで、今ここに存在しているのだから。

「僕は……貴方を解放こころします」

そうすることでは助けられないのなら。

そう、これが正しい、あるべき姿だったのだ。

退魔の杖を己に突き付ける琥珀色の髪をした少年。悲壮な決意を秘めたその表情に“彼”は笑った。何も分かっていない。

しかし、だからこそ面白いのだ。

人間というものは。何故疑おうとしない？ 愚直なまでに信じようとする。お前が助けたいと願ったものなどほんの一欠けらしか残っていないというのに。

「……分かりました。で、でもわたしは嫌です」

「ラケシス！？ 何を……」

何を言っているのだろう。クロトはラケシスの肩を掴み、正気かと問うてみる。

ラケシスは震えながらも、嫌だとはつきりとそう言った。黄玉の瞳に映っているのは、恐怖ではない。彼女なりの勇気だった。ラケシスの瞳は迷いなく、クロトのアイスグリーンの瞳を見つめ返していた。

ある意味、彼女の言葉に一番驚いていたのはノルンだったのかもしれない。

あんなに怯えていたのに何故そんな事をいうのか、ノルンには理解出来なかった。

彼女には自分を助ける理由が無い。ただの顔見知りでしかない彼女には。あのクロトという少年も言っているではないか。正気の沙汰ではない。

今から高位の悪魔を相手にしようとしているのに自殺行為である。悪魔被いとは言え見習いの、ただの人間が敵う相手ではないのだ。

「これは遊びじゃない。死にたいの？ 違うでしょう。死にたくなければ今までのことを全て忘れて引き返さない」

ノルンはわざと突き放すように言い放つ。今ならまだ何もなかった事に出来る。人間、誰だって死にたくないはずだ。

普通の少女であればすぐみ上がってしまうほどに、今のノルンには迫力があつた。

ノルンの瑠璃色の瞳は永久凍土より冷ややかで、雪の精を思わせる美貌は静かな怒りによって研ぎ澄まされ、見る者に冷たい印象を与えている。

「それは分かっています。……死にたくもありません。でも何をなかつた事にして引き返すことも、わたしには出来ないんです」

「何を考えてる！？ ラケシス、本当にどうしたんだ！？」

それでもラケシスは頑ななまでに引き下がらなかった。

ノルンが話しかけるだけで怯えていた少女のどこに、こんな勇気があつたのだろう。

幼い頃から共にいるクロトでさえこんな彼女は見たことがなかった。

ただでさえ魔眼の力を使って衰弱しているというのに、無理をすれば無事では済まない。

「いい加減に……」

こんなところで押し問答をしている暇はないのだ。一刻も早くシグフェルズの元へ行かなければ。それは焦燥となってノルンを急かす。

「じ、時間がないんですね？　なら早く行きませんか。わたしこゝう見えても防御と治癒の魔術は得意ですから足手まといにはなりません。……クロトは先に帰ってて」

青ざめながらもラケシスははつきりと言った。予想を超えた少女の言葉に、ノルンもクロトでさえも呆然とし、言葉を紡げずにいる。首から下げた十字架を握り締めたラケシスの瞳に後悔も迷いもない。あるのは揺るぐ事の無い決意だけ。

「ラケシス！！　我が儘を言うな！」

ラケシスは悪魔の怖さを分かっているのではないのだ。いや、彼女なら痛いほど分かっているはずなのに。ならばなおのこと、正気の沙汰ではない。

だが肩を掴んで揺さぶるクロトにもラケシスは静かに首を振った。

「お願いします」

「本気なの？」

深々と頭を下げる少女にノルンは問うた。その表情は先程のように冷たいものではない。ただ純粹な疑問だった。

これはラケシスの気持ちの問題だ。ここで逃げたら自分は悪魔被いはなれない。過去を乗り越えなければ。

無言で頷いたラケシスにノルンは深いため息をついた。

彼女の思いは意地にも似た何かで、他人がどうにか出来るものではないと悟ったからだ。駄目だと言ってもこの勢いだと追ってくるだろう。

「分かった。ただし、いざとなったら自分の身は自分で守って。他人の命の心配なんて出来ないから」

いくらノルンとて高位の悪魔、もしくは契約者を相手にしてラケシスを庇う余裕はない。

それにこれはあくまでノルンの独断。教戒にばれれば処罰は免れない。……もっとも生きていられればの話だが。

「はい、構いません」

「ラケシス!!」

悪魔などを瞳に映せばラケシスの体が耐えられない。ただでさえ魔眼を行使したことで消耗しているというのに。確かに昔からそうだった。怖がりで弱虫で、だがそれでも一度決めたことは曲げない頑固な少女。

クロトも彼女を失いたくない。彼女だけがクロトの『味方』だったから。

「行つて来るね、クロト」

刹那、少女の口から紡ぎ出された精霊の詩。金色の魔法陣から伸びた魔力の鎖が少年を拘束する。拘束用の魔術であるため、痛くはないが身動きが取れない。

破るうにも単純な魔力量で言えばラケシスの方が上である。彼女

が術を解くか、効果時間が切れない限り、クロトには鎖から逃れる術はなかった。

「待て！ ラケシス！！」

「……いいの？」

「はい」

光の鎖に囚われながらも必死に手を伸ばす少年を見て、ノルンは問うた。迷いなく頷くラケシスはノルンはふう、と息を吐く。

悲痛なアイスグリーンの瞳を見て何を思わないわけでは無い。それでもシグフェルズが危険なのだ。ここで押し問答をしている暇はない。

ゆっくりと前を向いたノルンの背から薄青の光の翼が広がった。

偉大なる公爵

正直、悪魔の力を侮っていたとシグフェルズは思う。それとも兄と契約した悪魔の力が桁違いなのか。魔力を持たない自分には分からないが、それでも兄と相対して感じる悪寒。

それを振り払い、床を蹴ったシグフェルズはバクルスを一閃させた。

しかしそれも兄に届くことはなかった。何故なら青年が掲げた腕に阻まれていたから。

赤紫の光が兄——アルドの腕に纏わり付いている。間違いなく悪魔の魔力の光だ。

甲高い音を立てて打ち付けられた銀色の杖。

アルドはそれにも表情一つ変えない。ただ僅かに眉を潜めただけ。

「こんな力じゃ僕は殺せないよ？」

無造作に振るわれた腕は、唸りを上げてシグフェルズに迫る。避けられない。

一瞬でそう判断した彼はバクルスを構えるが、それでも衝撃を殺しきれなかった。

まるで突風にでも体をさらわれたような浮遊感に、次いで衝撃。シグフェルズの体は勢い良く壁に叩きつけられる。

「か、はっ……」

胸の奥から迫り上がって来る不快感。激しく咳き込む少年は咄嗟に左の手のひらで口を塞いだ。放した手には真っ赤な血が付いている。それでもシグフェルズはバクルスを手放すことはなかった。

立ち上がろうとするだけで体中の骨が軋む。四肢に力が入らない。それとは別に背中が、否、背中に刻まれた傷が燃えるように痛かった。

恐らく悪魔の力に反応しているのだろう。ハロルドは言った。もう一度悪魔の力を浴びれば傷は再び、咎の烙印へと変わるかもしれない。

「ねえ、シグ、分かってる？ 殺そうと思えば人間なんて一瞬で殺せるんだ。でもそれをしないのは直ぐに殺したら面白くないからだよ」

確かにアルドのいう通りだ。彼が本気を出せば人間など吹けば飛ぶような存在である。

妖艶な笑みを浮かべ、近付いて来た青年は蹲るシグフェルズの白い首に手を掛けた。そのまま力を入れ、腕を上げると少年の体は驚くほど簡単に宙に浮く。

「ぐ……」

乾いた音をたて、銀色の杖が床に落ちる。アルドのハシバミ色だった瞳が血を零したような赤紫に変わり、妖しく煌いた。

更にシグフェルズの首を絞める力が強まる。

「どこまで保つかな？」

シグフェルズは半ば反射的に酸素を取り込もうとするが喉を押さえられているため、それも叶わない。視界が霞む。もう何も考えられなかった。

「兄、さん……」

『汝、邪風の暴君。牙持つ穢れし風の使徒。許されざる番人よ……
我が喚び声に応え具現せよ！ストーム・ファング！』

刹那、アルドを襲わんと牙を向ける風の牙。しかし青年はシグフェルズの首に手をかけたまま、空いた左手を翳しただけでそれを防いだ。

ばちん、と弾かれるようにして霧散する風の牙。

「シグを……離して！」

次の瞬間、銀色の杖を携え、アルドに肉薄したのは紫掛かった銀色の髪を持つ少女だった。

だが亜麻色の髪の青年は表情を変えることなく、左腕を掲げる。聖気を帯びた銀色の杖は青年の腕と反発し、ばちばちと音を立てた。ノルンは冷静になれと自分に言い聞かせ、バクルスに聖気を込める。

首を掴まれたままのシグフェルズは苦悶の表情を浮かべ必死に堪えていた。

押され始めた事に驚きながら、アルドは小さな笑みを作ってシグフェルズを解放した。

支えを失った少年の体が床に落ちる。

「げぼっ……ごほ……」

激しく咳込んだものの、意識はあるらしい。心配だが、ノルンもシグフェルズに注意を向けることが出来なかった。

今、下手に動けば殺される。それが分かっていたから。

「僕たちの邪魔する君は誰？」

青年はただ不思議そうに赤紫の瞳を細め、妖艶に笑った。純粹に尋ねているように見えるが、実際は違う。残忍な悪魔の顔を隠しているのだ。

瑠璃色の瞳でアルドを睨み付けたまま、ノルンはいつもと変わらぬ口調で言った。

「私を馬鹿にしている。化けの皮を剥がされたくなければ、早くその体から出れば？」

彼はシグフェルズの“兄”ではない。いや、体は確かにアルド本人のものだろう。

しかし今“中”にいるのは人間ではない。

聖人であるノルンには一目見た時にすぐ分かった。

「ふ、はははは……。なら己を偽るのは止めよう。忌々しい聖人よ」

アルドという人間の顔をかなぐり捨てて彼は『悪魔』の顔を見せる。そこにいたのはシグフェルズの兄、アルド・アーゼンハイトではない。

人を騙し、おとしめる悪魔だった。彼は嗤った。信じられないほど美しく、凄艶に。

「愚かなる人の子よ。その蛮勇に敬意を表し、私から名乗ってやろう。我が名はベリアル。八十の軍団を率いしシオウルの支配者。同胞は私を『炎の王』、『偉大なる公爵』、『虚偽と詐術の貴公子』と呼ぶ」

ベリアル、その名を聞いた時、体の芯から冷えていくような感覚

に襲われた。

無価値なものを意味するベリアルは魔王ルシファアの副官であるベルゼブルやアスタロトと並ぶ大悪魔である。

勿論、ベリアルと名乗った悪魔が偽りを口にしていない限りは、だが。

しかし彼が少なくとも高位の悪魔であることは刃を交えたノルンには分かる。

青年は眉一つ動かすことなくバクルスを防いだ。下級悪魔なら触れることさえ出来ない聖なる杖を。それもノルンという聖人の力をこめたバクルスを、だ。

そんな真似が出来るのは高位悪魔でも限られたものだけ。

ベリアルはその気になれば人間など一瞬で殺せる。シグフェルズが殺されなかったのも、ただの気まぐれだろう。

「目的は何？」

青年から目を逸らさずバクルスを構えたまま、ノルンは問うた。ベリアルほどの悪魔となればこんな手の込んだ真似をする必要はないはずである。シグフェルズを殺すことが目的ならばの話であるが。

「言ったところで理解出来はしない。時間の無駄だ。哀れな人の子よ。この体はお前の兄のものだ。私を殺すか？ それもよからう。出来るものならな」

崩れ落ちるように床に座り込んでいたシグフェルズが、バクルスを支えに立ち上がる。

呼吸は乱れ、立っているだけでやっとだろうに、彼の紅茶色の瞳には不屈の光が宿っていた。その時、邪魔にならないよう、後方に

控えていたラケシスが慌てて近寄る。

「シグフェルズさん！」

「オストヴァルドさん……？ どうしてここに？」

薄紅色の長い髪を靡かせる少女をシグフェルズは知っていた。ラケシス・オストヴァルド。ノルンと知り合いではなかったはずなのに何故、彼女がこの空間に。

ここは現実世界から隔離された一種の呪力結界の中である。

無理やり破るには聖人の力が不可欠。ということはラケシスはノルンと共に来たということだ。

「は、話は後で。怪我はないですか？」

片方の瞳を覆う眼帯、悪魔祓いの聖衣。いつもと同じはずなのに随分顔色が悪い。

ラケシスはシグフェルズを気遣ってくれる。

しかし眼帯を押さえ、今にも蹲りそうな彼女の方がよっぽど重症ではないだろうか。

「僕なら大丈夫」

大丈夫ではないが、そう言わなければとても自分を支えられなかった。

例えあれが兄ではないとしても、やるべきことは何一つ変わっていない。この手で兄を、アルド・アーゼンハイトを解放するのだ。

自らを奮い立たせ、シグフェルズはノルンの隣に立った。体を動かすだけで節々に痛みが走る。それに加え、背中の傷が更に熱を増していた。

「シグ……」

「ごめん、ノルン。僕の事情に巻き込んで。こんなこと頼めた義理じゃないけど……力を貸して欲しい。僕の手だけでは兄さんを助けられないから」

シグフェルズ自身が一番よく分かっていた。自分の力では兄を救えない。ただ殺されることしか出来ない。

ならば何と罵られても、蔑まれても構わない、聖人であるノルンの力を借りるのだ。

だが自分の身勝手な願いにもノルンは微笑して頷いてくれた。彼女は神を信じないと言うけれど、シグフェルズにとって今のノルンこそが救いの女神だった。

「ラケシスは後ろに。シグ……」

自分たちの間に余計な言葉などいらぬ。ノルンとシグフェルズは頷き合い、同時に地面を蹴った。

ベリアルが本性を表した時点で家は消え、豪華な宮殿の大広間らしき場所に変わっている。ここがどこか考える暇はないし、必要もない。既に余計な考えは頭から消えていた。

「『炎の王』も随分となめられたものだ」

“ベリアル”は笑いながらノルンのバクルスを受け止める。痛くも痒くもないとでもいう風に。これがベリアルでなければ、まるで焼かれるような痛みに襲われるはずだ。

悪魔本来の体ではないと言うのに、ここまで差があるというのか。ベリアルがノルンに気を取られている隙に死角を突いてシグフェ

ルズがバクルスをたたき付ける。

だがそれも無造作にかざした左腕で阻まれた。ノルンとは違い、シグフェルズのバクルスを受けた方は魔力すら纏っていない。

「白き翼の眷属よ、我が声に応えよ。其は遙か悠久の時に潰えし意志にして遺志。我が導きにて揺らめく魂を光鎖へと変え、悪き者を縛めよ。レージング・レイ」

そこにラケシスの声が響く。彼女はバクルスの扱いや攻撃魔術は不得意だが、防御や治癒、拘束といった魔術が得意である。それでも悪魔の力に届かないことをラケシスは理解していた。ほんの少しでいい、動きを封じられたら。

描かれた金の魔法陣から伸びた無数の光の鎖が青年に迫る。それはノルンとシグフェルズを避け、ベリアル四肢を戒めようとした瞬間、青年はにやり、と口端を上げる。正にその直後、鎖がベリアル眼前で弾かれるように四散した。

ナイトメア

驚くラケシスはその瞬間、見えない力で吹き飛ばされ、豪華な壁に叩きつけられる。精緻な彫刻が施された壁に蜘蛛の巣状に輝が入った。

右肩に走った焼け付くような痛み。恐る恐る肩を見れば、赤黒い槍が深々と突き刺さり、ラケシスの体を壁に縫いとめていた。

全身が悲鳴を上げている。ノルンとシグフェルズの声は聞こえたが、何と言っているかまでは分からない。引き抜こうにも力が入らないし、とても自分一人の力では無理だ。

「ラケシス！！」

ベリアルはノルンとシグフェルズを相手にしながらも顔色一つ変えない。ラケシスに駆け寄りたくとも、シグフェルズ一人ではベリアルを抑えられない。

もっとも、二人でなら抑えられるかと問われれば言葉に詰まるどころであるが。

「聖人と言ってもこの程度か」

「どうとでも言って」

嘲るようなベリアルの言葉をノルンは一蹴した。ノルンは未だ聖人としての力を上手く使うことが出来ない。使えばまず間違はなく気を失う。ここで意識を失えば死は確実だ。

いや、それはもっともらしい言い訳でしかないかもしれない。

その強大な力に、自分自身が怯えているのかもしれないと、ノルンは人知れず自嘲した。

「くっ……このままじゃ……」

ジリ貧だ。人間とは違い、高位の悪魔は圧倒的な力を有する。彼らを倒すなら、どんな手を使っても一撃で決めなければならなかった。

しかし今のシグフェルズの体では長い間、バクルスの力を引き出すことが出来ない。

絶望的だった。ノルンとラケシス、無関係の二人を巻き込んでしまったことを申し訳なく思う。

「勝てない、か。初めから人が悪魔に勝てるはずがない。それが道理」

呟いたベリアルは突然、シグフェルズのバクルスを掴んで振り上げる。

まともに銀の杖を受けた少年はあらぬ方向に吹き飛ばされ、受け身を取ることもままならず、全身を強打した。

起き上がれない。バクルスを手にしたベリアルは、僅かに痛み顔を顰めたが、それだけだ。

用済みとなった銀の杖を倒れる少年の横に投げ捨てる。武器などあっても自分には勝てないと言っているのか。

「シグ……！」

シグフェルズはノルンの声にも返事をせず、ぴくりとも動かない。壁に縫い付けられたラケシスも苦しげに呼吸を繰り返すだけで、とても戦える様子ではなかった。

どうすればいい、どうすれば……。聖人としての力を解放してもベリアルに勝てるかどうかは分からない。力を制御出来ない自分で

は……。

しかし、今ノルンが取れる手段はこれしかない。

出来るか出来ないのではないのだ。やるしかない。でなければ三人ともここで死ぬ。ただそれだけだ。それが現実だ。

心を落ち着かせ、だが隙は作らずに力を引き出す。

目を閉じてそれを開けた時、ノルンの瞳は金を帯びた瑠璃色をしていた。

背に翼は出ていないが、それでも格段に彼女が纏う聖気は違っている。

唇の端を歪めながら、ベリアルは笑った。

「ならば私も少し本気を出すでしょう」

ベリアルの手より生まれたのは灼熱の炎。それは荒々しさを感じさせる赤や橙の炎ではなく、禍々しい漆黒の炎だった。

この黒き炎は触れれば間違いなく骨すら残さず、ノルンの体を焼き尽くすだろう。闇色の炎が少女を覆い隠す。普通の人間にはひとたまりも無い。

しかし青年は感心したように笑っていた。

「ほう、人間で私の炎を掻き消せる者がいるとは」

「悪魔の力なら、ね」

そう、『普通』の人間なら。瞬間、漆黒の炎が跡形もなく掻き消える。

炎が消えた先、そこにいたのは銀色の杖を構える少女だった。

魔術による炎ならこうも簡単に消せなかった。

だがこの黒き炎はベリアルの力。その具現。悪魔の力を源とする

のなら、ノルンの聖人の力でかき消せる。

「そうだったな」

その刹那、背筋を駆け上がる悪寒。ノルンは反射的にバクルスを胸の前に持つて来ていた。

呟くように言ったその時、ベリアルがノルンの視界から消える。

「なっ！」

次にノルンを襲ったのは尋常ではない衝撃だった。

まるで破城槌でも叩き付けられたような痛みにノルンの意識が霞む。それでもバクルスには一つの傷さえ付いていない。

「ノル……ン」

何かが叩き付けられたような轟音にシグフェルズの意識が浮上する。

体が鉛のように重く、力が入らない。目を開けるのも億劫で出来ることならこのまま眠ってしまいたかった。

だがそれは駄目だ。軋む体を叱咤して、閉じそうなる瞼を無理矢理開ける。おぼろげに見えたのは壁に縫い付けられたラケシスに顔を伏せ、全く動かないノルンの姿。

頭が真っ白になりそうになって、最悪の考えを頭から振り払う。

残る最後の力を振り絞ってシグフェルズは立ち上がった。

体が悲鳴を上げているが、それを無視して立ち上がり、兄の姿をしたベリアルを睨み付けた。

三年の時を経たとは言え、記憶に残る兄と同じ、ではなく、それ

よりも妖しさを漂わせた青年。

兄ではあるが、兄ではない。彼はアルド・アーゼンハイトではないのだ。

「兄さんの……魂をどこにやった？」

一体どこからどこまでが兄だったのか。それとも初めからベリアルであったのか、それすらも分からない。

シグフェルズの問いにベリアルは赤紫の瞳を細めて嗤い、胸に手を当てる。

ここだとも言うように。

「哀れな人の子よ。お前が取り戻したいと願った物は一欠けらし^{たましい}か存在しない。それでもまだ、私に抗うか」

兄の魂は消える寸前だともいうのだろうか。

悪魔と契約した魂に救いは無い。転生することも叶わず、永遠に苦痛を味わうとも悪魔の糧となると言われている。

そうなってしまうばもう、誰であつても救うことは出来ない。

シグフェルズは唇を噛み締め、血が滲むほどバクルスを握り締めた。

「たとえそうだとしても、このままにはして置けない」

この手で滅ぼす事。でなければ兄は救われない。いや、救われることなんてないのだ。

だがこれ以上見ているのが辛かった。愚かにも錯覚してしまいそうになる。

今のシグフェルズの体では満足に戦えない。ノルンとラケシスの助力も期待出来ない。

それでも退くという選択肢など初めから存在しないのだ。

己に宿るありったけの聖気を引き出し、バクルスに込める。

瞬間、全身の力が抜け思わず膝を付きそうになった。残る最後の力でシグフェルズは床を蹴る。

ベリアルが避ける気配は無い。シグフェルズの攻撃など避けるまでもないということか、それとも何か理由があるのか。

もうどうでもいい。青年に肉薄し、バクルスを振り上げようとした時、ベリアルが僅かに顔を上げた。

その顔に浮かんでいたのは、人を嘲るようなものでも笑みでもない。悲しみと純粋な疑問だった。

「僕を殺すの？ シグ」

「あ……」

悪魔の赤紫の瞳ではなく、彼本来のハシバミ色の瞳で彼は言う。

そしてそれは、少年を躊躇わせるには十分だった。

その瞬間、右胸に焼け付く痛み。何かが急速に体の中から失われていくような感覚。

青年の手がシグフェルズの胸を貫き、背中まで貫通している。

シグフェルズは縋るような瞳で兄を見た。

それは『兄』ではない。顔を返り血で染め、妖艶に笑う悪魔だった。

「……だから哀れだと言ったのだ。せめてもの手向けだ。兄の手で逝かせてやろう。なあ、アルド？」

消えゆく光

「あ、ああ……シグ」

青年の顔が歪む。赤紫の瞳は一瞬にしてハシバミ色に変わり、青年は信じられないものを見るように、シグフェルズの血に染まった手を見つめていた。

生暖かく赤い何か。肉を貫いた嫌な感触。目の前には成長した弟がいる。

彼の知らない黒い聖衣を纏った、だが確かに弟が。大好きだった琥珀色の瞳から光が消えて行く。

「兄……さん」

シグフェルズが笑った。安心しきったように。やっと再会出来たと。

アルド・アーゼンハイトは自分が何をしていたか悟り、床に座り込んだ。口を突いて出たのは慟哭。

まるでこの世の悲劇の全てを詰め込んだような声にノルンは目を覚ました。体を起こそうと力を入れるが、全身を強く打ったせい吗、すぐに起き上がれない。

「シグ……」

視線の先には床に倒れるシグフェルズと座り込み、頭を抱えて震える青年の姿があった。少年の周りに血だまりが出来ている。

その瞬間、青年が立ち上がった。笑みを湛えて。次に響いたのは、まるで地の底から響くような声だった。

「これだから人間は面白い」

全身を返り血で染め、顔に手を当てて嗤う青年は先程と同じ、赤紫の瞳をしている。

あの悲鳴はシグフェルズの兄のものだったのだろう。

ベリアルはこんな、こんなくだらない事のためにシグフェルズと彼の兄を苦しめたのだ。

「……さない。許さない！」

何かに対してここまで怒りを覚えたことはなかった。家族と引き離された時でさえ、ノルンを支配していたのは諦めに似た達観。なのに初めてだった。こんなにも何かを許せないと思ったのは。

体が動かない。そんなこと構うものか。危険だと警鐘を鳴らす本能を無視して立ち上がる。

もうどうなってもいい。シグフェルズを助けなければ。その思いだけが、ノルンの心の中をしめていた。

すさまじいまでの聖気を感じ、ベリアルは振り向く。そこには一人の少女がいた。

傷だらけになりながらも紫掛かった銀色の髪が靡き、瑠璃色の瞳は金粉を散らしたように煌めいている。

何より違ったのは神々しさ。少女の背に広がるのは光の翼。世界中の青の全てを凝縮した神秘がそこにはあった。

濃密な聖の気配に息をするのさえ苦しい。

いや、悪魔は酸素を必要としない。怯えているのはこの体。

目の前にいる少女は“聖人”だ。それは分かっている。

だが今の少女は先程の少女とは別人であるかのように、纏う力が違う。

怯える体を押さえ付け、ベリアルは笑った。どこまでも楽しそうに。ただの人間をつり上げたつもりが、ここまでの上物がかかるとは。

満ち溢れた聖気は、聖人が持つ浄化の奇跡か。

先に仕掛けたのはノルンだった。青年に向け、何の躊躇いもなく銀の杖を振り下ろす。刹那、ベリアルが消えたかと思うとノルンの背後に出現していた。

しかしノルンもその動きを読んでいたようで、振り向きざまに精霊の詩を紡ぐ。

『無垢なる光よ。我が声に応じ、穢れ無き光、彼の地に降らせ賜え。光あれ。スターライト・レイ』

ノルンが使ったのはスベルキャンセル詠唱破棄と呼ばれる詠唱法である。精霊の詩の大部分を破棄し、短い詩で魔術を発動させる呪法。

だが、詠唱破棄はただ単に詩を破棄するのではない。

精霊の詩は効率的に精霊因子と魔力を練り上げると共に魔術をうまく制御するための詩。その大部分を破棄する詠唱破棄は制御が難しく、使える者は少ないとされている。

それをこんな人間、それも小娘が扱えるとはベリアルも思いもしなかった。

それでも人は所詮人。人の器では悪魔を超えられない。聖人であっても同じことだ。

だと言っのに魔術によって生まれた光柱は、魔力障壁ごとベリアルの肩を焼いた。じゅ、と肉が焼ける嫌な音。光の精霊因子はどの属性より悪魔を破壊する。闇と光、相反するものであるから。

今の肉体は人であるが、ベリアル自身は悪魔。

本当の体が焼かれたような激痛がベリアルを襲った。

「小……賢しいっ！」

齒を食いしばった青年の赤紫の瞳が輝きを増す。ベリアルは肩を焼いた光の柱に手を伸ばすとそのまま、握り潰した。勢いよく血がふき出すが気にも止めない。

光柱を潰した手はまるで、焼け爛れたように赤くなっていた。

ベリアルは反射的に握り潰した方の手で、眼前に迫るバクルスを受け止める。先程とは桁が違う。一瞬で魔力を纏わせただけとはいえ、押されているではないか。

バクルスを握った手からは白煙が上がり、何かが焦げる嫌な音を立てる。

そんなベリアルに対し、少女は人形のように無表情な顔のまま、バクルスを握りしめていた。

まるで自分が自分でなくなったよう。手足の感覚はなく、全てがゆっくりと感じられた。他人が体を使っているように、自分の意思とは関係なしに体が動く。

ノルンはベリアルにバクルスを振り下ろし、振り向き様に精霊の詩を紡いだ。浮かび上がる金色の魔法陣。生まれた光柱は容赦なく青年の肩を焼いた。

ベリアルは力任せに光柱を握りつぶす。それがどうした。バクルスに聖気を込め、ノルンは床を蹴った。

とっさに腕を掲げたベリアルとバクルスの力が拮抗するが弱い。それ以上の聖気を込めてやると徐々にベリアルが押され始めた。

そのまま更に力を込めて切り払う。弾き飛ばされた腕が焼け、口の端から血を滴らせながらもベリアルは笑っていた。

その刹那、青年の背から広がった二枚の翼。アスタロトのような漆黒のものではなく、血を固めたような赤黒い翼だった。

禍々しい、堕ちた天使の象徴、背徳の証。本来六枚である翼のうち、二枚とはいえ、翼を現したということは、少なからず本気を出したということか。未だ人の体を捨てない辺り、怪しいところではあるが。

「……そうか。私も人間というものを見くびっていたらしい」

ただ声を出しただけだというのに、ノルンを目に見えない圧力が襲う。力を入れていなければ膝をついてしまいそうだった。

これが本当の悪魔の力。今までは遊びに過ぎなかったということか。

それでも早く、早くしなければ。シグとラケシスを助けないと。それなのに体は思うように動かない。大量の聖気を準備もなしに操った反動か。

視界が霞む。今ここで目を閉じれば全てが終わってしまうというのに。

ノルンが必死にベリアルを睨み付けたその時、涼やかな声が響いた。

「お止めなさい、ベリアル」

まるで鈴を転がしたようなたおやかな声だった。

ノルンたちを庇うように、濡れ羽色の髪 of 貴婦人が佇んでいる。ヒトコブラクダに跨り、純白の手袋、紺の礼服を纏った女性は文

句なく美しかった。頭に羽根と房飾りのついた帽子を被り、腰には煌びやかな宝冠を括り付けている。

彼女を見たベリアル表情が、忌々しげに歪んだ気がした。

彼女が自分達の敵か、それとも味方であるかを見極める前に、ノルンの意識は闇に沈んだ。

目覚めた後

意識が霞み行く中、何としても立ち上がらなければと思った。もうあんな光景は見たくない。誰かが悪魔に傷付けられるのは。あんな目にあうのは自分一人で十分だ。なのに体は思うように動いてくれず、力も入らない。力なんていらなかったはずなのに、今一番、無力であることが辛かった。

何よりも忌み嫌っていた力だったのに。意識が闇に堕ちて行く。ベリアルの前に立ち塞がった美しい女性を一瞥した後、ノルンは意識を失った。

瞼を刺すのは眩しいくらいの光。そこでノルンの意識は浮上する。ゆっくりと目を開ければ、真っ白な天井が目に入った。

その瞬間、全てを思い出す。ベリアルとの死闘、床に倒れたまま動かないシグとラケシス。

弾かれるように身を起こそうとした時、横から伸びて来たか細い腕に押し留められる。

「まだ寝ていないと駄目ですよ」

同時に子供をあやすような優しい声が振ってきた。思わず顔を上げればそこにはラケシスがいる。彼女の白い肌には一つの傷もなく、自分などよりずっと元気そうだ。

「ラケシス？」

「はい。お加減は如何ですか？ ノルンさん」

名を呼べば、彼女はふわりと微笑んだ。呼び方がアルレーゼさんからノルンさんに変わっていたが、不思議と嫌な感じはしない。

お加減は如何ですか、その一言でノルンは叫び声に近い声を上げた。

「シグは！？」

「大丈夫、ちゃんと横にいます」

あれからどうなったのか、少しも覚えていない。ベリアルと相對していた美しい女性。そこで自分の記憶は途切れていたから。ラケ

シスの言葉に横を見ると、隣のベッドには静かに眠るシグフェルズの姿がある。ラケシス同様、怪我は全て塞がっているらしい。

「あれからのくらい……」

眠っていたのだろう。全身が重い、体に力が入らない。

空腹は感じないが、時間の感覚がまるで戻っていないかった。起き上がるとするノルンをベッドに横たえながらラケシスは答える。

「ノルンさんは丸一日、眠っていたんです」

「あの後、どうなったのか教えてくれる？」

大人しく横になりながらもノルンは問う。

聞かなければならないと思った。あの後、何が起こって自分達が助かったのかを。

「それなら俺が説明する」

扉の向こうから現れたのは、黒い聖衣を纏った灰色の髪の少年――クロトである。やや不機嫌なのは自分一人、置き去りにされたからだろうか。

ノルンにはどうでもいいことであるため、何があったか聞ければそれでいい。ラケシスが許してくれないため、ノルンは未だベッドに横になったままである。

ちらりと隣で眠るシグフェルズに目を向けるが、依然として瞼は閉じられたまま。

「それで、話してくれる？」

「あの後、拘束から逃れた俺はラケシスたちを追うことも出来ずにあの場にいた。それからしばらくして、いきなりあんなたちが現れたんだ。一人の女と共にな」

ラケシスの拘束魔術を何とか解いたクロトだったが、そこで手詰まりだった。二人を追おうにも彼には悪魔の結界を破る術はない。だがラケシスが言うように先に帰るなど言語道断だ。出来ることもなく右往左往していた時だ。突然、草原に三人が現れたのである。怪我はないようだったが、ノルンとシグフェルズは意識を失っていたし、ラケシスも気絶寸前だった。

「女って礼服を着た黒髪なの？」

「ああ」

歳の頃は二十代だろうか。濡れ羽色の艶やかな髪に長い睫毛に縁取られたマラカイトグリーンの瞳は、本物の宝石より美しい。

貴婦人が身に纏う紺の礼服を身に付け、羽根と房飾りのついた帽子を乗せていた。

腰にはきらびやかな王冠をくくりつけ、驚いたことにヒトコブラクダに跨がっていたのだ。

「クロトが言うにはその時にはもう、傷も治ってたみたいです」

それだけでなく、聖衣まで元通りになっていた。血がついていることもなく、破れていることもない。その女性が自分たちをベリアルから助け、傷も治してくれたのだろうか。

ラケシスも殆ど覚えていないらしく、その女性が傷を治したかどうかも分からない。

「ベリアルを退けるなんてただ者じゃない。同じ悪魔？ それとも天使？」

ベリアルほどの悪魔を退けたとなると、よほど高位の悪魔か天使ということになる。高位の天使が都合よく助けてくれるだろうか。悪魔にしても、わざわざベリアルから自分たちを助ける理由なんて考えられない。

「さあ？ 禍々しい感じはしなかったけど、天使でもない気がする」

首を竦め、思い出すように言うクロトとノルンも同意見だった。

悪魔にしては清らかであったが、それにしても天使のように聖気を纏っていることもない。考えても謎が深まるばかりで、分からないことが多過ぎる。

「それはまあ、今となっては調べようがないが、こっちはこっちでごまかすの大変だったけどな」

じつと考えるように黙ったノルンに、クロトは疲れたように笑ってみせる。三人が無事だったのはいいが、ノルンとシグフェルズは意識を失っているし、ラケシスも一人では立てなかった。

流石のクロトも三人を抱えてシェイアードまで戻ることは出来ない。

しかし彼が思案した時、天馬が現れたのだ。ノルンが喚び出したあの天馬が。

高位の天使や悪魔といった高次元の存在を除き、彼らは自力でこの世界に現れることは出来ない。ペガサスもその例に漏れないはずなのに。

怪我はないとは言え、油断は出来ない。あれこれ考えている時間

はなかった。

彼（であっているのだろう、多分）に手伝ってもらい、三人を戒に運んだまではよかったが、問題が一つ。

何故二人が意識を失っているか、だ。外傷は見当たらないし、呼吸も規則的である。

取りあえず二人で話を合わせて、ノルンとラケシスを医務室に運び込んだ。

倒れていた二人を見つけたと言えば、不審がられることもなく、クロトとラケシスが追求されることはなかった。

「そう。ありがとう。迷惑をかけたみたいで」

ノルンが目覚めたと分かれば、事情を聞かれるかもしれない。本当のことは口がさけても言えないし、言うつもりもなかったが。契約者と無断で会ったばかりか、ベリアルほどの大物と相对したことがあれば、下手をすれば破門である。

刹那、再び扉が開く音がした。

警戒し、沈黙するノルンの耳に届いたのは久方ぶりに聞く『彼の声。』

「久しぶり、でいいのかな。ノルンちゃん」

現れたのは二十歳前後の青年である。

肩に届く鮮やかなワインレッドの髪に片方だけ覗く琥珀色の瞳。見る者を惹き付けるような整った顔立ちをしており、ノルンたちと同じ、いや、正式な悪魔抜いを示す銀系の刺繍が施された黒い聖衣を纏っていた。

青年の顔を見た途端、ノルンは一転して不機嫌な顔になる。そんな彼女の態度を楽しむように、青年——ハロルド・ファースは笑っ

た。

「何か用、ハロルド？」

不機嫌そうな顔をするノルンが発した言葉に、ラケシスとクロトが驚いてハロルドを見る。教戒の人間で彼の名を知らない者はいない。

ハロルド・ファース。光の監視者と謳われる悪魔被いにして異端審問官。僅か二十一歳にして彼は優秀な司教として知られていた。そしてそれだけでなく、彼はノルンと同じく聖人なのだ。

慌てて最高礼を送る二人にハロルドは困ったように笑った。慣れではいるが、好きではない。そんな感じだろうか。

「そう畏まらなくていい。悪魔被い見習い、ラケシス・オストヴァルド、クロト・フォルスター」

「は、はい」

二人はハロルドが自分たちの名前を知っていたことに驚いたらしい。

知っていたのか、それとも調べたのか。でなければ彼のような人物が一介の悪魔被いの名を知っているはずがない。

恐縮するラケシスに対し、クロトはやや警戒しながら目の前の人間を見た。

「そんなに警戒しなくていいよ、フォルスター君。だよな？ ノルンちゃん」

視線をクロトから外し、悪戯っぽく自分を見るハロルドにノルンは仏頂面のまま頷いた。

きつと彼にはお見通しなのだろう。異端審問官たる彼の心眼は生半可なものではない。

「高位の悪魔と戦ったね？ それも随分な大物と」

ハロルドの声が鋭さを帯びる。大物、の一言にラケシスが息を呑んだ。

そこまで知られている以上、隠し通すことは出来ない。そう判断したノルンは、躊躇いがちに口を開いた。

「……ベリアル」

無価値を意味するその名が何を示すか知らないハロルドではない。その一言で十分だった。

魔王ルシファーに仕えるベルゼブル、アスタロトに継ぐ大悪魔。かつて天使であった頃、熾天使の地位にあった彼が一番先に墮天使た天使だとされている。

「……運が良かった。ホントに」

ベリアル、その一言を聞いたハロルドは深いため息をついた後に呟いた。

本当に運が良かった。下手をすれば死んでいたのだ。いくらノルンが聖人とは言え、人間と悪魔では全てが違いすぎる。

力の器も、肉体の脆さも。それが分からぬノルンではないだろう。誰よりもそれを理解しているはずだ。

教戒の狗

ノルンはハロルドがいない間に起こったこと、ベリアルとの戦いを含めて包み隠さずに答えた。

先にシグフェルズがいなくなり、彼を追った先に彼の兄が、いや、ベリアルがいたことも。

ただ、ラケシスの力については伏せて、だ。

「ノルンちゃん、君たちもだけど、これは本来なら謹慎ものだよ。報告を怠った上に勝手な行動をしたんだから。君たちは自分たちがまだ無力な子供だと言うことを理解しないと」

厳しいハロルドの言葉にラケシスやクロト、ノルンまでもが押し黙った。彼が言ったことは全て真実だ。本来ならシグフェルズが契約者である兄と接触しようとした時点で報告しなければいけない。だが彼女たちは報告を怠ったばかりか、独断でシグフェルズを追った。その結果がこれだ。無事だったから良かったものの、四人共ベリアルに殺されていてもおかしくない。

少なくともノルンは分かっていたつもりだった。だが何も分かっていたいなかったのだ。

悪魔被いに一番近いと言われ、聖人の力を持つノルンは無力な子供に過ぎない。その事実が悔しくて、ノルンは唇を噛んだ。

「……まあ、お灸はこれくらいでいいかな？ 心配しなくても上には報告しないよ」

ハロルドは咳払いをすると、一転していつもの顔に戻った。先程の司教ハロルド・ファースではなく、ただのハロルドである。突然

の変化にラケシスとクロトは呆然と彼を見つめていた。

ノルンは慣れているため、深いため息をついてハロルドを睨み付ける。

「つまりお咎めなし、っていうことだ。で、君たちをベリアルから助けてくれた女がいたって？」

「ええ、黒髪に緑の瞳。ラクダに跨がって紺の礼服を纏った女でした」

何を思っつかは知らないが、上には黙ってくれるらしい。それはクロトやラケシスにとっては有り難い。

ハロルドの問いに答えたのはクロト。ラケシスやノルンも目にしていたが、詳細は覚えていなかった。女性の特徴を聞いたハロルドは珍しく考え込んでいるように見える。

「……月の女神。ゴモリーか」

「もしそうだとしても何故、ゴモリーが？」

唐突に呟かれた名にノルンはベッドからハロルドを見上げる。

天使の三分の一が墮天した時、彼女もルシファーと行動を共にした墮天使である。墮ちる前は月の女神であった彼女はその名さえ変えたと言われていた。

ベリアル同様、ゴモリーも悪魔を従える地獄の権利者である。その悪魔がベリアルから自分たちを庇い、あまつさえ傷を治したのか。

「悪魔って言っても決して一枚岩とは言えないから。悪魔は悪魔で内輪揉めしてるんじゃない？」

ハロルドの言うことも一理ある。同じ天から堕ちた天使であつても一枚岩ではない。

いや、表面上は魔王ルシファーに従つてはいるが、それでも地獄では小競り合いが絶えないと聞いたことがある。

そして彼らは自分たちの住む世界を地獄とは呼ばない。魔界と呼ぶのだ。

「それはそうかもしれないけど……」

「まあ、レヴェエナだからな」

ハロルドが言いたいことは分かるが、わざわざ自分たちの怪我を治した理由がわからない。ベリアルを退けるだけで良かったはず。ふに落ちないノルンに対し、ハロルドは小さく苦笑した。

そこでノルンは気付く。レヴェエナ、というのは誰の名だろう。女であることだけは分かるが。

「レヴェエナ？」

「オレ、今なんて……」

ノルンが聞き返せばハロルドは、信じれないと言つた面持ちで自らの口に手を当てた。今、自分が発した言葉が信じられないとでもいう風に。

レヴェエナ、それはゴモリーの本当の名だ。ハロルドはそう確信していた。

しかし、それを知るのは同じ悪魔がかつての同僚である天使たちだけのはず。

何故、ただの人間である自分が彼女の名を知っているのだろう。考えても答えは出ない。

「ハロルド？」

「……ごめんね、ノルンちゃん。また後で来るよ。それじゃ」

先ほどからハロルドの様子がおかしい。ゴモリーの名にうるたえたり、いつもの彼ではないかのよう。

一転して薄い笑みを浮かべた彼はそれじゃ、と言うなり医務室を出て行った。引き止めることも問うことも叶わなかったノルンは、ため息をついて髪を弄る。

「あの、ノルンさんはファースト司教と親しいんですか？」

怖ず怖ずと尋ねて来たのは二人の会話を見守っていたラケシスである。クロトの方も流石に口に出さないが、気にはなっているらしい。

ハロルドは本来なら、敬語でなければならない相手だ。正式な悪魔扱いであり、司教である彼。それに加え、異端審問官でもあるのだから。

ため口なんでもっての他。しかも名前まで呼びすてくればラケシスやクロトが戸惑う理由も分かる。

「親しいというか、私とシグは特別授業があるから」

ハロルドと仲が良いか、そう聞かれれば答えに困る。ただ彼が自分とシグフェルズの講師だから。それ以上でも以下でもないはずだ。ノルンが敬語でないのはただ面倒なだけで、ハロルドも咎めることがないから。

もつとも公の場では流石に敬語で接するが。何たつてお堅いマラキ大司教にばれたら五月蠅いからである。

「そうなんですか。確かに二人とも、将来を嘱望しよくぼうされてますしね」

ノルン、そしてシグフェルズは見習いの中でもっとも悪魔祓いに近いとされている。悪魔祓いでも有数の腕利きであるハロルドが講師につくのも当然といえるだろう。

ノルンにとっては煩わしい限りだが、それしか道がないのもまた事実。

「でも確かに、正式な場で見るよりも気さくそうな人でしたな」

「気さくなだけじゃないだろ」

へえ、と呟いたラケシスにクロトも加わる。彼がハロルドを見る視線は僅かに警戒の色を含んでいた。外面は人の良さそうな青年なのかもしれない。

だが忘れてはならないのは、彼が異端審問官だということ。

下手をすれば自分やラケシスが異端の烙印を押されるかもしれない。異能の力を持つ自分達が。だから警戒しなければならぬ。

ハロルド・ファースという青年はまず間違いなく、自分達が異端認定されれば躊躇ちゅうちういなく二人を狩るだろう。恐らくは人好きのする笑みを浮かべたままで。

「その通り。へらへらはしてるけど、あれは間違いなく教戒の『狗』

」

彼を教戒の狗と呼ぶのなら、ノルンも同じ穴の貉ねじまなのかもしれない。

ハロルドはきつと与えられた命令に何の疑問も抱かず、任務を遂

行するためだけに全力を注ぐのだろう。

しかし、ノルンはそこまで徹底してはいない。自分の意思まで押し殺してやらなければならぬことなんてくそくらえだ。

シグフェルズのことだつてそうだ。悠長に報告して返事を待つてなんかいらなかった。シグフェルズが死ぬかもしれないのに。たとえノルンが真実を話したとしても、直ぐに動いてはくれなかっただろう。シグフェルズの兄が契約した悪魔が上級だと分かっていたから。腰抜けのじじいどもが動くはずがない。

瞬時に動ける悪魔被いも限られているし、その中でも上級の悪魔に対抗出来る者たちは多くは無い。

「あの、ノルンさん。私たちもう行きますけど、今日はゆっくり休んでくださいね」

ぺこりをお辞儀をしながら部屋を辞したラケシスにノルンも軽く手を振る。その様子をじっと見ていたクロトが低い声で言った。

「あんたのことは完全に信用したわけじゃない。けど少しくらいなら認めてやる。ラケシスが懐いてるからな」

クロトは言いたいことだけ言うと、ノルンの返事すら聞かずに、先に部屋を出た彼女を追う。

とても素直とは言えない少年の態度があまりに面白くて、ノルンは肩を揺らして笑った。

医務室を出たハロルドは無人の回廊を歩きながら考えていた。最近、脳裏にちらつく黄金色の何か。それが何なのか、彼にも分らない。

ただ不思議な夢自体は幼い頃より見続けていたものだ。黄昏色に染まる空、そこに伸びた階段に決まって自分は腰掛けていた。

ゴモリーの真名を知っていたのも、その夢と関係があるのだろうか。ノルンに聞かれなければ、ハロルドは自分がゴモリーの名を呟いたことさえ気付かなかっただろう。

ハロルドはそつと髪に隠れる左目に触れた。元は右と同じ、琥珀

色だったそれは聖人の力を覚醒させたその時に金緑に変わった。

今、ここにいる自分は誰なのだろう。以前の彼なら躊躇いなくハロルド・ファースと答えられた。

だが今は分らない。自分は自分だと信じたかったが、この瞳の色はハロルド・ファースのものではない気がして。

「ハロルド、どうしました？」

耳に響く心地良い声にハロルドは我に返った。女性にしてはやや低く、男性にしては高い声。

前から歩いて来たのは、金系の刺繍が施された白の聖衣を纏い、光の滝を思わせる長い金髪をなびかせる人物だった。

女性にも男性にも見えるその人物は、信じられないくらい綺麗な顔立ちをしている。天からの使いだと言われても納得出来るほどに。

「ミシエル様……何でもありません。ですが、“炎の王”が彼女らに接触したようです」

炎の王、とはベリアル、彼女らはノルンとシグフェルズのことだ。それだけでミシエルは大体のことを察したらしい。真剣そのものと言った面持ちで小さく息を吐く。

「やはりそうですか。気をつけなければなりませんね。ハロルドもリフィリアの一件、お疲れ様でした」

「いえ……自分は何もしていません。クリス様と彼のご子息のお力です」

ハロルドがシェイアードを離れていたのは逆十字について探るた

め。これは公になつてはいないが、逆十字は色彩都市リフィリアで戦略級魔術を発動させようとしていたのだ。

それも八年前、精霊都市ディスレストで暴走し、悲劇とも呼ばれた禁断の魔術——ディヴァイン・クロウを。

だがそれは《学園》の学園長、クリス・ローゼンクロイツと彼の義理の息子、シェイト・オークスらによって阻まれた。ハロルドは彼らを助けただけだ。

「猊下には私から伝えておきます。それとハロルド、アーゼンハイト君と彼女を頼みます」

「御意のままに」

ベリアル你真意は不明だが、またシグフェルズに接触しないとも限らない。もしそうなった時、ベリアルから彼を守るのはハロルドほどの力を持つ者のみ。凜としたミシエルの声にハロルドは恭しく頭を垂れた。

金の青年

異変に気付いたのは、ベリアルとの死闘から四日後のことだった。シグフェルズが目覚めない。

身体的な異常は見られないのに、だ。講義を終えたノルンは一人、医務室を訪れていた。

今にも目を開け、笑いかけてくれるのではないか、そう思わせるほどいつもと変わらないように見える。少なくとも表面上は。

ただ眠っているだけだとしたらどんなにいいか。

「シグ……」

ノルンに出来ることは何一つない。こうして彼が目覚めるのをただ待つことしか。

ハロルドやラケシス、クロトもノルンのように顔を見せてくれているらしい。もし自分がもっと上手くやれていたのなら、こんなことにはならなかったのだろうか。

分らない。もう何も分からなかった。自分が今、何をすべきなのか。今までと同じようにただ毎日を過ごすだけ。急につまらなくなつた世界。

今までは女神に祈るのなんて馬鹿らしいと思っていた。なのに、ノルンは初めて心から女神に祈った。形だけではなく、心を込めたとその時、静かで控えめなノックの音が響く。しばらくして扉の開く音。誰かがこちらに歩いてくる気配がする。

「君がノルン・アルレーゼさん？」

水晶の鈴を転がしたような柔らかな声音に、ノルンは思わず振り

返った。そこに立っていたのは、白い聖衣に身を包んだ見知らぬ人物。金糸の刺繍が施された白の聖衣を纏っていることは、悪魔被いではない。

女性のように典雅な面差しをした青年である。薔薇の蕾を思わせる唇に透き通るように白い肌。美しい紺碧の瞳に、光を織ったような金色の髪は、帯のように背中に広がっていた。

金糸の刺繍が施された白の聖衣が示すように、ノルンのような見習いではなく、正式な聖職者だろう。年齢はどう見ても二十歳前後か。

「誰？」

訝しげにノルンが言えば、青年はふわりと微笑んだ。警戒していた彼女でさえ、見とれてしまうほどに美しい笑み。そうやって笑えば、中性的な外見もあいまって女性にも男性にも見える。

「私はミシエルと言います」

ミシエル、それは大天使ミカエルに由来する名だ。

それほど珍しい名前ではないが、驚くほどこの青年には似合っている。ノルンは何故かそう思った。

「そのミシエルが何の用？」

ノルンの名を知っていたこと自体は、それほど珍しいことではない。何せ自分は『聖人』なのだから。

しかしこのミシエルという青年。どこか普通の人間と違う。浮世離れた、不思議な雰囲気もそうだが、何より彼の笑みはノルンの

心をかき乱した。

だがそれを顔に出す事はしない。癪だからだ。あからさまに警戒するノルンにもミシエルは柔らかな微笑を浮かべているだけだった。

「彼のことです」

ミシエルの視線の先には、今もまだ眠り続けるシグフェルズ。法都シェイアードは医療都市ゼーレと並ぶほどの医療水準を誇る。

魔術による治療を専門とする魔法医療師の多くを輩出する教戒の魔法医療師でさえ、シグフェルズが目覚めない理由はわからなかったのに。

「シグが何だつて言うの？」

「彼が未だ眠り続けるのは悪魔の呪法によるものかもしれません。……それが炎の王なら尚更に」

ミシエルが口にした言葉にノルンは言葉を失う。

炎の王、それはベリアル自身が言っていた。同胞は私を『炎の王』、『偉大なる公爵』、『虚偽と詐術の貴公子と呼ぶ』と。何故彼がそれを知っている。

驚くノルンをよそに、ミシエルはシグフェルズに近づき、白魚のような手でそつと額に触れた。彼はああ、と納得したような声を上げ、悲しげな面持ちでシグフェルズを見つめる。

「……彼は在りし日の夢を見ているのですね」

「在りし日の……夢？」

青い瞳に悲しみの色を宿し、呟くミシエルにノルンは思わず聞き

返していた。

悪魔による呪法？ 在りし日の夢とは何なのだ？

「ええ、彼がまだ幸せだった時間。この少年は夢に囚われているのです」

ノルンの言葉に頷いたミシエルは、シグフェルズの額から手を放した。考えれば考えるほど、このミシエルという青年は分からなかった。謎は深まるばかりである。

少しでもそのもやもやした感情を晴らしたくて、ノルンは正面からミシエルを見据えた。

刹那、彼の背に見えた白銀の翼。

「……え？」

それも一瞬のことで、次の瞬間には消えていた。自分やハロルドのような聖人か？

いや、例えそうだとしてもノルンにあんな力はない。ハロルドだって同じだろう。もしそんな力があつたなら、見舞いに訪れた時に気づくはずだ。

「どうかしましたか？」

「何でもない」

「……それで、どうすればシグを助けられるの？」

ノルンにはミシエルが何者かなんてどうでも良い。どうでもいいから、シグフェルズを助けたい。

自分を理解してくれる人間がいなくなるのは嫌だ。正直、怖かつ

た。家族が悪魔に襲われた時と同じ。今のノルンはその時のような無力な子供ではない。

いや、今もまだ無力な子供なのだろう。それでもあの時とは違うのだ。

ノルンは思い出すように自分の手のひらを見た。十二歳であった自分はもう十七歳になる。

「ハロルドならその答えを知っています。ミシエルが言っていたといえは分かりますから。ノルンさん、彼を助けることが出来るのは貴方だけです。どうか彼を解放してあげて下さい。過去と言う夢から」

何故そんなことを言うのだろう。ミシエルは何を知っているのか。ハロルドをハロルドと呼び捨てにするのだから、それなりの地位にいる人間だとは分かるが……。

「私が……？」

シグフェルズを過去から救い出すことなど出来るのだろうか。自分とシグフェルズはそれほど深い付き合いではないし、そもそも彼は望んでいるのだろうか？

シグフェルズの時はきつと三年前から止まっているのだ。

だから一人で決着をつけようとした。時を再び動かすためではなく、終わらせるために。

歪んだ生を。少なくとも彼はそう思っていたことだろう。

唇を噛み締め、俯くノルンにミシエルは優しい声音で言った。

「はい、貴方にしか出来ないことです。どんなに縋っても過去は過去でしかなく、戻ることは出来ても先に進むことは出来ません。…

…彼にはまだ、死ねない理由があるのではないですか？」

全てを見通したようなミシェルに驚き、ノルンは顔を上げた。ミシェルは先程のように柔らかな笑みではなく、まるで試すような、それでいて問い掛けるような顔をしている。

過去は過去。過ぎ去ってしまったもの、置き去りにしたもの。戻れることは出来ても先に進むことは出来ない。

何故ならそれは既に過ぎ去ったものであるから。過去だけでは人は生きられない。

「まだ、死ねない……理由」

「はい。貴方の声はきつと彼に届きます。真っ直ぐで曇りがないですから」

シグフェルズの目的は、契約者となった兄を解放すること。

しかし彼の肉体と魂はまだベリアルに捕われている。

ノルンの魂はまるで、月光の下に晒された白刃のように真っ直ぐで、一点の曇りもない。そんな彼女の声なら夢の淵にいる彼に届くはず。

何故ならそれは彼が求めてやまないものだから。

残された術

ミシエルが去った後もノルンはただ立ち尽くしていた。

真っ直ぐで曇りが無い？ 自分はそんなに綺麗ではない。世界が見えていなかったただの愚か者だ。

ちらり、とシグフェルズを見る。彼は今も幸せだった頃の夢を見続けているのだろうか。

ミシエルは言った。過去は過去。戻ることは出来ても進むことは出来ない。

その通りだ。このままではシグフェルズはきつと、帰って来ない。そんな予感がした。

自分に力を貸せと言っておいて、眠り続けるなんて許さない。シグにはまだ、やるべきことがあるはずだ。殴って起きるならいくらでも殴ってやる。

だがそれでは駄目なのだ。シグフェルズが目を覚ますなら、自分に来ることをやろう。

医務室を出ようとしたノルンの足が止まる。誰か来る。ノルンが身構えた瞬間、扉が静かに開いた。

「ハロルド！」

「やつほー、ノルンちゃん」

そこに立っていたのは、ノルンが今一番会いたかった人物——ハロルドだった。

しかしどう話していいか非常に困る。ミシエルはああ言っていたが、そもそもハロルドは彼を知っているのか。

「ノルンちゃん？」

「……さっき、ミシエルって人が来た」

そう言えば、ハロルドは驚いたように琥珀色の瞳を見開いた。やはり知っているのだろうか。

もっとも、彼が言うミシエルと自分が言うミシエルが同一人物であるという保証はないのだが。

「ミシエル様が？」

「シグが今も眠り続けるのはベリアルルの呪法によるもので、夢に囚われている、って言ってた」

様をつけて呼んだことから、彼は司教であり、異端審問官であるハロルドより高い地位にいるということだ。ミシエルは言った。シグフェルズを助けられるのはノルンだけだと。

どうやって助けるのか。悪魔に対して絶対的な力を有する聖人であつても、人の精神に干渉することは出来ない。

悪魔たちが扱う呪法こそ、もっとも厄介なものである。その多くは術者である悪魔を滅さなければ解けない厄介なもので、悪魔祓いとは言え手にあまるのだ。

「ハロルドに言えば分かるからって」

「……猊下にお目通りを願おう」

ハロルドは黙ってノルンの話を聞いていた。考え込んでいるようにも見える。やがて何かを決意したような表情を浮かべた彼は驚く

べき言葉を口にした。

ハロルドが何を言ったのかノルンは一瞬、理解出来なかった。何故今の話の流れから教皇猊下に繋がるのか。

「何故？」

「人の精神に深く干渉する魔術は危険で、使用が厳しく制限されていることはノルンちゃんも知ってるよね？」

ノルンが何故かと問えば、ハロルドは何を思ったのか当たり前のことを口にした。相変わらず訳が分からないが、取りあえず頷く。それくらいは基本であり、魔術を扱う者なら誰でも知っている。

多少の幻術はともかく、人の精神に深く干渉する、具体的に言うなら精神を破壊するほどの影響を与えかねない魔術は使用が厳しく制限されている。

勿論、講義で習うこともないし、自力で組み上げることも難しい。ノルンは使えないし、それはハロルドだって同じだろう。

「だけど、猊下なら扱える。ミシエル様が言ったように、シグが呪いによって夢に囚われているなら、その魔術を使えば助けられる。ただし、下手をすれば“帰ってこれない”けどね」

「帰って来れない？」

どこか含みのある言い方にノルンは思わず聞き返した。帰って来れないというのはどういうことだろう。

「そう。その魔術を使えば、人間の精神世界に入り込める。だけど人の心ほど分らないものはない。下手をすれば逆に夢に囚われるかもしれないし、精神世界での死は現実の死に繋がる。見たくない

ものだって目にしてしまいかもしれないよ?」

人の心ほど複雑で、分らないものはない。精神世界はその人間の全てを表す。嫉妬や憎悪、慟哭、奥に押し込めた暗い感情も何もかも。

それに加え、精神世界で傷を負えばそれは現実の傷となって返って来る。仮に死んだ場合、良くて昏睡、最悪なら死に至るだろう。何にしても相当な覚悟は必要になる。ハロルドはこう言いたいのだ。ノルンにその覚悟があるのか、と。

「シグを助けられるのなら構わない。そんなこと、私が躊躇う理由になんてならないから」

脅されたって何を言われたって引き下がるものか。ノルンの決意は変わらない。

彼と会うまで自分は他人の苦しみについて考えたことすらなかった。自分一人が苦しいんだと俯いて、前を見ないようにして自分の世界に閉じこもっていた。

シグフェルズが、ハロルドがいたから今のノルン・アルレーゼがある。今はまだ面と向かって礼は言えないけど、感謝しているのだ。

「ノルンちゃんならそういうと思ったよ。シグを頼む」

そう言ってハロルドは笑った。彼らしく人好きのする笑みで、ノルンがよく知る『ハロルド』の顔で。

猊下に会うと言っても本来なら一介の悪魔祓いが簡単に会えるも

のではないし、見習いであるノルンはもつての他だ。物凄く時間が掛かる上に、いくつもの複雑な手続きが必要になる。

アルトナ教徒や聖職者たちの前に姿を見せるのも夏の聖霊祭と冬の聖誕祭の二回だけ。

三十代という異例の若さで教皇の地位についたアルノルド・ヴィオンはとても三十六歳には見えぬほど若々しい。

恐らくは体内の精霊因子をコントロールすることで老いを止めているのだろうが、せいぜい二十代後半か半ばほどにしか見えない。

「会うつて今から？」

「そつ、勿論ノルンちゃんも一緒にね」

あまりに突然のことに怪訝な顔になるノルンにハロルドはあくまで軽く言った。

アルノルドに一目置かれているとされるハロルドだけならまだ分かるが、自分が一緒とは一体何がどうなっているのだろう。

自分がいくら聖人とは言ってもただの見習いで、アルノルドを目にしたことすら数回だというのに。それがいきなり会うと言われて驚かない方がおかしい。

「許可は？」

「その場で取る」

「は？」

さも当然とばかりに言うハロルドにノルンは開いた口が塞がらなかった。この数分で理解の範疇を超えることばかり起こる。

しかしノルンが目を白黒させているうちに、ハロルドは彼女の手を取って歩き出した。

「ハロルド！」

「大丈夫だつて。そんなに心配することないから」

ノルンはそもそも教戒というものが好きではない。こんな力を持っているから、無理やり保護という名目でここに連れて来られた。アルノルドがこの件と直接関係ないことは分かっている。

それでも彼は『教戒』のトップだ。どうしても一歩ひいてしまう。当代最強と謳われる悪魔被いで、様々な派閥があつた聖職者たちを纏めるカリスマ性。素晴らしい、尊敬に値する人間だと思うが、ノルンはアルノルドに何ともいえない複雑な気持ちを抱いていた。

ノルンを連れたハロルドは医務室を出て廊下を歩き、謁見の間へと向かう。本来なら滅多な事では開かれることのない謁見の間の脇には聖騎士たちが控えていたが、ハロルドはそれを異端審問官の権限で黙らせる。

異端と疑わしき者を審問し、必要とあらば肅清の許可も与えられた彼らは教戒内でも恐れられていた。

一つ目の扉をくぐれば、一際大きな扉が見える。金の縁取りに美しい彫刻が施された扉は見入ってしまうほどに見事だった。

そしてその扉の前に立つ人物を見てノルンは絶句した。

光の帯のように広がる金色の髪に、透き通った水を思わせる碧眼。白の聖衣を纏い、女性にも男性にも見せる繊細な美貌を持つ人物はノルンを尋ねて来た青年——ミシエルだった。

アルノルド・ヴィオン

ノルンの前にいるのは、光を思わせる金色の髪に青い瞳を持った青年、ミシエル。

だがここに入ることが許されているのは一部の聖職者だけ。それも枢機卿や大司教ほどでなければならぬ。

啞然とするノルンをよそにハロルドはミシエルに最高礼を送った。ノルンも慌ててハロルドに倣う。

頭の中がぐちゃぐちゃで何も考えられないし、訳が分からない。このミシエルという青年、思った以上に高い位にあるのだろうか。

「ミシエル様、詳細は彼女より聞き及んでおります。猊下にお目通り願います」

「承知しました。少々お待ち頂きますね？」

ミシエルの言葉にハロルドは無言で頷いた。何故、彼はこんな回りくどいことをしたのだろうか。

ノルンを介さずともハロルドに直接言えば事足りる。わざわざ会ったこともない自分に言わずとも面識のあるハロルドに言った方が早かったはず。

「それは私の立場上の問題です。ノルンさん。私はアルノルド様つき聖職者です。そして彼は異端審問官。私や猊下がただ一人を重用していると言いつらされては不味いですから」

まるでノルンの心を読んだようにミシエルが答える。まさか顔に出ていたのだろうか。

しかし珍しく狼狽する彼女にミシエルはこう付け加えた。

ハロルドは悪魔祓いでありながら、異端審問官である。そして異端審問官は聖職者であるものの、完全に独立した権限を与えられている。

確かに彼はアルノルドから一目置かれているが、教皇がただ一人の悪魔祓い、それも異端審問官を重用していると思われるのは不味い。

事実、ハロルドには様々なことを任しているのだが、それは表に出す事では無い。あくまで内密に、である。

「そう、ですね」

ノルンはいつも通りに答えようとして、慌てて『ですね』を付け足した。教皇猊下つきの聖職者となればそれこそノルンなど吹けば飛ぶほどの地位である。これは流石に敬語でなければ失礼極まりない。むしろ処罰の対象である。

しかし本来ならそれはハロルドに対しても同様だ。同じ聖人であるとは言え、一介の見習いが悪魔祓いにして異端審問官である彼のため口で話していいはずもない。ようは人柄と慣れである。ハロルド自身が咎めないこともまた一因であるが。

重厚な作りの扉に消えたミシエルはしばらくして戻って来た。微笑むと、彼は扉に手をかける。

「どうぞ、ハロルド、ノルンさん。猊下のお許しが出来ました」

ミシエルに続いて足を踏み入れた謁見の間は、ため息が出るほど美しかった。

精緻な彫刻が彫られた支柱に、鏡のように磨かれた大理石の床には金糸の刺繍が施された真紅の絨毯が敷かれている。

天井にはこれまた目を見張るほどの美しい絵画。青く澄んだ空に

舞うのは、純白の羽を持つ天使たち。奥には壁に代わって嵌め込まれたステンドグラスが陽光を浴びて七色に煌めいていた。

そして謁見の間であり、教皇専用の礼拝堂の中央、一段高くなつた場所に一人の男が腰掛けている。男というよりは青年と言つた方が正しいかもしれない。年齢はハロルドより四、五歳上、二十代半ばから後半だろう。

腰まで届く金掛かつた茶の髪は絹糸のように背中を流れており、光の滝のようにも見える。影を作るほど長い睫毛に縁取られた瞳は、翡翠と同じ鮮やかな緑。

金糸や銀糸などハロルドやミシエルよりずっと装飾が施された黒の聖衣を纏っている。それはハロルドやノルン同様、彼が悪魔祓いであることを示していた。

思わず見とれてしまうほどの優しげな美貌はまるで、天の御使いを思わせる。ハロルドとノルンは青年の前にひざまずき、頭を垂れた。

「顔を上げなさい」

歌手よりも穏やかで心地良く、聴き入ってしまう声に二人は顔を上げる。

ノルンの目の前に座っているのはまさしく、教皇アルノルド・ヴィオンだった。本来なら遠くから見ていることしか出来ない存在。そんな彼がすぐ近くにいます。

「突然の訪問、お許し下さい。お願いがあつて参りました。後ろに控えます聖人、ノルン・アルレーゼの同窓、悪魔祓い見習い、シグフェルズ・アーゼンハイトが大悪魔ベリアルの呪詛により、夢に囚われております。私では力及ばず、まことに申し訳ありませんが、

猊下の力添えを頂きたい次第でございます」

すらすらと口上を述べるハロルドにノルンは呆氣に取られていた。いつもへらへらして何を考えているか分からない彼だが、流石と言ったところだろうか。ノルンが何も言えなかったのは、ハロルドだけが原因ではない。

アルノルドの存在も少しばかりあった。彼の顔があまりに穏やかだったから。

ノルンはこう見えて他人の感情には聡い。しかしアルノルドは本当に嫌な様子は勿論、そんな気配さえ微塵も感じさせなかった。

いくらアルノルドの許しが出たとは言え、突然の申し出だ。それに加え、人の精神に深く干渉する魔術まで必要である。そう簡単に了承してくれるとも思えなかった。

ハロルドの頼みでもシグフェルズはただの悪魔祓い見習い。そんな彼に使用が厳しく制限されてる魔術をすぐに施してくれるとは思えない。

しかしノルンの読みは外れることになる。アルノルドのノルンを見る翡翠の瞳は慈愛に満ちていた。

何故、この人は優しい瞳で自分を見るのだろう。一度として会ったことも無い、こちらが一方的に見たことがあるだけなのに。

「分かりました。私で出来ることがあるのなら、喜んで力を貸しましょう。ですが、私より貴女の力が必要です。確かにこの魔術を使えば少年の意識に入ることは可能でしょう。ですが私は彼を呼び覚ますことは出来ません。私に出来るのはほんの少し、力を貸すことだけ」

良い意味でノルンの予想を裏切ったアルノルドに、ノルンは呆氣

に取られていた。こうも簡単に了承してくれるとは思わなかったのだ。

彼が自分を見る瞳はとても真剣で真摯である。知り合いでもないノルンを心配している。

アルノルドが言ったことはハロルドが言った通りだ。シグフェルズを助けるには彼の意識に入り、直接呼び起こさなければならぬ。それもただの眠りではなく、悪魔の力によって夢に囚われているのだ。

助けるにしても一筋縄ではいかない。悪魔が絡んでいる以上、最悪、命の危険も在り得た。アルノルドはノルンを試しているのではなく、案じているのだ。

「構いません。絶対に助けてみせます。……未だ若輩の身でありませんが、どうか私にお力をお貸し下さい、猊下」

そう言っただけでノルンは再び頭を下げた。嘘偽り無い、心からの言葉だった。昔の自分なら演技でも誰かに頭を下げることなんてしなかっただろう。

だが今は違う。シグフェルズやハロルドのお陰で変わったから。人間全てを好きになった訳ではない。けれど、アルノルドは信じて良いと思うのだ。きつと力になってくれる。それは教皇だから、というよりアルノルド個人の答えだろう。

「頭を上げなさい、ノルン・アルレーゼ。貴方達を助けるのは教皇として当然のことです。寧ろ貴女を危険な目に合わせるしかないことが無念でなりません」

聖人であり、当代最強と謳われる悪魔祓いであるアルノルドにさえ、この呪いを解くことは出来ない。

元よりそういう呪いであって仕方のないことなのだが、語る彼の

声音には悔しさが滲み出ていた。

「猥下が御気になさることでは御座いません。先ほど猥下が仰られたように、それが私に出来ること、ですから」

望まなかった力

「ではすぐにかかりましょう。ハロルド、ミシエルと共に彼を大聖堂の地下へ。君は私と共に」

アルノルドの行動は早かった。ハロルドとミシエルに指示を出すと、いち早く謁見の間を出る。

言われたからにはノルンも彼の後を追うしかない。

ハロルドが頷くのを見てアルノルドの後に続いた。普通、教皇が護衛もなしに出歩くことはない。いくら彼が当代最強と謳われる悪魔被いであってもだ。先日 of 逆十字の件もある。彼らは教戒はもとより、アルノルドの命も狙っていたのだから。

「げ、猊下、護衛の方は……」

「必要ない。君で十分だ」

どうにか声をかけたノルンにアルノルドは立ち止まり、小さく笑ってみせる。先程見たような慈愛に満ちた笑みではない。まるで悪戯が成功した子供のような無邪気な笑みだったが、ノルンもつられるように笑った。てつきりお堅い人なのかと思っていたが違うらしい。

遠くから目になっている彼とは少し違う。ノルンにしてみればこちらのほうが好感が持てるというもの。道行く聖職者たちはアルノルドの姿を目にするやいなや、慌てて最高礼を送った。

謁見の間を出て、アルノルドが向かったのは大聖堂の地下。ハロルドがシグフェルズの呪いを浄化するためにノルンを案内した場所だ。地下へと続く螺旋階段を下ること約五分。

現れたのは広い空間だ。無駄なものは一切なく、備え付けられた明かりが仄かに室内を照らしている。鏡のように磨かれた床には何十もの魔法陣が描かれていた。

アーケンジェルス

大天使級結界に覆われているこの地下室は、儀式魔術を行使するために詔えられた一種の閉鎖空間である。

ここならかなりの衝撃にも耐えられるし、魔術防護も完璧だ。

「……一つだけ。君の噂は色々聞き及んでいる。聖人の力は魂の資質だ。純粋な力自体に善も悪もない。大事なものはそれをどう使うか」

「何故、私に？」

そんな話を自分にするのだろうか。力はただ力でしかなく、扱う者次第だと言いたいのだろうか。ノルンにはアルノルドの真意が分からない。

だが見上げた翡翠色の瞳はあくまでノルンを案じるようなものであり、憂いに満ちたものだった。

「同じ聖人として。それは確かに君が望んだものではなかったかもしれない。けれど今も煩わしいと思っているかな？ その力があつたからこそ、彼は生きてここにいる。それは喜ぶべきことだ」

アルノルドは何も知らないはず。しかし彼はまるで全てを見通しているかのような問いをノルンに投げ掛けた。

そう、望んで聖人の力を手に入れたわけではない。何よりも煩わしいと思っていたのに。

けれど、今のノルンには分からない。この力があつたから僅かでもベリアルに抗することが出来た。もし自分がただの人間であつたなら、簡単に殺されていたはずだ。

「正直、分かりません。確かに私はこの力を疎ましいと思っていました。けれど、この力がなければシグの……助けになることは出来ませんでした」

それが今のノルンの正直な気持ちだ。聖人の力なんて煩わしいばかりで、必要だと思ったことは一度も無い。これまでも、そしてこれからもそうだと思っていた。なのに今は分からない。

聖人でなければこんな目にあうことはなかっただろう。平凡に日々を過ごしていたはずだが、シグフェルズやハロルドに出会うことはなかった。例えばあったとしてもこんな形で出会うことはきつくない。

そして何よりもノルンが驚いていたのは自分自身。何故、アルノルドに今の心情を吐露したのか。

教戒の象徴である彼は苦手だった。出来れば関わりたくないと思っていたはずなのに。優しくで労わるような笑顔を見たからなのかもしれない。

かつてそんな笑顔をノルンに見せてくれたのは家族を除いてシグフェルズとハロルドの二人だけ。

「君の事情は聞いている。それについて私は何も言うつもりはないし、資格もないから。だが君があのまま家族の元に居れば危険だった。君も君の家族も」

「……分かっています」

力を覚醒させた聖人が教戒に保護されるのには理由がある。希少な力、というだけではなく、本人や家族が危険に晒されるからだ。

聖人の力は悪魔に対して絶対的な優位となりえる。見付ければ悪魔達は真っ先に聖人を殺そうとするだろう。

聖人には勝てなくても、近しい者を襲うことだってある。悪魔は狡猾で残虐。人間に対して一切の慈悲も無い。

だからこそ聖人は、その存在故に教戒という庇護下に置かれる宿命にある。ただ一つも例外は無い。ハロルドやアルノルドでさえもそうだった。

孤児院の仲間たちと、家族と引き離されたのだ。会う事は許されない。特に家族とは。ノルンだって薄々感じていた、分かっていたことだった。

「割り切れとは言わない。君が教戒をよく思わないのは仕方がないことだから」

まさか教皇の口からそんな言葉が出るとはノルンも思わなかった。だが彼はふざけている訳でも、冗談を言っている訳でもない。真剣そのものといった表情だった。

アルノルドは自分の気持ちを汲んでくれる。ただの悪魔被い見習いで、聖人の力をよく思わない自分の。

何か言わなければならぬ、アルノルドの言葉に答えなければいけない。そんな衝動に駆られ、ノルンは口を開きかける。それはシグフェルズを連れて来たハロルドとミシエルに遮られることになった。

忌まわしいものでしかなかった聖人の力。それが前よりも疎ましく思わなくなったのはシグフェルズのお陰だ。

彼がいたからノルンは変わった。もう自分の殻（世界）に閉じこもっていた自分ではない。

「シグ……」

鏡のように磨かれた床に寝かされた少年は、本当にただ眠っているように見える。

シグフェルズを見たアルノルドがほんの一瞬、険しい顔をしたのを、ノルンは知らなかった。

人の精神に干渉する魔術は本来、儀式魔術に分類される。術者も数人で行うが、今回はアルノルド一人が全てを行う。

精神に干渉する魔術は強力だが、精霊の詩も通常の魔術と比べて遥かに長いため、実戦ではとても使えるような代物ではない。

魔法陣の中に残されたのはシグフェルズとノルンだけ。アルノルドやハロルド、ミシエルは魔法陣の外にいる。ノルンの耳には朗々と歌い上げるアルノルドの声が届いた。

思わず聞き入ってしまうほどに美しい歌声だった。まるで女神を讃える歌であるかのように。

『——我が声に応えよ。其は万物を写す水鏡にして蒼き波紋を投じるもの。今此処に汝が心、彼の者が作りし朧の世界と一つにならん』

長い詩が終わった。

その刹那、幾重にも描かれた魔法陣が仄かに光、鏡のように磨かれた床に波紋が生じる。

「頼んだよ、ノルンちゃん」

ハロルドにしては珍しい心配そうな声。ノルンが覚えていたのはそこまで。

次に目を開けた時、彼女の視界に映ったのはベリアルが作り出した世界と同じ、簡素だが暖かい家だった。

しかしそれ以外、ここには何もなかった。雪のように真っ白な世界が広がっているだけ。

足を踏み出しても足音はしない。まるで空中を歩いているような変な感覚だった。

「ここが……シグの心？」

精神世界に入り込む魔術なのだから、今見えている“これ”がシグフェルズの心の中なのだろう。何もない、本当に。ノルンでさえ寂しいと思う世界だった。

そこで初めてノルンは気付く。肝心なことを聞き忘れていた。どうやってシグフェルズを眠りから覚ますのか、を。かと言って、ここでじっとしている訳にも行かない。

あの家はきつとシグフェルズの家なのだろう。かつての幸せと日常の象徴。ミシエルは言った。彼は在りし日の夢を見ているのだと。あの家にはシグフェルズが幸せだった頃の全てがある。仲睦まじい両親、優しい兄。三年前に失われてしまったもの。

何をしてシグフェルズを助けると決意したのに、いざとなればすくんでしまう。他人の心に立ち入ることがこんなに怖いなんて。

泡沫のように儚いもの

シグフェルズの心の中は驚くくらい何もなかった。一軒の家があるだけで、色を無くしてしまったような世界。人の心に立ち入ることとは怖い。

しかし、いつまでもこうしている訳にはいかないのだ。一刻も早くシグフェルズを助けなければ。ノルンは心を決め、足を踏み出しノブに手を掛ける。息を吸ってドアノブを回した。扉の先にあったのは、幸せな日常の風景。

十四歳のシグフェルズに、写真で見た彼の両親と兄。仲睦まじい両親と自慢の兄、何の不満もない幸せな家族。幻のように消えてしまいそうな儚いもの。

一番幸せだった頃の夢を見せられて、抗えるはずがない。同じ立場ならノルンでさえ無理だろう。

幸せな夢を振り払ってまで辛い現実に戻りたいとは思えない。では自分はこの幸せな夢から、シグフェルズを助けることなど出来るのだろうか。

「お姉さん、誰？」

するとそれまで兄と楽しそうに話していたシグフェルズがノルンを見上げていた。この少年は彼本人なのだろうか。それともただの幻？

十四歳の彼は整った顔立ちの中にも幼さを残しており、今のような時折見せる影はない。真っすぐに純粋な少年だった。

「誰って言われても」

「分かった。シスターでしょう？」

ノルンは答えに困った。名を言ったところで、十四歳の彼はきつと分からないだろうから。シスターは確かに間違っではないが、正解でもない。

ノルンは教戒に属する悪魔祓い見習い。女性の聖職者をシスターと一くくりにするのなら間違っではないが、ノルンは人々に教えを説く宣教師ではない。人を害する悪魔を葬る者——悪魔祓いだ。だがそれも今の彼に説明しても意味がないだろう。ノルンは仕方なく、ありのままを話すことにした。

「私はノルン・アルレーゼ」

もしかしたら名を言えば、シグフェルズが分かってくれるかもしれない。僅かな希望を抱いてノルンは、自らの名を口にした。

しかし琥珀色の髪をした少年は不思議そうに首を傾げている。

やはり駄目だった。いや、こんなことで目が覚めるのなら、何もノルンである必要はない。

「ノルンさんって言うの？ 僕はシグフェルズ・アーゼンハイト」

無邪気に自分を見つめてくる少年に、ノルンは何とも言えない気持ちになった。

わざわざ教えて貰わなくてもよく知っている。この二ヶ月ほどで自分の心に居座った存在。

「知ってる」

「どうして？」

「それは……」

言いかけたその時、シグフェルズを呼ぶ誰かの声。女性であることから母親の声だろう。

シグフェルズは「いい」と返事をする。ノルンを一瞥して家族の元へ戻って行く。

「待つて！」

咄嗟に伸ばした手は空を切った。幸せそうにしていた家族はどこにもいない。

ノルンが立っている玄関。一面が血の海だった。赤黒い血に塗れたそこには、折り重なるようにして倒れるシグフェルズの両親の姿。その中に呆然と座り込むシグフェルズに、彼に鈍く光る剣を突き付ける兄——アルドがいた。

かと思えば場面が切り替わるように視界に写るものが変わる。次に写ったのは見慣れぬ孤児院。

礼拝堂で祈りを捧げる子供たちの中にシグフェルズの姿がある。そして今よりまだ少し若いハロルドもいた。彼の方は既に正式な悪魔被いであったようで銀系の刺繍が施された黒の聖衣を身につけている。

そう言えばシグフェルズとハロルドは、同じ孤児院の出身だと聞いた覚えもあった。はしゃぎ回る子供たちの中で、シグフェルズだけがその輪から離れて一人で佇んでいる。

皆に知られぬよう、一人隠れて泣く少年。

ノルンは俯き、声を殺して泣く彼に近付くと、包み込むように抱きしめた。こうも誰かの助けになりたいと思ったのは初めてだ。

これはもう過ぎ去った過去。分かつてはいる。

だがただ見ているのだけは嫌だった。彼は、シグフェルズは“一人”だった。両親を亡くし、兄さえも彼の側から去ってしまった。

「お、姉さん？」

いつの間にか孤児院も子供たちもいなくなっている。白い空間にはノルンとシグフェルズ、ただ二人だけがいた。

ノルンの背から妖精を思わせる二枚一對の翼が広がる。金粉を散らし、透き通った薄青の光の翼。この世の全ての神秘を凝縮したような奇跡を見ているかのよう。

「この翼にかけて誓う。私はシグを一人にしない」

シグフェルズが一人なら、自分がそばにいる。

何故、そんな言葉を口にしたのかノルン自身にも分からない。自然と口について出たのだ。

ノルンはシグフェルズに死んで欲しくない。身勝手な願いかもしれないけれど、生きて欲しいのだ。

「だから逃げないで、現実を見て。お兄さんを解放するんでしょう。このままでいいの？ 起きなさい、シグフェルズ・アーゼンハイト。このまま諦めるなんて私が許さない！」

「ノ……ルン？」

紅茶色の瞳がノルンを見上げる。シグフェルズは確かにノルンの名を呼んだ。

まるで夢から覚めたように驚きの混ざった声で。ゆっくりと身を離せば、未だノルンより小さな少年が口を開きかける。だが、

「ねえ、シグ。僕を一人にするの？」

後ろから少年を抱きしめた影。

それは幼き日のアルド・アーゼンハイトだった。思わず笑みを返してしまいそうな無邪気な笑みを浮かべているが、ノルンには分かる。

『彼』はアルド・アーゼンハイトではない。少年の笑みには無邪気さだけではなく、凄艶な色を帯びていた。

「にい、さん」

シグフェルズの顔が強張る。亜麻色の髪に『赤紫』の瞳をした少年の胸には、くすんだ十字架が鈍く光輝いている。

元は銀色だったのだろうが、右部分が大きく欠け、赤黒い血がこびりついていた。

その十字架はシグフェルズが見せてくれたものと同じだった。シグフェルズははっきりと言わなかったが、持ち主は兄だったのだろう。

「約束してくれたよね？　僕を一人にしないって。シグは優しいから」

「ベリアル、お前の好きにはさせない」

ノルンは『アルド』を睨みつけると、バクルスを具現化して突きつけた。

そう、彼はアルド・アーゼンハイトではない。本当の彼の瞳の色はハシバミ色だ。赤紫はベリアルの色。アルドの姿を借りたベリアル。ベリアルはその力の一部をシグフェルズの中に潜ませていたのだろう。

今のアルドからは相対した時のような圧迫感を感じないが、一部
とは言え、大悪魔には違いないのだ。

「シグは誰にも渡さない。僕とずっと一緒に居るんだから。ね、シ
グ」

バクルスを突きつけるノルンには怯まず、アルド、いや、ベリア
ルは恐ろしいほど美しく微笑んだ。いつまでアルドを演じるつもり
なのか。

シグフェルズは魅入られたように動かない。動けなかったのかも
しれない。

「兄さん……僕は……」

「シグはもう一人じゃない。ハロルドだって心配してる。だから帰
ろう?」

ノルンはバクルスの武器化を解き、シグフェルズに手を差し出し
た。

一人にしないと約束したから。シグフェルズを心配してくれる人
間はノルンだけではない。ハロルドやラケシス、クロト、アルノル
ドだってそうだ。ルームメイトのロヴァルだってきつと。

だから戻ってきて欲しい。彼が自分に教えてくれたように、今度
はノルンがシグフェルズを助ける番だ。

安い挑発

誰かを信じるなんてこと、今までしたことがなかった。他人なんて嫌いだし、裏切られるのが怖いから。

でも、ノルンはシグフェルズを信じていた。彼ならきつと自分に応えてくれると思った。くしゃり、とシグフェルズの顔が歪む。まるで今にも泣き出す手前のように。

「僕は、君と、ノルンと共に行くよ！」

「シグ！」

紅茶色の瞳に決意を秘め、彼はノルンの手を取った。十四歳の少年ではない。悪魔祓いの証である黒の聖衣を纏った十七歳の姿で、シグフェルズは微笑んだ。

自分の声がシグフェルズに届いた。彼は応えてくれたのだ。それが何よりも嬉しい。

「兄さん。いいえ、ベリアル」

振り返ったシグフェルズが真っ直ぐにアルド——兄の姿をしたベリアルを見つめる。

そこに憎悪はない。あつたのは悲哀。

琥珀と赤紫、視線が交わった瞬間、ベリアルがさもおかしそうに笑った。アルド・アーゼンハイトではなく、彼本来の姿で。

それは正に美の化身とも思える存在だった。同性でさえ息を呑むほどの美丈夫。すっと伸びた鼻梁、形の良い朱唇は見とれてしまうほど艶やかだ。

白磁のような肌には一点の染みもない。朱掛かった金色の髪は緩やかな曲線を描いて背中広がっている。

長い金色の睫毛に縁取られた赤紫の瞳は人を惑わす魔性の証。それを真正面から見つめ、シグフェルズは言い放った。

「お前から絶対に兄さんを解放してみせる」

「楽しみにしていよう。もっとも、それまで“あれ”がもつかどうかは分からないがな」

そう言って唇の端を歪ませたベリアルは美しかったが、薔薇に刺があるように美しいだけではない。毒々しさを感じさせる笑み。あれ、と言うのはシグフェルズの兄であり、ベリアルの契約者であるアルドのことだろう。

悪魔と契約した人間の命はそう長くない。彼らの力が強すぎるから。

悪魔の力を使えば使うほど、契約者自身の命を削っていくのだ。

「お前はそんなヘマをしない。無価値なるもの、ベリアル」

悪魔は人の負の感情を糧とする。憎しみな悲しみ、嫉妬といったもの。

ベリアルはあんな回りくどいことをしたのもそのためだ。ノルンからすれば悪趣味極まりないが。

だからベリアルはまだ、アルドの命を奪おうとは思わないはずだ。アルドの悲しみ、シグフェルズの怒り。ベリアルはそれを楽しんでいるのだから。

「ふふふ、あははは。その通りだと言って置こう。悪魔被いよ」

声だけで言うのなら、ベリアルの声は天上の歌声のように美しい。だが彼が虚偽と詐術の貴公子と呼ばれるように、ベリアルの言葉を信じてはならない。

堪えきれずに笑みを零す男をノルンは冷ややかな瞳で見つめていた。

今、自分達に姿を見せているのはベリアル自身ではない。彼の力の一欠けら。

例えベリアル自身ではないとしても、炎の王と恐れられる彼の力は強大だ。人を殺す事など造作もない。

「ならさっさとここから出て行ってくれない？ お前の用はもう済んだでしょう？」

ノルンはそう言うと言えども首から下げてあった十字架を手に取り、バクルスを具現化させた。そしてそれをベリアルに突きつける。

「お望みなら僕もお相手致しますよ。『炎の王』」

シグフェルズもノルンの隣に並ぶと、彼女と同じようにバクルスを具現化した。

いくらベリアルと言えども聖人と見習いとは言え悪魔祓いを相手にするには心許ない。

ここはシグフェルズの精神世界だ。下手をすれば彼の精神にも異常を与えるのだが、ベリアルは知っていて力を振るわない。

人間如きにそこまでする必要はないとの安い挑発だ。なら、こちらにもそれにのるしかない。

「いいだろう。退いてやろうではないか。だが忘れるな。情弱な人間を滅ぼすなど悪魔にとって造作もないことだ」

「お前こそ人間をなめないで」

真紅の唇を歪ませ、美しくも背德的に嗤うベリアルをノルンは鋭く睨みつける。悪魔の力は強大だが、力だけが全てではない。そこに付け入る隙があるというもの。

「しかと覚えておこう。さて、その体でいつまでもつのか、見物だな。精々足掻くがいい。愚かなる人の子よ」

ベリアルが口にした言葉の意味をノルンは理解出来ずにいた。その意味を問う前にベリアルのは掻き消える。後に残ったのは、血で染めたような禍々しい一枚の羽根だけだった。

ノルンは大悪魔の姿が完全に消えたことを確認すると小さく息を付き、バクルスの具現化を解く。

その時、隣のシグフェルズがぽつりと、呟くように謝罪した。

「……ごめんね、ノルン」

「何を謝ってるの？ シグが謝る事なんてない」

全てノルンが勝手にしたこと、彼が謝る必要はどこにもない。ノルンはシグフェルズに死んで欲しくなかったから。ただそれだけだ。

自分を理解してくれる人がいなくなるのは、とても辛いから。その点ではノルンは強くなったのかもしれない。

だが同じように弱くも無かったのだ。もう、一人ではないから。

「でも……」

「私は後悔なんてしていない。それで十分」

尚も言い募るシグフェルズに、ノルンは有無を言わせず言い切った。

誰かに言われたからではない。シグフェルズを助けたいと思ったのは自分自身。

ノルンは謝罪や礼が欲しい訳ではない。ただ、彼に生きて欲しいと願ったから。悪魔などに負けて欲しくないと思ったから。

「ノルン……」

「だから何も言わないで。私は何もいらなから」

「どうして？ 僕は君に対して何が出来るだろう」

何も言わないでと言ったノルンにシグフェルズは何故かと問うた。ノルンにとってシグフェルズなど、ただの同窓でしかないはず。なのに彼女は助けてくれた。それに加え何もいらなからという。そんなノルンにシグフェルズは一体何が返せるだろう。

「じゃあ、笑って。ただそれだけでいいから」

ノルンはシグフェルズの笑顔が好きだ。どこか影のあるようなものではなく、彼本来の笑顔が。

何も望まない。だが“笑顔”が見たい。自分には決していないものを彼は持っているから。

「そんなことでいいの？」

「いいの。それとも私のために笑うのは嫌？」

そう言っただけ彼女はからかい半分に笑った。今までの彼女なら滅多に見せなかったはずの無邪気な笑みだ。シグフェルズは自分が試されているような気がした。

何故かは分からないが、唐突にそう思ったのだ。

「そんなことない。ノルン、僕を助けてくれて本当にありがとう。君がいたから僕は“生きたい”と思えたんだ」

シグフェルズが告げたのは、嘘偽りない心からの言葉。ノルンと出会う前の自分は生きていただけの屍に過ぎなかった。

兄を悪魔から解放することだけを考えて生きて来た。そのための力を欲したし、自分が望む力を持つ彼女がその力を疎ましいと感じることが許せなかったのだ。

だが何も分かっていなかったのは自分の方。

彼女もまた孤独だった。いや、自らの意思で孤独であろうとしたのだ。ノルンが生きたいと願うことを教えてくれた。

兄を解放するためだけではなく、シグフェルズ・アーゼンハイトとして生きていたいと思えるようになったのだ。

「私だってそう。シグがいたからこの力を疎ましいとは思わなくなった」

聖人の力がなければシグフェルズの力にはなれなかっただろう。何よりも忌まわしいと感じていた力。今はこの力を疎ましいとは思えない。

「お互い様だね、僕たち」

「そう。だから礼も要らない。分かった？」

二人とも、欠けたものを抱えていた。

いや、人間であればそれが当たり前だろう。それを補ってくれたのがノルンであり、シグフェルスだった。

ルシファアの居城

「うん、分かった。お礼は言わないよ」

そう言ってシグフェルズは笑った。いつも見せていた影のある笑みではない。心からの。

それはまるで、万物を照らす太陽のように明るい笑みだった。この笑顔が見たいと願った。ノルンにはない、とても眩しいと思うもの。

「だから言っただしょう。さあ、帰ろう、シグ。ハロルドも待つてから」

自分の帰りを待ちわびてくれる人がいる。それがどんなに嬉しいことか、昔のシグフェルズには分からなかった。

だが今は違う。素直に嬉しいと思えるようになったのだ。生きたと思うようになったことも、案じてくれる人がいるということも。

シグフェルズに向けて差し出された手。

白磁のように滑らかで美しい、だが無数の傷が刻まれた手。自分より一回り以上も小さい華奢な手をシグフェルズは握り返した。

途端、視界が白く染まって行く。意識が途絶える瞬間、シグフェルズは柔らかく笑うノルンの後ろで、微笑む両親の姿を見た気がした。

それは夢が覚めるように唐突に。

ノルンが目を覚めたのは、アルノルドの術より三十分後のことだった。重い体を何とか起こし、シグフェルズの方を見るが、彼がいた場所には誰もいない。

「よく頑張ったね、ノルンちゃん」

「ハロルド。シグは？」

「ノルンちゃんより先に目を覚ましたんだけどね、色々検査中。心配しなくても大丈夫だって。だからノルンちゃんも今日は休んでいいね？」

ノルンも異議はない。返事をする気力もなくて、どうにか頭を振って答える。

体が鉛のように重くて何もする気にならなかった。出来ることから、このまま寝台へダイブして寝たい気分である。

「後のことは私たちに任せて君は休みなさい。すまなかったね、何の手助けも出来なくて」

優しく微笑んだのは教皇アルノルド。手助けというのはシグフェルズの精神に潜んでいたベリアルのことだろう。

しかしいくらアルノルドといえど、人の精神に潜んだ悪魔を滅することは出来ない。それくらい、ノルンにも分かっていた。

「いいえ。これで良かったんです。猊下が出ればあれも本気になったかもしれない」

自分だからまだ良かったのだ。当代最強と謳われるアルノルドが出れば、ベリアルの方も本気を出していたかもしれない。そうなれ

ば間違いなく被害が出る。

それから後はよく覚えていない。ふらふらとした足取りで、ハロルドに支えられながら自室に戻り、寝台に倒れ込んだのだった。

目を覚ましたシグフェルズは再び、医務室のベッドの上にいた。体のどこにも異常はないが、大事をとっての処置らしい。いつでも意識があるので、ただ横になっているだけというのも退屈だ。かと言って横にはハロルドがいるため、逃げ出すことも出来ない。

「……もう気付いているんだろう？」

主語のない、だが確信を含んだハロルドの問いに、シグフェルズ

は無言で俯いた。やはり彼には隠し通せなかったか。覚悟を決め、ハロルドを見る。

いつものような気の抜けた顔でも、人好きのするものでもない。仕方のない子供を見るような、それでいて真剣そのものと言った顔をしていた。

「覚悟していたことです」

上体を起こし、服越しに背中 of 傷に触れる。僅かに熱を持ったそれはもう、古傷ではなかった。ハロルドは無言でシグフェルズの服を上げる。

白い肌に刻まれていたのは大きな傷ではない。

墮天使の翼を思わせる刻印、咎の烙印だった。ベリアル of 力を受けて再び、呪いが変化したのだ。

そうなってしまうえばハロルド of 力でも浄化出来ない。今度こそ死 of 呪いはシグフェルズを蝕もうとしていた。

「今まではただ一つ of ことを見ていればよかった。だけど彼女が教えてくれましたから。でも今は少しだけ、終わりが怖くなりました」

ノルンと出会う前は、差し違えてでも兄を止めるつもりだった。

兄のことだけを考えていればよかった。

三年前のあの日から死を恐れたこともなかったのに。それなのに今は怖い。死にたくない、生きてたい。

泣き笑いのような表情で言うシグフェルズに、ハロルドはかける言葉が見つからなかった。

僅か十七歳で死を覚悟する。ハロルドには想像することしか出来ないが、それこそ自暴自棄になってもおかしくない。それなのにシグフェルズは笑っている。

「ハロルドさん、このことはノルンには言わないで下さい。お願いします」

「……咎の烙印についてはもちろん、最善を尽くそう。けれど、隠し通せる？ 彼女に」

これから先もノルンと行動を共にする機会が多いだろう。近しい者に隠し事をするというのは精神的にも堪える。

「はい。これ以上、心配を掛けたくないんです」

自分が死の呪いに侵されていると知ればノルンはきっと己を責める。

余計な心配はかけたくないし、ノルンの重荷になるだろう。それはシグフェルズが望むところではない。

人が地獄と蔑み、恐れる場所。この世界に住む悪魔たちはこの世界を地獄とは言わず、魔界と呼ぶ。この地は遙か昔、創世の女神に反逆した堕天使たちが追われた世界で、天界の下にある現世よりもずっと“下”にある世界だ。

魔王ルシファアの統治の下、平穩を保ってはいるが、その定義というのも人間世界とは異なる。領地を巡っての小競り合いなど常日頃で、血で血を洗う戦いが繰り広げられている。

そんな魔界の中央に位置する魔王ルシファアの居城を一人の男が訪れていた。贅の限りを尽くされた城はまさに豪華絢爛といった表現が相応しい。

床は全て大理石であり、敷かれた絨毯は天鷲絨だ。天井に取り付けられたシャンデリアは硝子ではなく、水晶で作られている。

下級に属する悪魔たちでは入れない一種の聖域。

どこまでも続く回廊を歩いているのは一人の男。緩やかに波打つ金色の髪は朱掛かっており、優雅に背中を流れていた。

均整の取れた体躯にすらりと伸びた肢体、血のように赤い唇は何とも言えない色香に溢れている。

どんな宝石より鮮やかな瞳は光の加減によって色を変える赤紫で、それは正に人を惑わす魔性の瞳だった。

男は貴族が纏うような黒の礼服を纏い、きらびやかな金の装飾品を身につけていた。

歩けば誰もが見とれてしまうほどの美貌の持ち主で、悪魔たちも

まるで魂を奪われたかのように彼を凝視していた。

男——ベリアルがこの城を訪れたのは自らの意思ではない。城の主であり、魔界の王であるルシファアの命を受けてだ。

主の呼び出しとなれば従わないわけにはいかず、半端な格好で顔を出せない。そのための正装である。

こうして歩いているだけでもひしひしと感じる威圧感。監視しているという意思表示なのだろう。

力の気配からしてアモンかパイモンか。

『炎の王』、『虚偽と詐術の貴公子』と呼ばれるベリアルだからこそ平然としているが、他の悪魔ならこうはいかないだろう。

ベリアルと言えば、悠然と言ってもいいくらいの足取りで歩を進めている。自分が何故城に呼ばれたのか。それはパイモンの忠告通り、ルシファアへの申し開きのためだ。

彼女が自分の監視のためにゴモリーを付けていたのは知っていた。知っていて泳がせていたのだ。

もっとも、それはパイモンもゴモリーも承知の上だったろうが。

「ふっ……」

堪えきれずにベリアルの口から笑い声が漏れる。何もかもおかしくてたまらない。人間も天使も同胞である悪魔たちでさえも。ベリアルにしてみればどれも同じだ。

“悪魔”とは創世の女神アルトナに反逆し、天より墮とされたものを指す言葉だ。白い翼は闇に染まり、肉体を構成する精霊因子は闇へと変わる。

彼らは人間を魔へと落とし、その魂を喰らう。あるいは嫉妬や侮蔑、慟哭といった負の感情を好むのもその特性だ。

勿論、それはベリアルとて例外ではない。

何せあのルシファーから悪魔という響きがこれほどまでに似合う者はいない、そう言われたくらいだ。人を惑わす極上の美貌、虚偽と詐術を司る彼はもつとも先に女神に反旗を翻した悪魔だ。

豪華な絨毯を踏み締めながら、ベリアルは歩く。悠然と。まるでこの城の主であるかのように。

すると彼はある扉の前で立ち止まる。精緻な彫刻が刻まれ、大粒の宝石がはめ込まれており、取っ手は純金で出来ていた。謁見の間へと続く扉である。

そしてその扉の前には一人の青年の姿があつた。年の頃は二十代前半ほど。ベリアルほどではないが長身である。雪を思わせる白髪はきらきらと光り、その双眸はまるで月のように輝く黄金。華やかというよりはどこか静謐さを感じさせる美貌で、ベリアルとはまた違った美しさを持つ青年だった。

頭には金の冠を乗せ、騎士装束を思わせる裾の長い真紅の礼服を纏っている。

「ルシファー様への謁見ですか、ベリアル殿？」

誰もが見惚れるような笑顔で青年は言った。

だが歓迎というよりは、どちらかというと拒絶が混ざった笑みに気付いたのだろう。ベリアルもまた冷笑で返す。

「ああ、そうだ。ベリト。許可は頂いている」

彼——ベリトは本来ならこの扉の前にいるような悪魔ではない。二枚舌でも知られるが、真紅の騎士の異名を持つ公爵である。

「ならば僕が貴方を遮る理由はありません。どうぞ、謁見の間へ」

腰を折り、優雅に扉を開けるベリトの口調自体は丁寧だが、やはりよそよそしさは拭えない。恐らくは故意にだらうが。眉を潜め、不機嫌だと分かる顔でベリアルは言った。

「何故、お前がここにいる？」

ベリトは門番ではない。彼には彼の領地がある。

そんなベリアルに対し、真紅の騎士と呼ばれる青年は楽しげに、くすりと微笑んだ。

「それはベリアル殿には関係のないこと。さあ、どうぞ。これ以上、ルシファー様をお待たせする訳には参りません」

知る必要はない。そう言うことだろう。これ以上、ルシファーを待たせるな。そこまで言われればベリアルも否とは言えない。無言でベリトの横を摺り抜けて行く。

それを見送ったベリトはぽつりと呟いた。

「これはこれは……ルシファー様も大変ですね」

魔王ルシファー

謁見の間へと続く扉を潜った先にも回廊は続いていた。鏡のように磨かれた大理石の床に豪華な絨毯。ただの通路にしておくには明らかに華美である。まるで進むべき道を知っているかのようにベリアルは進む。

やけに開けた場所に出たのはそれから間もなくのことだった。

それまでの華やかさなど吹き飛んでしまうほど、その部屋は素晴らしかった。天井に付けられたシャンデリアは大粒の宝石であり、白い壁に施された彫刻は目を見張るほどに素晴らしい。手を抜いているところなど一切なく、贅の限りが尽くされている。

金や象牙などきらびやかに飾られた玉座はただ一人のためにある。玉座に腰掛け、ベリアルを見下ろしているのは一人の青年だった。年の頃は二十代前半ほどだろう。同性でさえ見とれてしまうほどの美貌を持つ彼は、まるでこの世のものではないかのよう。

薔薇よりも赤く血よりも深い髪は肩より僅かに長く、黄昏色の瞳はどんな宝石より美しい。

彼の存在自体が奇跡。ずっと伸びた鼻筋に、紅を引いていないというのに唇は血のように鮮やかだった。肌はまるで雪のようだが、すらりと伸びた肢体は弱々しさなど微塵も感じさせない。

ベリアルと同じような夜色の礼服を纏っており、彼の髪と瞳によく映えた。

「ルシファー様に呼び出された理由は分かっていますね、ベリアル？」

口を開いたのは赤い青年ではない。彼の背後に影のように控えて

いた少年だった。

外見は十六、七歳くらいだろうか。優しげな、だが恐ろしく整った、中性的な顔立ちの少年である。

若葉を思わせる髪は絹のように滑らかで、瞳は光の加減によって色を変えるピーコックグリーン。

見た目はただの少年だが、彼はベリアルよりも“格上”の悪魔である。

かつては熾天使の地位にあり、天使時代はミカエルと並んでルシファーの右腕だと言われていた。

今もそれは変わらない。“蠅の王”とも呼ばれる大悪魔ベルゼブル。強大な力を持つ悪魔だ。

「存じているさ“蠅の王”殿。ルシファー様におかれましてはご機嫌……」

「御託はいい」

恭しく礼をしようとしたベリアルは青年の容赦のない一言に遮られた。

底冷えするような視線を向けているのがこの城の主であり、悪魔たちの王。かつてもっとも美しき天使と呼ばれたルシファーである。だがこの青年は、天より墮とされた今でも美しさを失っていないかった。

御託はいい。ルシファーはベリアルの口上をそう切り捨てた。随分とお怒りの様子である。

殺気こそ出していないが、彼の秀麗な美貌は怒りに歪んでいる。その様さえ美しいと感じるのは、彼がもっとも美しき天使と呼ばれたからだろうか。

「ベリアル、貴様、人間と契約していたようだな。それも三年前に」

ルシファアの黄褐色の瞳は冷ややかにベリアルを見下ろしている。普通の悪魔なら震え上がって許しを乞うところだが、ベリアルが意に介した様子はない。むしろ楽しみに笑っているだけだ。

「確かに事実ですが、逐一報告する義務はないはずです」

悪魔の中に契約者を報告するという義務はない。誰と契約しようが、何をしようがそれこそベリアルの手先なのだ。ルシファアに咎められる理由はない。

「ああ。だがお前ほどの悪魔となれば別だ。それとこの地に聖人を招いたそうだな。レヴェナから聞いている」

レヴェナ、というのはゴモリーのことであり、親しい者は彼女はそう呼ぶらしい。

そう、あの忌まわしい聖人と悪魔被いを殺そうとした時、ゴモリーが割って入ったのだ。ルシファア様のお許しなしに人間を招いたどころか、聖人の血で汚すつもりなのか、と。公爵である彼女でさえ、ベリアル障害にはならない。

だがゴモリーも相手にするには面倒だし、彼女はパイモン——つまりはルシファア直属の部下である。下手に手を出せば二人が黙っているまい。

「あまり人間を見くびるな。教皇アルノルド・ヴィオンは気づいていた。お前の存在にな」

「人間など私の敵ではありません」

いくら相手が当代最強と謳われる聖人であっても所詮は人間。ベリアルは敵ではない。見くびるものにもそれが事実なのだから。するとそれまで沈黙を守って来たベルゼブルが口を開いた。

「口を慎みなさい。ルシファー様の御前ですよ」

「これは失礼。口が過ぎました」

ベルゼブルの指摘に素直に頭を下げながらも、ベリアルの口元には笑みが浮かんでいる。謝っているが、それが本心からの言葉でないことはすぐに分かった。

「話す気がないのなら、これ以上は時間の無駄だ。二度目はない、私はそう言ったはずだが？」

最近の行動は目に余る、そう言われた時に釘を刺されたのだ。次はない、と。

瞬間、ベリアルは見えない鎖で縛られたかのように身動きが取れなくなった。これがルシファーの力。彼自身は指一本すら動かしていないというのに、圧力だけでこの力である。

末恐ろしいどころの話ではない。ベリアルとて気を抜いていた訳では決してないというのに。

最も美しい天使にして、最強の天使——だったルシファー。彼はミカエルに破れ、天より墮とされた。だがルシファーに敵う者はいない。悪魔でも天使でも。

現にベリアルは指一本すら動かせなかった。力を使えばこの呪縛を打ち破ることは出来る。出来るがそれは、ルシファーを前にして

賢明とは言えないだろう。

その余裕めいた表情を目茶苦茶にしてやりたい。何度そう思ったことだろう。

「ベリアル、貴方の無礼はいつものことですが、今回ばかりは目に余る。それにルシファー様の御忠告が脅しではないことは、理解しているでしょう？」

身動き出来ないベリアルにベルゼブルはそう言った。そこは流石は側近か。ルシファーの殺気の中でもいつもの調子を崩さなかった。ベルゼブルは物腰も口調も丁寧だが、ルシファーに逆らう者には一切の慈悲もない。美しいピーコックグリーンの瞳には僅かな怒りが浮かんでいる。

「私に言うことはないか、ベリアル」

ルシファーの黄昏色の瞳が光る。更にベリアルに加わる圧力が増した。この圧力だけで下級に属する悪魔は消滅するだろう。

静かな怒りに燃えるその顔でさえ、婉然として美しい。

「私は自分が間違っているとは思いません。ですが、ルシファー様の言い付けを守らなかったことはお詫び致します」

ルシファーが本気を出せばベリアルとて滅びは免れない。ベリアルはそれを理解している故にルシファーの圧力を振り払い、優雅に腰を折った。

その途端、彼を押さえ付けていた力が消え去る。

「いいだろう。だが当分の間、領地から出ることを禁ずる。いいな？」

公爵であるベリアルは自分の領地を持っている。シオウルという名であり、彼はシオウルの支配者とも呼ばれているのだ。

ルシファアの命は文字通り、シオウルから出るなということ。

「仰せのままに」

「ならば去れ。時がくれば遣いをやろう」

尚も不機嫌そうなるルシファアに一礼して、ベリアルは謁見の間を後にした。

ベリアルが去ってしばらくした後、ルシファアは後ろのベルゼブルに声を掛けた。不機嫌な声を隠そうともせず。

「……ベル、見張りを付けておけ。それと、ベリアルの契約者について調べろ」

「お任せください」

魔王ルシファア。偉大なる地獄の支配者にして、かつて暁の御子と呼ばれた天使。もしここにミカエルがいれば、今のルシファアを見て何というだろう。

大天使ミカエル。ベルゼブルと並び、ルシファアの右腕と謳われ、かつて彼にもっとも近いとされていた天使。ミカエルはきっと悲しむに違いない。

だがそれはベルゼブルが考えるべきことではない。ベルゼブルはその考えを頭から追い払うと瞑目し、静かに頷いた。

シグフェルズの異変

剣を下げ、血まみれになった兄が笑う。その足元には事切れた両親の姿。

そんな中、自分——シグフェルズはほうけたように兄を見上げることしか出来ない。兄の“赤紫”の瞳は爛々と輝き、血の海を写している。

「兄……さん」

途切れ途切れに名を呼べば、兄の視線はこちらを向く。何をいうまでもなく、凄艶な笑みを浮かべたまま、その剣をシグフェルズに振り下ろした。

声にならない悲鳴を上げて、シグフェルズは飛び起きる。今見た光景が夢だと気付いたのはそれから数秒後。

部屋は血の海でもないし、自分も十四歳ではない。知らぬ間にかいていた汗を拭い、深いため息をつく。

あの夢自体は何ら珍しいことではない。三年前より見続けている。だが今日はいつにも増してリアルだった。同室のロヴァルが起きた気配はない。

自分はいつになればこの悪夢から解放されるのだろう。兄を救うまで？ それとも死ぬまでだろうか。自嘲するように、シグフェルズは笑った。

「咎の烙印、か」

悪魔が齎す死の呪い。その証たる刻印は自分では見れないが、ハロルドによると墮天使の翼を思わせるものらしい。

自分に残された命の期限。どれくらい残っているのか。

ハロルドにはノルンに言わないよう口止めを頼んだ。彼女に関係ない、と言えは怒られそうだが、これ以上、自分の事情に巻き込みたくない。傷付くのは自分だけで十分だ。

『ごめん、ノルン。君は怒るかもしれないけど、僕は……』

いつ来るとも知れない終わりは怖い。どうしようもなく。それと同じくらい、ノルンに知られたくなかった。

たとえ、馬鹿だと罵られても隠し通すことを決めたのだ。

いや、本当に嫌なら彼女のそばから離れればいい。そうすれば全て解決する。この言いようもない感情も、焦燥や葛藤、後悔だってでも出来なかった。ノルンの隣は心地良くて、どちらも選べない自分が情けない。

シグフェルズは弱い人間なのだ。だからどちらも選べない。

様々なしがらみを断ち切ることが出来れば、これほどまでに苦しむことはないのだろうか。

ノルンに出会ってから、シグフェルズは迷ってばかりだった。今までは迷うことなどなかったのに。

正しい答えなんてないのかもしれない。けれど考えずにはいられない。全てを捨てられれば、どんなに楽だろう。それが叶わないと知りつつ、シグフェルズは目を伏せた。

あの日から、シグフェルズが目覚めてから、ノルンは違和感を感じていた。何がどうとか具体的には言えない。

だがおかしいのだ。まるで見えない壁一枚を隔てているように。

シグフェルズ本人を問い詰めても恐らく無理だ。だからノルンはハロルドを捕まえることにした。自分の他にシグフェルズに近い人間だから、何か知っているかもしれない。

彼は異端審問官であり、優秀な悪魔祓い。本来なら教戒にいることさえ稀である。

そんな彼が教戒にとどまることが多くなったのは、ノルンとシグフェルズの教育のためだ。

ノルンはマラキ大司教に報告を終えたハロルドを呼び止める。

「ハロルド！」

見習いの聖職者が仮にも司教を呼び捨てにしてはならない。

けれどここにはノルンとハロルド以外の人間はいないし、ハロルドが咎めることもないため構わないだろう。

「どうしたの、ノルンちゃん？」

「ちよつと話が……」

何と言つていいものか逡巡するノルンに、ハロルドはへらりと笑った。

せつかくの美形が台なしたが、ここにハロルドに尊敬の念を抱いている人間がいないのが幸いか。

「ちようどよかった。オレもノルンちゃんとシグに話さないといけないことあるし。ミシエル様直々の命だよ」

ハロルドの口から出た思い掛けない名に、ノルンは怪訝な顔をした。

ミシエル、というのは教皇アルノルド・ヴィオンツきの聖職者で、まるで天使のように美しい青年だ。そんな彼が見習いである自分たちに何の用があるというのだろうか。

「どついうこと？」

「ま、それはシグも呼んでからね。で、ノルンちゃんはどつしたの？」

「最近、シグの様子がおかしい。何がとは言えないけど……」

長らく人と深く付き合つたことのないノルンだが、それでも一番近くにいる人間の異変には流石に気付く。

かと言つて避けられているふうでもないし、自分に対する態度がおかしいわけでもない。

それでも何かが変なのだ。珍しく表情を曇らせるノルンに、ハロ

ルドは悟られぬよう不思議な顔をした。

彼女を騙すのは本意ではないが、シグフェルズが望んだこと。それを自分のヘマでノルンに悟らせる訳にはいかない。

「やっぱりお兄さんのことがあったからじゃない？ 契約した悪魔だってあのベリアル。悩みたくもなるって」

ノルンだってハロルドが言いたいことも分かる。シグフェルズの兄が契約したのはあのベリアル。

『炎の王』、『虚偽と詐術の貴公子』、『シオウル支配者』などいくつもの名で呼ばれる彼は、ルシファアの腹心であるベルゼブルに匹敵するほどの力を有している。

魂を解放するとしても絶望的に近い。聖人でもない人の身で、高位に属する悪魔や契約者を相手にするのは困難だ。

だからシグフェルズの様子がおかしかったのだと、ハロルドは言いたいのだろう。確かにそうだ。だがノルンにはそれだけではない気がしてならない。

「……そう。ハロルドも心当たりがないなら構わない」

しかしハロルドが特に何も感じないのなら、もしかしたら自分の勘違いだったのかもしれない。

まだ少し納得出来ないところがあるが確証がない以上、それは何の意味もなさないのだ。

「あんなことがあったばかりで無理かもしれないけど、ノルンちゃんももう少し肩の力を抜いてもいいんでない？ ずっと張り詰めたままだと疲れちゃうよ。ほら、オレみたいにさ」

ベリアルとの死闘はまるで別世界の出来事のようにだった。いくら

悪魔抜いだと言っても、高位に属する悪魔と相對することはほぼない。

彼らは滅多なことでは地獄から出てこないのだ。

だと言うのにまだ見習いのノルンが、大悪魔と呼ばれるベリアルと戦った。シグフェルズやラケシスという名の少女もそうだが、よく生きていられたものである。

「ハロルドはいつも抜きっぱなしじゃない」

片目を瞑り、おどけたようにハロルドが言う。そんな彼を見て、ノルンは思わず苦笑した。ハロルドがやる時はやる人間とは知っている。

だが普段から力を抜きすぎなのだ。これで尊敬しろと言う方が無理である。

「そかな？　いつも大真面目なんだけど」

「どの口が言うの、それ？」

「この口」

半分呆れ口調で言えば、ハロルドは自身の口を指した。これでノルンより五つ上だと言うのだから不思議である。シグフェルズの方がずっとしっかりしているではないか。

このまま話しているとハロルドのペースに巻き込まれそうで怖い。ノルンは投げやりに頷いた後、仕切りなおすように軽く咳払いをした。

「はいはい。で、シグと一緒にミシエル様からの話、聞かせてくれるんでしょう？」

ミシエルとラファエルの頼み

「御呼び立てして申し訳ありません」

シグフェルズ、ハロルドと共にノルンは大聖堂を訪れていた。人払いは済ませているのか、人の姿はない。出迎えたのは勿論、ミシエルである。そして彼の隣にはもう一人、見慣れぬ人物がいた。

歳の頃はハロルドより僅かに上。二十代前半ほどだろう。優しいが、麗しい顔立ちをした美しい青年である。煌めく青銀色の髪を緩く三つ編みにして左肩に流しており、影を作るほどに長い睫毛の下にはサファイアブルーの瞳が輝いていた。

肌はミシエル同様、抜けるように白く、血管すら透けて見えそう
だ。

自分たちやハロルドと同じ、黒の聖衣を纏っているが、明らかに
装飾が違う。使われている生地も違っだろうし、銀系の刺繍は豪華
で彼が高位の聖職者だと窺い知ることが出来る。

「そちらのお二人は初めまして、ですね。私はラファエルと言いま
す」

癒しの天使の名を冠する青年は、柔らかに微笑んだ。ノルンとシ
グフェルズはそんな彼に対し、深々と頭を下げた。

聖職者で彼の名を知らない者はいない。それが例え見習いであつ
てもだ。

「お初にお目にかかります、枢機卿閣下。シグフェルズ・アーゼン
ハイトと申します。後ろは同じく悪魔被い見習い、ノルン・アルレ
ーゼです」

シグフェルズに合わせてノルンも再び、無言で頭を下げる。
目の前の青年はラファエル・セラフ・アーデルハイト。教皇につぐ地位を持つ枢機卿の一人である。

「顔を上げてください。あなた方に頼みたいことというのは猊下に
関することなのです。そうですね、ミシエル様？」

ラファエルの口から出た猊下という言葉に、ノルンは内心、首を傾げた。アルノルド付きのミシエルだけでなく、枢機卿のラファエルまで直接姿を現したとなると、それ相応の“頼み”なのかもしれない。

ハロルドはともかく、見習いである自分たちを呼んだ理由までは分からないが。

いくら自分とシグフェルズが悪魔祓いに近いと言われても、自分たちは正式な悪魔祓いではないのだから。

「ええ。他でもないあなた方を呼んだのは猊下の護衛をして頂きたいからです」

「護衛、ですか？」

無礼だということも忘れ、ノルンは思わず聞き返していた。教皇
と言えど、当代最強と謳われる悪魔祓いであるアルノルドに本来な
ら護衛は必要ない。

まあ、建前もあるためそういう訳にも行かないのだが。

「はい。あなた方にはハロルドと共に猊下を護衛して頂きたいので
す。行き先は王都アージェンスタイン、学園です」
アカデミー

教戒の総本山があるここは法都シェイアードであるが、アージェンスタインには教戒と並ぶ魔導師育成機関である学園アカデミーが存在する。教戒の魔導師が対悪魔、防御や治癒に特化しているに対し、学園は様々な選択肢が存在するらしい。

ノルンたちが使うバクルスを手掛ける魔具職人を多く輩出するの
も学園である。

魔導師を育成する、という目的の一致から学園と教戒の仲は悪かった。

だが数年前、マイスターズギルド魔具職人協会のトップであり、現在は引退している
マイスター、《金剛石》コーラル・レイバスの仲立ちを得て和解した。

教皇アルノルド・ヴィオンと学園長クリス・ローゼンクロイツが
旧知の仲であったことも、和解を早めた理由の一つだろう。

「何故見習いである私たちが選ばれたのですか？」

今までの話では自分たちがアルノルドの護衛をする理由が分からない。
ない。

そのノルンの問いに答えたのはミシェルではなく、ラファエルだった。

「猊下にはご子息がいらつしやいます。魔を操る才を持ち、聖人の
力を秘める彼は、学園の生徒なのです。猊下とは長らく疎遠になっ
ていましたが、一度お会いしたいと言うのが猊下の御望みです。あ
なた方はご子息——マリウス様と年齢が近いですから」

アルノルドに子供がいるというのは初耳だ。しかし魔術の才と聖
人の力を持つているとなると本来なら、教戒に属しているはず。疎
遠になっていた、との一言にその全てが集約されているのかもしれ

ない。

「ご子息という一言を聞いて、ノルンの脳裏に浮かんだのは一人の少年。聖霊祭の時、会ったことなどないはずなのに既知感を抱いたのだ。」

ライトブラウンの髪に、深いエメラルドの瞳。整った、優しげな面差しをしていた。それに、ハロルドはこう言っていたはずだ。学園の生徒だと。そして何より、彼からは自分やハロルドと同じ力を感じた。

無論、それが“マリウス”であるかは分からないが、ノルンは確信に近いものを感じていた。

「引き受けてくださいますね？」

「それが猊下や枢機卿閣下、ミシエル様の御望みなら喜んで」

ノルンたちには断る理由もないし、断れるはずもない。微笑み、尋ねるミシエルにノルンとシグフェルズは頭を垂れた。

ハロルドたちと別れ、大聖堂を出たノルンは、隣を歩くシグフェルズを窺う。普段と変わらない。少なくとも表面上は。しばし思案した後、彼女は問い掛けた。

「ねえ、シグ。最近無理してない？」

ハロルドはああ言ったが、彼に直接聞かなければ納得出来なかったから。シグフェルズの精神世界で誓ったのだ。

彼を一人にしないと。それなのに何もできない自分がもどかしい。ノルンはシグフェルズの力になりたいのに。

「無理はしてないよ。少し疲れてはいるけどね」

無理をしてないかと問うノルンに、シグフェルズは微笑んだ。
疲れているとは言ったが、彼は講義をちゃんと受けているし、実
技だってそうだ。いつもと同じ。本当に？

「……そう。ならいいけど」

だがシグフェルズが語らないのなら、ノルンに出来ることはない。
ただ頷くことだけ。

この気持ちは何だろう。何かが噛み合わないのだ。ふと視線を下
に向けたノルンはシグフェルズの袖口で光るものを見つけた。

「それ……」

「うん。肌身離さず持っていたくて。欠けてるけど、これでいいん
だ」

シグフェルズがノルンの視界に入るように“それ”を見せた。細
い銀色の鎖が少年の白い手首にはえる。

それは自分たちが持つものより一回りは小さな十字架だった。た
だ欠けている。

表れた十字架にノルンは息を飲む。何故ならその十字架は彼の兄、
アルド・アーゼンハイトの持ち物だったから。

ノルンが見た時はくすみ、血がこびりついていたが、今は新品同
様に磨き上げられていた。

「忘れないように？」

こうしている今もアルドの魂は限界を迎えるかもしれない。そう

なれば彼をベリアルの手から取り戻すことは不可能だ。

シグフェルズが十字架を身につけるのは、それを忘れないためか。

「それもある。……ノルンと居ると忘れそうになるから」

「え？」

最後の方は聞き取れなかった。しかしシグフェルズは言う気がないようで、何も言わずに微笑んでいるだけ。

そう、シグフェルズにとってノルンと過ごす毎日は楽しかった。ひと時でも兄のことを忘れてしまうほどに。前のように差し違えてでも兄を解放しようとは思わない。

だがシグフェルズに掛けられた呪いは、間違いなく命を削るだろう。

シグフェルズとて死にたくない。ノルンと出会って生きたいと願えるようになった。

だが甘えては、忘れてはならない。自分には時間がないのだから。

無理は禁物

ノルンと別れたシグフェルズは自室に戻るわけでもなく、ハロルドの元へ向かった。見習いとは違い、司教には個室が用意されている。

異端審問官であり優秀な悪魔祓いでもあるハロルドの部屋は広い。ノックをしようと手を近づけた瞬間、部屋から聞こえた聞き慣れた声。

「開いてるよ、シグ」

どうやらノックなど必要ないらしい。そんなことをせずとも、ハロルドにはシグフェルズが来たことはお見通しなのだろう。

苦笑しつつもシグフェルズは失礼します、と言ってハロルドの部屋に足を踏み入れた。

彼の部屋は普段の人となりから考えると、驚くほどに片付いていた。いや、片付いていると言うより、無駄なものがないと言えればいいだろうか。

何の因果か彼の部屋はシグフェルズの自室と酷似していた。必要のない調度品は一切なく、寂しいと感じてしまうほどだ。

もつとも、ハロルドの場合はシェイアードに居る事が少ないこともある。あるいはこの間までのシグフェルズのようにいつ居なくなってもいいように、だ。

「ほら、そんなとこに突っ立ってないで座った座った。で、わざわざシグがオレを尋ねて来るって何かあるに決まってる」

椅子をすすめながら、唇を尖らせるハロルドを見て、シグフェルズは曖昧に笑った。彼は自分より四つも上だと言っのに時折見せる表情は少年のようだ。

「何かというか……先ほど、枢機卿閣下が仰った護衛の理由が少し腑に落ちなかったので」

「猊下は勿論、ミシエル様やラファエル様のお考えなんてオレには分かんないもーん」

「……ハロルドさん」

いくらアルノルドの息子と同年代だと言っても、自分達を護衛につける理由としてはどうだろう。ノルンも言っていたが、シグフェルズも疑問に感じていたのだ。

椅子に座ったまま足を組み、駄々っ子のように頭の後ろに両手を添えたハロルドはとても『神の友』、『光の監視者』と呼ばれる異端審問官とは思えない。

呆れたように名を呼ぶシグフェルズに悪いと思いながらも、ハロルドは知らないふりを続けた。

護衛にノルンとシグフェルズを付けたのはミシエルの考えである。彼が咎の烙印を受けたことはミシエルも知っていた。

気休めにしかならないかもしれない。

だが普段通りの生活をし、じっと考えるよりは何かやるべき事がある方がよい。心の整理をつけるためにも。

「ま、深く考えなくていいんでない？　まあ、それは置いて。背中の方は大丈夫？」

それをシグフェルズに言う必要はない。ハロルドはまあまあ、とシグフェルズを宥めてへらり、と笑ってみせた。

次にコホン、と咳払いをすると一転して表情と声音を変えた。そんな彼に驚きつつもシグフェルズは頷く。

「ええ。痛みは少しありますが、我慢できないほどではないですし」

咎の烙印へと変化した傷は今も熱を持ち、シグフェルズを苛んでいる。我慢できない痛みではないし、不便を感じることもない。

ただ体に少し力が入らないことくらいだろうか。

「ならいいけど、無理は禁物だよ。ノルンちゃんに気付かれなくなかったらね。心配してたよ、シグのこと」

ハロルドにシグフェルズのことを尋ねた時の彼女はどこか元気がなかった。思いつめているまでは行かないが、いつものノルンとは違った。

驚くべき変化と云っていいだろう。初めて会った時は自分の殻に閉じこもっていた彼女がだ。そしてそれはシグフェルズにもいえることである。

彼は社交的で人好きもするが、他人に対して見えない壁を作っていたふしがあった。ハロルドに対しても。

恐らくは無意識にだろうが、それ故に厄介なのだ。何せ自分では分からないのだから。そんな彼がノルンを気にしている。

「はい、すみません……」

「オレやミシエル様も探ってはいるけど、何せあのベリアルだからね。中々尻尾を出してくれないんだな、これが」

シグフェルズの呪いを解くには契約者である彼の兄が死ぬか、ベリアルを滅さなければならぬ。それとも一つ、悪魔に解かせればいいのだが、これは不可能に近いだろう。

シグフェルズの前に現われてから、ベリアルは現世に姿を現した痕跡がない。契約者の方も依然、行方は知れぬまま。

ハロルドもミシエルも手は尽くしているが、相手はあの大悪魔ベリアル。簡単に尻尾を掴ませてくれるとは思えない。

「……でしょうね。ベリアルは面白がっていましたから。僕が苦しむ所を見物でもするんでしょう」

悪趣味なことこの上ないが、ベリアルならやりかねない。兄と弟を敵対させ、更には死の呪いまで負わせた。

アルドが倒れ伏したシグフェルズを見て狂乱状態に陥った時だって嗤っていたではないか。

「悪趣味だねえ。オレには理解出来ないけど。それとシグ、具合が悪くなったら、隠さず言うこと」

こうやって釘を刺して置かなければ、この少年は絶対に無理をする。

それをここ数年の付き合いであるハロルドは嫌というほど思い知らされた。シグフェルズも分かっていたのだろう。苦笑し、観念したように頷いた。

そして、その日はやって来た。ノルンとシグフェルズ、ハロルドがアルノルドの護衛を任された日に。その間もシグフェルズはいつも通りで、ノルンもそれほど気にしなくなっていた。

ラケシスとクロトという友人が増えたこともあるだろう。あれから積極的に話し掛けるようになったラケシスと、彼女の保護者のような幼なじみのクロト。

彼女たちもノルンと同じように特殊な力を持っているという。ラケシスの死を見る魔眼は彼女一族が持つ力だということも教わった。

「留守番は任せてくださいね。ちゃんとお掃除して置きますから」

「三日くらいで帰ってくるから。掃除するほど汚くならないと思うけど」

何故かえっへんと胸を張るラケシスに、ノルンは静かに答える。

数日ほど前に色々あって、彼女とは同室になった。理由というのも元々、この部屋はノルン一人が使っていたのだ。

見習いである悪魔被いは男が多く、女は少ない。加えて悪魔被いへの道は険しく、志半ばで教戒を去る者が多いため、空室というのも珍しくないのだ。

「あ、なんならクロトにも手伝ってもらいますから、大丈夫ですよ」

「それだけは止めて。お願いだから」

シグフェルズもびつくりの速さで否定したノルンに、ラケシスは眼帯をしていない方の瞳をしばたかせ、首を傾げている。

クロトが嫌いな訳ではないが、ああいうタイプは色々であれなのだ。そうでなくてもあの少年、ラケシスのこととなると見境がなくなる。ラケシスの方はそんな幼なじみの過保護ぶりに気づいていないが、あれは相当だ。彼女らの生い立ちは知らないが、その辺りに事情があるのかもしれない。

「でも、学園に行くのにその格好でいいんです？」

「さあ？ ハロルドは何も言ってなかったし」

ノルンはいつもと変わらぬ黒い聖衣姿に、首からバクルスとなる銀の十字架アカデミーを下げている。

いくら教戒と学園の対立がなくなったとは言え、まずいのではないのか。ラケシスはそう言いたいのだろう。

ラケシスにはアルノルドの護衛ということは伏せて、特別授業で学園に行くだけ伝えてある。恐らくは他の見習いたちにもそう伝えられるだろう。

「じゃあ、行ってくるから」

「はい。行つてらっしゃい、ノルンさん」

笑顔で送り出してくれるラケシスを見て、帰りを待ってくれている人がいる、それがどれだけ有り難いか、しみじみと感じたノルンだった。

ラグナ・バーンスタイン

集合場所は正門前。ラケシスに後を頼んだノルンは正門へと向かった。多くのアルトナ教徒たちに混じって見えた琥珀色の髪。

まだ待ち合わせの時間より十五分ほど早いというのに、シグフェルズは律儀に待っていた。服装はノルンと同じ、黒い聖衣姿である。

「おはよう、ノルン」

「おはよう」

満面の笑みで挨拶するシグフェルズにノルンも笑みを返す。ややぎこちないものの、自分にしては上出来だろう。ハロルドとアルノルドはまだ来ていないらしい。

するとどこかで聞いた声に二人は振り返る。

「待たせたな、二人とも」

振り返った先に佇むのは二人の青年だった。声を発したのは黄金色の髪に月長石の耳飾りをつけた青年らしい。

歳の頃は二十歳前後か。街を歩けば誰もが振り返るほどの美貌の持ち主だったが、何故か周囲に埋没している。

日の光を浴びて輝く稲穂を思わせる黄金の髪に、左の瞳は光が射した湖底のような金緑。秀麗な顔の右半分を白いペルソナで隠しており、覗いているのは琥珀色の瞳だけだ。

「少し準備に手間取ってしまっただね」

そう言って微笑んだのはもう一人の青年である。

年齢は二十代半ばから後半ほどだろうが、彼が纏う雰囲気は妙に落ち着いていた。長い金茶色の髪を後ろで縛り、ノンフレームの眼鏡を掛けている。

宝石よりもずっと美しい翡翠色の瞳に優しげな美貌は見る者をはっとさせる力があるのではないか。

「げ……」

「ノルア様だ」

思わず彼の呼び名を呼ぼうとしたノルンは黄金色の髪的青年に遮られる。

普段の印象が強いためすぐに分からなかったが、彼は間違いなく教皇アルノルド・ヴィオンである。

「では貴方は……」

「この姿の時はラグナ、って呼んでね」

言いかけたシグフェルズに青年はそれまでの静かな雰囲気を一瞬で捨てて、気さくに答えた。二人の知る人物でこんな事をいう人間は一人しかいない。

「ハロルド」

「ハロルドさん」

「ご名答。でも今のオレはラグナね。そこんところしく」

ハロルド、もといラグナはしーと人差し指を唇に当てて微笑んだ。

彼こそ異端審問官にして悪魔祓いであるハロルドのもう一つの姿、ラグナ・バーンスタインである。

「でだ。二人にはこれに着替えてもらう」

再びラグナの仮面を纏ったハロルドはそう言っておもむろに何かを差し出した。

青と白を基調とした制服のような服である。中々に可愛いデザインだが、どこかで見たことがある気がするのは気のせいだろうか。

「これは？」

「学園の制服」

ノルンが尋ねれば、直ぐに答えが返って来た。確かに自分達が同行するのは学園で、今は学園祭の最中である。それは分かるが、何故制服に着替えなければならぬのか。

聖衣は確かに目立つが、ノルンは学園の生徒でもなんでもない。

「私は学園長であるクリスと友人でね、この事を話したら送ってくれたんだよ」

「はあ……」

「着替えなければなりませんか？」

ノルンは学園長クリス・ローゼンクロイツの人柄は知らないが、制服を送ってくる辺り、意外にお茶目なのかもしれない。ニコニコと笑うアルノルド——もといノルア。これでは非常に断わりづらい。シグフェルズが勇気を振り絞って尋ねるが、返って来たのはノル

アとラグナの満面の笑みだった。

二人は顔を見合わせ、どちらからともなく苦笑した。

自分達はしがない悪魔被い見習い。教皇アルノルド・ヴィオンと異端審問官ハロルド・ファースに従うしかないのだから。

用意された制服に着替えながら、シグフェルズは数日前の出来事を思い出していた。ラケシスが尋ねて来た日のことである。部屋に入り、二人となった瞬間に彼女は言った。

「シグフェルズさん、貴方から死の影が消えませんか。……どういうことですか？」

口調も声音もいつものラケシスと変わらない。
だがそこには有無を言わさぬ響きがあった。

ノルンから聞いたのだが、彼女は死を視る魔眼を持っているらしい。ラケシスが気付くのも何らかしくはない。

ごまかすことは出来ないだろう。何せ彼女の目が自分を追う鍵になったのだから。だから全てを話した。死の呪いを受けていることを。

「そんな……そんなことが。ノルンさんはこのことを？」

語り終えたシグフェルズを見て、ラケシスは搾り出すように言っ
た。彼女はかなりショックを受けたらしい。顔は真っ青で、トパーズを思わせる瞳を大きく見開いている。

「知らないんだ。知ってるのはハロルドさんや猊下くらいだから」

「……それでいいんですか？」

ラケシスはシグフェルズを責めることはしない。ただ確認するよう
うに問いかけるだけ。

彼女の問いにシグフェルズは無言で頷いた。

迷いが無いと言ったら嘘になる。だが決めたのだ。もう後戻りは
出来ない、したくない。そうすることで死の恐怖を抑えられるから。

制服を着たのは生まれて初めてだ。何せ、それまでは王国の片隅で家族と一緒に暮らしていたのだから。学校と言えば日曜教戒だし、と言っても制服とは無縁である。

ノルンはシャツに腕を通し、鮮やかな赤のスカートをはく。足がいつも以上にすうすうして落ち着かなかった。

赤のネクタイを四苦八苦しながら結んで、シャツの上に白いブレザーを羽織る。仕上げに左腕に学園の紋様が入った腕章を取り付けた。

髪は邪魔になるため、頭の上の方で縛る。流石に十字架はポケットの中にしまっておいた。

「似合うじゃん、ノルンちゃん」

「ええ、どこからどう見ても学園の生徒ですね」

ひゅう、と口笛を鳴らしたラグナはすっかりハロルドの口調に戻っている。

ノルアの方はにこにこ笑って当たり前のことを言っていた。学園の制服を着て生徒に見えない方がおかしいだろう。

「ラグナ、口調戻ってる」

「おっと。そうだった」

ノルンの指摘にラグナは口を押さえて声色を変えた。普段の彼より低く、落ち着きのある声だ。つくづく器用だと感心してしまう。こうして見てもまるで別人だからだ。

そこへ同じように制服に着替えたシグフェルズがやってくる。彼の方は少しだけノルンとはデザインが違うらしい。ノルンのようなネクタイではなく緑のリボンタイで腕章の色も違う。

「すみません、お待たせしました。よく似合ってるよ、ノルン」

「……ありがとう」

につこりと微笑むシグフェルズにノルンは返答に困ったが、素直に礼を言う。

こういう恥ずかしい台詞を素面で言うのは純粹に凄いと思う。しかも本人は自覚がないと来た。それ以上、どう返していいかわからず咳払いをする。

「それより、私とシグのデザインが違うようだけど？」

「それは君の方が戦闘技術科、シグの方は魔法医療科の制服だからな」

ラグナがそう教えてくれるが、聞き慣れぬ単語にノルンは思わず顔をしかめた。戦闘技術科と魔法医療科？

必要以上のことは覚ええないノルンは、その辺りのことに疎いためさっぱり分らない。

「対悪魔に特化した教戒とは違い、学園にはね、三つの専門課程があるんだ。闇に侵された魔精や魔物との戦闘や対魔導犯罪について学ぶ戦闘技術科、魔具職人を目指す者たちの錬金科、そして魔法薬

や治癒魔術を専門に学ぶ魔法医療科」

怪訝そうな顔をするノルンのためにわざわざノルアが説明してくれた。

教戒の魔導師が悪魔を祓うことに特化しているが、学園の魔導師には多くの選択肢がある。

近年、黄金の暁や逆十字という犯罪組織が増えており、魔術犯罪も増加している。学園には三つの専門課程があり、魔術犯罪に対抗する術や魔精、魔物について専門的に学ぶのが戦闘技術科。

魔具職人を目指すものが属する錬金科、魔法医療師を目指す者は魔法医療科を選択するのだ。

王都アージエンスタイン

「魔導師を育成するっていう共通の目的があったからね、学園と教戒の仲はよくなかった。クリスというよりは歴代の教皇が、ただれども」

この世界で魔導師を育成する機関はたった二つ。教戒と、そして学園だけだ。悪魔を抜うことに特化しているとは言え、悪魔抜いの殆どは魔導の才を持っている。

学園と教戒の仲が悪かったのは、歴代の教皇たちが学園を認めなかったことが原因だ。クリスの方にそのつもりがなくても、拒否されればどうしようもない。

「ではそのクリス様というのは……」

「うん。学園の創設者だ。彼がどれくらい生きているのか、私も知らない」

学園の創設者がクリス・ローゼンクロイツであることはシグフェルズも知っているが、クリスの名は学園長が代々受け継ぐ名前だろうとしか認識していなかった。

しかしノルアは彼こそが学園の創設者だという。当代最強の魔導師と謳われるクリス・ローゼンクロイツ。ノルアとは親友であるらしいのだが、そのノルアさえ、クリスが何歳かノルアさえ知らないらしい。

堅苦しいイメージだが、制服を送ってくる限り、やはりおちゃめな人物なのだろうか。

「では、そろそろ参りましょう。ノルア様」

「そうだね、じゃあ行こうか、二人とも」

ラグナの言葉にノルアは頷き、ノルンとシグフェルズの方を振り返る。二人もラグナたちの後を追って歩き出した。

シェイアードの街を離れてどこかに向かうのは何年ぶりだろう。自分がここに連れてこられた五年以来かもしれない。ノルンたちは今、王国の主要都市を結ぶ列車の中にいた。

詳しい原理は知らないが、魔導師でなくとも扱える雷系の魔具――ファクター・デバイスを動力としているらしい。座席は個室で区切られているため、騒がしいということもなかった。

ノルンの隣にはシグフェルズが、向かい合う形でノルアとラグナが座っている。

窓を開ければ少し冷たい秋の風がノルンの頬を撫でた。

「猊……いえ、ノルア様。一つお聞きしてもよろしいですか？」

ずっと気になっていたこと。それを尋ねることはノルンでも少し躊躇われたが、学園に向かう前に聞きたかったのだ。ミシエルが言っていた彼の息子。その話を聞いた時、ノルンの脳裏に浮かんだのは一人の少年だった。

「何かな？」

「ご息子というのは聖霊祭で大聖堂にいたお方ではありませんか。明るい茶の髪にエメラルドの瞳をした。ねえ、ラグナ？」

聖霊祭の時、大聖堂の前にいた五人組。その内の一人にノルンは何かを感じた。

恐らくは自分達と同年代の少年。明るい茶の髪にエメラルドの瞳、整っているが優しげな顔立ちをした彼に感じた既知感。

彼が自分やラグナと同じ、聖人の力を秘めていることもノルンが気になった一因でもあるが、何よりも彼がまとう雰囲気は『アルノルド』を彷彿とさせたのだ。

「君の言う通り、名はマリウス。今はラーグ姓を名乗っているように、ただ、治癒魔術の才があり、聖人の資質を秘めている」

息子について語るノルアはどこか痛みに耐えるような、悲しげで苦しい表情をしていた。聖人の力を覚醒させた者は相当の理由がない限り、教戒の保護下に置かれる。彼の力はまだ覚醒していないようだ……。

彼の息子であり、聖人の力を持つマリウスが学園を選んだ訳。

ノルンはそれを聞きたい衝動にかられるが、すんでのところを押し込める。ノルアの方も彼女が聞きたいことに気付いたらしい。翡翠色の瞳を窓の外に向け、ぽつぽつと語り始めた。

「私がまだ一介の悪魔祓いでしかなかった時、妻は息子を庇って悪魔に殺され、あの子も昏睡状態に陥った。あの子は母のためにも魔法医療師になることを望み、私は反対した。あの子には魔術に関わらず、普通に生きて欲しかったから」

もう十年も前になる。ただの悪魔祓いでしかなかったノルアは妻を失い、息子まで失う恐怖に晒された。

妻に命を救われた息子は魔法医療師になることを望み、ノルアは反対した。ノルアは魔法医療師を目指さず、普通に生きて欲しかったのだ。それが自分の我が儘だと気付きながらも。

「そんな私に反発して、あの子は家を出て学園に入学した。もう三年近く会っていなかったよ。あの子が選んだ道だから認めて、支えてあげるべきなのに。妻のように失うのが怖かった」

あの子はもう十六歳。謁見の間で見た彼はもうノルアの知る息子ではなかった。たかが三年、されど三年。二人の間に三年の時は長すぎた。

親友のクリスがいる学園だからこそ、あえて何もしなかったが、心のどこかで恐れていたのかもしれない。息子と向き合うことが。自分は教皇アルノルド・ヴィオンの前に一人の父親だというのに。

ノルアは自嘲気味に笑い、再び窓の外に視線を向けた。

ある意味、それは当然だったのかもしれない。教戒に属する者の殆どは家族や友人、あるいは自分が悪魔と関わっている。

ノルンは家族を襲われ、シグフェルズは悪魔に兄の魂を奪われた。ハロルドもまた悪魔に襲われている。アルノルドだけが例外のほずはない。

むしろ、そんな事情があったからこそ、彼はその若さで教皇という位までのぼりつめたのだろう。

「……申し訳ありません」

ノルンは謝らずにはいらなかった。

しかしノルアは謝る彼女に首を横に振り、柔らかに微笑む。

「謝るのは私の方だ。こんな話、面白くもなんとも無かったね」

「でも、ハロ……じゃなくてラグナさんはどうしてその格好を？」

少し重くなった空気をどうにかしようとシグフェルズが口を開く。
何故ハロルドではなく、ラグナなのか。

ラグナも彼の意図を察したのだろう、その話に乗った。

「ラグナの方が色々動きやすいからな。悪魔被いにして異端審問官ハロルド・ファースより」

「ハロルドは確か最年少の異端審問官、だったっけ？」

窓枠に左腕を乗せながらラグナは言う。顔の半分を白い仮面で覆っており、目立ちそうなもののだが、ここでも彼に注意を向けた者はいなかった。ノルアの方もそうだが、何か特殊な魔術でも使っているのかもしれない。

視線を未だ外に向けたまま、ノルンは言う。

優秀な悪魔被いにして最年少の異端審問官の名は知られすぎている。例え、ハロルドの容姿が知られていないとしても。ラグナの方が色々動きやすいらしい。

「俺の才能故ってことだ」

「本来ならラグナ、いやハロルドは私に関わりすぎてはいけないんだ。建前上は教戒に属しているものの、異端審問官は独立した存在だから」

それは教皇と言えど例外ではない。異端を審問する彼らは教戒から独立した存在として扱われ、特別な権限を与えられている。

「でもその仮面何？ 変なんだけど」

唐突にラグナの顔を指差してはつきりと言うノルンに、シグフェルズとノルアは呆然とするしかない。

ラグナの顔の半分を覆っているのは白い仮面だ。一昔前の貴族の夜会で使われそうな仮面で、瞳の部分だけが空いており、精緻な細工が施されている。

別に顔の半分に傷があるとか火傷がある訳でもないのに、奇妙な仮面をつける必要があるのだろうか。

「これを付けていると人の視線はまず仮面に行くからな。後から思いつくとしても顔の印象が残らない」

「なるほど。そういう理由ですか」

ノルンの遠慮のない一言にラグナが気を悪くした様子はない。白いペルソナに手を当て、不敵に微笑む。

ラグナが仮面をつけているのは注意を顔ではなく、仮面に向けさせるため。つまりは白い仮面をつけた人、という印象が強すぎて顔までは思い出せない、と言う事だろう。

「もしかして、あれが王都アージェンスタイン？」

「そう。白の都とも言われる、な」

窓から見たのは白い王城を囲むようにして広がる町並み。

ラグナの言う通り、城を除いた全ての建造物の色は白である。屋根でさえもだ。その中でやはり真っ先に目に入っただのはシェイアードの大聖堂に勝るとも劣らない王城だった。

贅の限りを尽くされたと言っても過言ではない。白塗りの城壁は魔術文字が刻まれており、生半可な魔術では壊せないようになっている。壁は全て大理石で作られているのだろう。陽光を受けて象徴色に輝いていた。

構造自体はシェイアードによく似ている。ただ丘の上に作られているわけではないため、シェイアードよりも少し低くはなっているが。

黒い感情

「嬉しそうだな、ラケシス」

普段より若干柔らかな表情でクロトは言った。話しかけられたラケシスは鼻歌を歌いそうなくらいご機嫌である。今は自習であるため、教室は静けさに包まれていた。とは言っても皆、黙っているわけではなく、小声で話しているのだ。

秋の試験は迫っているのだが、それで落ちることはほとんどない。教戒を去る殆どの者は自らの力の限界を感じ、或いは悪魔と戦う恐怖から教戒を出て行くのだ。

悪魔と命のやり取りをするのは想像以上に精神を磨耗させる。そこにあるのはただ一つの事実のみ。弱ければ死ぬだけだ。

「そんなことないよ」

「いや、そんなことある。アルレーゼと同室になれたのがそんなに嬉しいか？」

ラケシスは昨日付けでノルンと同室になった。悪魔被いを志す者の中でも女性が少ない。それに加え、彼女はラケシスが憧れている人物だ。はしゃぐなど言う方が無理だろう。

クロトもそれは分かっている。分かっているが、言わずにはいられなかったのだ。気の知れた幼馴染であるはずなのに、ラケシスは何故かクロトに遠慮をする。

理由を聞いても答えてくれない。クロトはこの何ともいえないこの距離感を持て余していた。

「……わたしが言わなくてもクロトには“分かる”んでしょ」

「わざわざ読む気はないさ」

唇を尖らせて言うラケシスに、クロトは右耳につけている菱形をした耳飾に触れた。彼の瞳と同じ、緑柱石が嵌めこまれたそれは、クロトの持つ力を抑える魔具である。

ラケシスが死を視る魔眼を持つように、クロトもまた特殊な力を有している。

読心術とは少し違うが、クロトは意識していなければ、この場にいる全ての人間の心が読めてしまう。意識を意図的に遮断することと、力を抑える魔具によって制御しているが、それでも暴走する危険がないとは言えない。

「ごめんなさい。そんなつもりじゃ……」

「いいから謝るな」

ラケシスもクロトが力を嫌っていることは知っている。余計なことを言ったと気付いたのだろう。

俯き、トパーズを思わせる瞳を伏せる。謝るな、そう言ったクロトの声にはやや苛立ちが混じっていた。

謝って欲しいわけじゃない。どうして遠慮するのだろう。何故、距離を取ろうとするのだろう。ラケシスの考えが分からない。

幼馴染に気付かれないようため息をつき、クロトは広げていた聖典に目を落とした。

ノルンにとって目に映るものが全てが新鮮だった。些か不謹慎だし、はしゃいでいる暇はないのは分かっている。だが目を向けずにはられないのだ。

アージエンスタインの町並みは、どこか厳粛で神聖な印象を与えるシェイアードの町並みとは百八十度違う。鮮やかで生き生きしているのだ。まるで街自体が生きているように。

うずうずしたように街を歩くノルンをシグフェルズは微笑ましげに見つめていた。

普段は大人びていても、やはり十六歳の少女なのだ。彼女のそばにはさりげなくノルアがついているため、変な輩が近付いてくることはない。

「何だかんだ言っても楽しそうだな」

「ええ。自分から口に出すことはないでしょうが」

ラグナの仮面を被ったまま、微笑するハロルドの隣でシグフェルズは柔らかに微笑んだ。彼女は他人に壁を作る割に酷く無防備なところがある。

きらきらと輝く紫掛かった銀色の髪、宝石のような瑠璃色の瞳。すらりと伸びた手足に陶磁器のように滑らかな白い肌。文句の付け所がない顔立ちはまだで、名のある芸術家によって作られた女神像のように美しい。

ノルンは自分の容姿がどれほど人目を引くかすら分かっていないのだ。すれ違う人間がどこか熱を持った視線で見ていることにも気付いてないのだろう。

自らの内からはい上がって来たどす黒い感情に気付き、シグフェルズは体を強張らせた。それは今まで抱いたことのない暗く、澱んだ感情。

自分は今、何を考えていた？

いずれ来る未来、彼女の隣に立てる存在を妬ましいと思った。烙印がある限り、自分は長く生きられない。出来るなら、彼女を誰の目にも触れさせず、閉じ込めてしまいたいと思ったのだ。

そんな自分が急に恐ろしくなった。自分が自分でなくなる感覚。まるでシグフェルズ・アーゼンハイトという存在が黒く塗り潰されて行くような、何ともいい表せない嫌悪感、気持ち悪さといえればいいだろうか。

「シグ？」

長年の付き合いが、ラグナはいち早くシグフェルズの異変に気付いて声を掛ける。

まるで熱に浮かされたような、それでいて体の芯を凍り付かせるような何かが少年の顔にはあった。

「……すみません、何でもありませんから」

軽く目眩がした。左手で頭を押さえ、ラグナに心配をかけないように何でもないと笑って見せる。兄のような存在である彼には、強がりだと見抜かれているだろう。

しかし今のシグフェルズには分かっている、その仮面を被り続けることしか出来なかった。

《学園》は王都アージェンスタインの郊外に位置しており、流石に教戒ほどではないにせよ、広大な敷地面積を有している。

学園を守るように広がる森は妖精の森と呼ばれ、森自体が結界の役割を果たしているらしく、魔力を持たない者はこの森を抜けることが出来ないらしい。今日は《学園祭》のため、結界は解かれているようだ。

「凄い人ですね……」

「学園祭は元々、一般の人々に魔導師へ理解を得るために催されたものだから」

予想以上の人の波に驚くシグフェルズとそれに頷くノルンにラグナが解説してくれる。

学園祭は元々、魔導師について理解を深めてもらうと同時に、一般の人々との交流を目的として行われるものだ。

聖人であり、魔導の才を持つノルンにも痛いほど理解出来た。人は自分ない力を恐れ、拒絶する。自分達は一つ間違えば異端者なのだ。

正門から一步入れば様々な露店が並び、年代、性別もばらばらな人々が行き交っている。露店には生徒たちの手によって作らせたアクセサリーや菓子類が並んでいた。

遊びに来たわけではないと思いつつも、つい視線が向いてしまう。ノルンはどうにか気を逸らせようと前を歩くラグナに声を掛けた。

「行き先は？」

「1 - A 教室だ」

ラグナの話によると、『マリウス』は魔法医療科専攻一年、つまりノルンやシグフェルズの一つ下らしい。それにしてもさっきからやけに変わった服装の生徒たちが目に入る。

着ぐるみや騎士のような装束、エプロンドレスにヘッドドレス――所謂メイド服に執事のような服を着ている生徒と実にバリエーション豊かだ。

一年の教室は一階にあるらしく、校舎に入ってすぐに見つけることが出来た。1 - A はどうやら喫茶店らしい。

混時間帯が過ぎたせいか、客足はまばらであるが、ノルンたちには都合がいい。

ラグナとノルアに続いて教室に足を踏み入れた。

「いらっしやいませ。何名様でしょうか？」

出迎えたのはエプロンドレスにヘッドドレスを付けた女生徒であ

る。

淡い金色の髪を頭の上で纏めており、磨き上げられたガーネットを思わせる美しい瞳をしていた。顔立ちもかなり整っており、その笑顔と相まって思わず見とれてしまいそうだ。

「アリアちゃん!？」

「ハ、ラグナさん!」

驚いたのはラグナだけではない。彼の顔を見た彼女もかなり驚いてた。

どうやら彼女、アリアと言らしい。ノルンにも見覚えがある。シェイアードで見かけた少年少女の中にいた少女だ。

どちらが欠けても

「きょ……」

「ノルア様だ」

少女の視線はラグナに向き、ノルン、シグフェルズと移った後、ノルアに向いた。彼女の石榴色の瞳が驚愕に見開かれる。

どうやら彼女、ノルアがアルノルドだと気付いたらしい。

だが少女が名を呼ぶ前にラグナが声を重ねたため、かき消された形になる。教室に人はまばらだが、流石に教皇、などと言われるのは不味い。

ノルアが頭を下げると、彼女もそれに倣う。

「……あの、もしかしてマリウスの……」

「父です。この姿では初めまして」

「あ、はい、どうも。クラスメイトのアリア・ハイウェルです。あの後ろの方たちは……？」

にこやかに挨拶するノルアに戸惑いながらも、彼女ももう一度頭を下げ、丁寧に自己紹介をする。少女は自らをアリア・ハイウェルと名乗った。アリアと名乗った少女の視線がノルンとシグフェルズに向く。訝しげに思っているようではなく、ただ純粋に気になっただけらしい。

そしてこちらにもラグナがノルンとシグフェルズを紹介する。

「こっちがシグフェルズ・アーゼンハイト、オレの弟分。んで彼女

はノルン・アルレーゼ。アリアちゃんと同じく悪魔被いの卵たちだよ。一応、ナイショにしといてね」

自分たちを悪魔被いの卵と紹介していることから、このアリアという少女は多少事情を知っているようだ。軽くシグフェルズが頭を下げる。

ノルンの方も紹介された以上、無視する訳にも行かず軽く頭を下げた。アリアも同じように頭を下げると、慌てて自分達を案内した。

「どうぞ、こちらへ。あの、ラグナさんは座らないんですか？」

ノルンとシグフェルズは向かい合わせに座り、ノルアは自分たちの隣のテーブル席に座った。ラグナはノルアの後ろに佇み、座る気配はない。

注文を取ろうとしたアリアが躊躇いがちに尋ねる。ノルアの後ろに佇むラグナは先程のようにやや軽い雰囲気を書わせた『ハロルド』ではなく、『ラグナ』の顔だった。

「ラグナは気にしないでいいから。それよりアイステイとアイスコーヒー頼める？」

「あ、はい。畏まりました」

ノルンは頬杖を付きながら気にするなと手を振ってみせる。アリアは頷くと、律儀にも礼をして教室の奥へと去って行った。

彼女が部屋の奥に消えたのと同時に、誰が入って来る。

絹のように滑らかなライトブラウンの髪、緑の瞳はまるでエメラルドのよう。

優しいな美貌を持つ少年だった。彼もまた同じように召し使いを思わせる服を身に付けていた。

入ってきた少年の視線はノルアただ一人に向いている。そしてノルアもまた少年だけを見つめていた。彼のエメラルドの瞳とノルアの翡翠色の瞳がかち合う。

こうして見れば髪の色こそ違うものの、二人はよく似ていた。

「とう……さん？」

「マリウス……」

ノルアは躊躇いがちに息子の名を呼ぶ。マリウスの方は何と答えていいのか未だ迷っているようだ。ラグナが彼に席をすすめ、向かい合わせに座る形になる。

二人がおずおずと話し始めたところで、ノルンは彼等から視線を逸らした。

親子の会話を聞くほど無粋ではないし、ノルアだって望まないだろう。ノルンがシグフェルズと視線を交わしたところで、アリアがやって来た。

「お待ちせしました。アイスティーとアイスコーヒーです」

笑みを浮かべ、グラスを置いてくれる彼女にシグフェルズは柔らかに微笑んで礼を言う。ノルンも軽く会釈をした。

グラスに手を伸ばしたノルンは、彼女がこちらを窺うように見ていることに気付く。

「あの、もしよければ少しお話してもいいですか？」

トレイを両手で抱えたまま、アリアは遠慮がちに尋ねて来る。ノルンは彼女が嫌いではなかった。むしろ好きに分類されるだろう。

理由なんて分からない。けれど、どこか放って置けない少女だと思う。

「よろこんで。ね、ノルン」

「私たちでよければ」

シグフェルズがこちらを見てふわりと笑う。それにつられてノルンも少しだけ顔を綻ばせた。

思ってみればノルンは同年代の少年少女たちと会話を交わしたことが殆どない。

いつだって一人で行動していたし、思い当たるのはシグやラケシス、そしてクロト、後はハロルドしかない。ハロルドは同年代と言うには少し歳が離れているが。

「よかった。あの、アルレーゼさんとアーゼンハイトさんは私より一つ上なんですよね？」

「そうだよ。僕が十七でノルンが十六」

「名字で呼ばなくても、名前で呼んで。言いづらいと思うから。あ、シグはシグでいいから。長いし」

アルレーゼとアーゼンハイトと言うのはよそよそしい上に長い。それならノルンとシグと呼んでくれた方がいい。

誤解のないように言って置くが、アリアはさぼっている訳ではない。混む時間帯が過ぎたせいか教室内には殆ど客がいないのだ。

接客を担当している生徒はアリアだけではないし、他の生徒だって暇を持て余しているらしい。

ノルンが名前で呼んで、と言えばアリアは驚いたような顔になり、

はいと笑顔で頷いた。

「じゃあ……アリアさんの専攻は？」

こういう時はシグフェルズがいてくれてありがたいと思う。

ノルンは正直、人と話すのは得意ではないし、むしろ苦手である。学園の生徒たちはどうやら、腕に付けた腕章に引かれたラインで学年と専攻を分けているらしい。流石にアリアは付けていないが、すれ違った制服姿の生徒たちは皆つけていた気がする。

「私、こう見えても戦闘技術科専攻なんですよ」

「まあ、魔力だけならこの教室にいる生徒たちの中でも一番ね。次はあのマリウスって子」

アリアが戦闘技術科というのは何も驚くことではない。グラスについた水滴をなぞりながらノルンは教室内を見回した。

この教室、というのは接客ではなく調理の生徒たちも入っている。実際、アリアが持つ魔力はそこらへんの魔導師とは段違いだ。恐らくは耳につけたガーネットのピアスで魔力を意図的に抑えているのだろう。

マリウスもそうだが、他の生徒たちとそもそもレベルが違う。魔力や魔導の才は遺伝しないとされているが、その点ではアルノルドの息子たるマリウスは恐ろしい。

父同様、聖人の力を持ち、魔導の才、そして強大な魔力さえその身に秘めているのだから。

「僕は魔力がないから、その辺は全然分らないんだけどね」

シグフェルズはノルンの言葉にもイマイチぴんと来なかった。魔力を持たない彼には魔力を持つ者の凄さが分らない。

さらりと言ったつもりだったのだが、アリアが酷く驚いた顔でシグフェルズを見ている。

「じゃあ、シグフェルズさんって凄いですね」

「そんなことないと思うけど」

「シグは自分の凄さについて全く自覚ないから」

そんなことないと、本当に不思議そうな顔をするシグフェルズ。ノルンはもう呆れてものも言えなかった。悪魔扱いにはバクルスの適性さえあれば、なれる。

だが実際、シグフェルズのように魔力を持たない者が悪魔扱いとなることは珍しい。いくらバクルスの適性があっても、魔術が扱える方がやはり有利だからだ。

そしてそれは悪魔と相対しても、生存率を上げることに繋がる。

「精霊因子を視ることが出来るだけ、まだありがたいから」

「ある意味では魔導師よりも貴重ですよね？」

殆どの場合、魔導の才を持つ者は世界を構成する精霊因子を認識でき、魔力を持つ。

しかし稀にどちらか片方の能力だけを持って生まれてくる者がいる。それがシグフェルズだ。

数だけで言えば魔導師よりずっと少ないだろう。精霊因子を視る才、そして魔力。どちらが欠けても魔術を操ることは出来ない。

空っぽの自分

教皇アルノルド・ヴィオン。全ての聖職者、そしてアルトナ教徒から敬われる神の使い、聖人。そんな肩書きより、今の彼には父親であることの方がよく似合っている。

あるいは彼が望んだのは酷くちっぽけで当たり前のことだったのかもしれない。ただ一人の息子の父親でありたいと。そう望む事は決して間違っていない。

なのに彼の立場がそうさせてはくれなかった。

「お前はお前の信じた道を行きなさい。私は……応援しているよ」

そう言った彼は教皇アルノルドではない。マリウスにとってのただ一人の父親だった。

信じた道、息子に向けられた言葉はノルンの元にも届いた。自分の信じた道。ノルンにはそれが無い。シグフェルズのように兄を悪魔から解放するという目的もない。空っぽだ。

信じた道などない。何が聖人か。空虚を抱える自分が。

酷く虚しくなった。周りの声も聞こえていない。だからノルンはシグフェルズが心配そうに自分を見つめていたことにも気付かなかった。

「初めて見る顔だけど君は？ 名前を覚えてくれないかな？」

はた、と気付けば誰かが自分の手を取って微笑んでいた。非の付け所がないほど美しい顔立ちをした少年だ。鮮やかな朱色の髪に美しい空色の瞳。

デザインは少し違うが、この教室にいるような男子生徒と同じ、純白のシャツに黒のウェストコートとスラックスという出で立ちで

ある。

華やかな美貌に爽やかな笑みが加われば、普通の人間なら赤面しそうなくらい破壊力があつた。が、それは一般人の基準だ。ノルンはどうも思わない。むしろ軽々しく他人の手を取るような人間は嫌いだ。

振り払おうにも結構な力で掴まれているため、それも叶わない。ため息をついたノルンは仕方なく自らの名を口にした。

「ノルン・アルレーゼ。人に名前を聞くならまず自分から名乗るのが筋じゃない？」

「それは失礼、美しい方。レヴィウス・フォン・セレストインと申します」

おどけたように肩を竦める少年が口にした名にノルンは、言葉を返せずにいた。常識に疎いノルンでも知っている。

この国でミドルネームを持つのは四大公爵家の人間のみ。

それにセレストイン家というのは大貴族にして四大公爵家の一つ。その血脈は王家にも連なるとされている大貴族である。

とその時、困惑するノルンに代わり、伸びて来た手が容赦なく少年の手を掴みあげた。

「はいはい。分かったから、手は離そうな。ごめんね。君だけにじやなくて誰にでもこうだから許してやって」

顔を上げた先には一人の少年の姿があつた。レヴィウスとはまた違った意味で目を引く容姿をしている。

髪は絹のように滑らかな青灰色で、長い睫毛に縁取られた瞳は星を散らした銀。すらりと伸びた肢体に、顔立ち是非の打ち所などど

ここにもない。正に黄金率だ。

レヴィウスと同じく、シャツにウェストコート、ジャケットを羽織っている。

少年を見たアリアが顔を輝かせた。

「シェイト先輩」

「さっきぶり、アリア」

どうやら彼はシェイト、と言うらしい。

アリアの方を向いた少年はにこりと微笑んだ。痛い、痛いってのと手を掴まれたレヴィウスが叫んでいるが、彼が気にした様子はない。

「別に気にしていないから」

気にはしていないが、ノルンはちらりとシグフェルズの様子を窺った。

しかし彼は憎らしいくらいいつも通りだ。どうせ、レヴィウスに手を掴まれたのだって何とも思っていないに決まっている。

そう決めつけて無理矢理視線を逸らした。その僅か数秒後、シグフェルズが複雑な表情で自分を見ていたことをノルンは知らない。

「分かったから離せ、シェイト、いや、離して下さい、シェイトさん！」

三度目の懇願に近い“お願い”でシェイトはやっとレヴィウスの手を離れた。

悶絶し、うつすらと赤くなっている手を摩っていた彼は、黄金色の青年を見てあつ、と声を上げる。

「あの兄ちゃん……」

レヴィウスはアルノルド親子の背後に佇むラグナの元に歩み寄ると、腕を彼の首に回して引き寄せる。突然の行動にノルンは、呆然とレヴィウスを見ていることしか出来なかった。

だがそれはシグフェルズだって同じだし、アリアとシェイトも同様のようだ。

「お久しぶり、お兄サン」

「どこかでお会いしました？」

艶やかな笑みを浮かべるレヴィウスに対し、ラグナは不思議そうに首を傾げている。流石にボロは出さないし、ハロルドとは似ても似つかない。

しかし、それ以降の会話はノルンたちの距離からでは聞き取れなかった。

「俺をなめないでよね、お兄さん。いいや、ハロルド・ファース」

彼も随分な食わせ者だ。さらに顔を近付けた少年は、耳元でそう囁いた。

レヴィウスは自分の正体に気付いている。ラグナは被っていた仮面を脱ぎ捨て、降参を表すように両手を上げた。

「……分かったよ。お兄さんの負け、降参。そんな怖い顔しなくてもいいじゃん、レヴィ君。オレとレヴィ君の仲っしょ？」

ノルアはしばらく、マリウスと共にいるらしい。久方ぶりの親子の再会だから当たり前かもしれないが、ラグナはそんな二人についている。

何故、レヴィウスと親しげに話していたかは後でしっかり聞かねばならないだろう。

ノルンとシグフェルズとは言えば、学園内を見て回っていた。一応、護衛という名目であるため、ラグナに抗議したのだが聞き入れられなかったのだ。

こっちはいいから、滅多にないんだ。学園祭、楽しんでこい、と恐らくは始めからそのつもりだったのだろう。ノルンにもそれくらい分かる。

「私たちを連れて来たのも、始めからこうするつもりだったから、か」

「確かに僕たちが護衛出来るとは思えないよね。猊下自身は当代最強と謳われる悪魔扱い、ラグナさんは希代の異端審問官だし」

「こつた返す学園内を、ノルンはため息混じりに、シグフェルズは

苦笑して歩いていた。おかしいと思っていたのだ。いくらお忍びとは言え、護衛に見習いの悪魔祓いを付けるとは。

そもそもアルノルドは、天使すら召喚したとされるほどの召喚魔術の達人だし、《学園》の学園長、クリス・ローゼンクロイツと並び、当代最強の悪魔祓いと謳われている。

対してハロルドもノルンと同じく聖人であり、優秀な異端審問官、そして悪魔祓いだ。護衛だけなら彼だけで十分なはずである。

「……まったく、人が悪い」

「きつと気を遣ってくれたんだね」

シグフェルズが受けた呪いは変わらず彼を蝕んでいる。聖人の奇跡でも浄化出来ない死の呪い。いつか吞まれてしまうかもしれない。シグフェルズは常にそんな恐怖に苛まれていた。

ラグナとアルノルドはそれを知っていたから、シグフェルズをシエアードの外に連れ出した。

今でも怖い。怖くてたまらない。こうやって笑っていても握った手は震えていた。

それでも、それを表に出してはならない。ノルンに悟られてはならないから。

「ラグナさんもああ言ってくれたことだし、楽しもう。行こっか、ノルン」

はいはい、と答えるノルンの手をシグフェルズは握りしめた。あたたかくて柔らかい。

けれど、バクルスの修練によるものなのか彼女の手の平には治りきっていない傷がいくつもあある。

「シ、シグ！ 手！」

たまには慌てている彼女を見るのも悪くない。ノルンの手をしっかりと握ったまま、シグフェルズは淡く微笑んだ。

二人の秘密

シグフェルズの様子がどこかおかしいことにノルンも気付いていた。

どこかどうとは言えないが、とにかくおかしいのだ。まだ彼と出会って二ヶ月ほどだが、それでも分かる。

けどシグフェルズが何も言わないなら、ノルンに出来ることはない。所詮、他人なのだ。人の心に立ち入るほど、ノルンは無粋ではないし、何より怖い。

教戒に連れて来られてから五年近く、ノルンは人との接触を避けていた。正直、今でも人付き合いは苦手だし、積極的に他人に関わりたいたとも思わない。

それでも以前と比べて自分は変わったのだろう。つい三ヶ月前までは、ノルンのそばに人はいなかった。

だが今は違う。シグフェルズやハロルド、ラケシスやクロトがいる。だからほんの少しだけ、人の感情に聴くなったのかもしれない。シグフェルズはちゃんとノルンの前にいる。なのに不安で堪らないのだ。自分の前から消えてしまいそうで。

彼の兄のことやベリアルについては何も解決していないのは分かっていた。ベリアルが近く行動を起こすとも思えない。

それなのにこの胸騒ぎは何だ？ 考えても分からない。不安は晴れない。繋いだ手は暖かくて、彼の存在を教えてくれる。

廊下を行き交う人々は皆、楽しげなのにノルンは素直に喜ぶことが出来なかった。

「ノルン？ どうしたの？」

「……何でもない。ちょっと考え事をしてただけ」

言い知れぬ不安。それを表に出せたらどんなに楽だろう。そうすればこの釈然とした思いもどうにか出来るかもしれない。

しかし知ったところでノルンに何が出来るというのだ。ちっばけな、ただの悪魔祓い見習いでしかない自分に。だからノルンは何でもないと笑って見せた。

どうしてなのか。シグフェルズは目の前にいるのに、遠くに感じて仕方がない。話しかけて、触れることも出来るのに、何かが違うのだ。

それがもどかしくて、悔しかった。

「そう？　ならいいんだけど。あ、ノルン。あれ見てよ」

「人形劇？」

シグフェルズが指差したのはとある教室。

中では人形劇が行われており、小さな子供達で一杯だ。手作りのか愛らしい天使の人形と悪魔の人形が見える。

有名な魔王ルシファアが天使の三分の一を引き連れて女神に反旗を翻した場面だろう。

ただ、糸で操っている訳ではないらしい。糸らしきものはどこにも見当たらない。

魔術を操る魔力を持たない代わりに、シグフェルズは精霊因子を視る目を持つ。ノルンとシグフェルズの目に人形を操る精霊因子がはっきりと見えていた。

「そうみたいだね。魔術で動かしてるんだ」

やっと息子と打ち解けたとは言え、仕事の邪魔をする訳にも行かない。ノルアはラグナとテーブル席に座り、息子の姿を眺めていた。本当に大きくなったと思う。マリウスがノルアの元を飛び出してもう三年近くなったのだ。あの時、マリウスはまだ十三歳。今のマリウスは背も随分伸び、幼さも殆ど残っていない。

成長するにつれて、マリウスは亡き妻に似てくるようになった。ノルアは今でも妻を愛しているし、彼女を失ったことは未だ彼の胸に傷となって残っている。

けれど、マリウスに妻の姿を重ねてはならないのだ。

「……よかったですね、ノルア様」

慈しむような眼差しで息子を見つめるノルアを見て、ラグナは思わず顔を綻ばせた。彼が何よりもマリウスを気にしていたのは知っている。

魔法医療師を夢見た少年と、ただ魔導に関わらず幸せに生きて欲しいと願った父親。やっと二人は分かり合えたのだ。

「私はあの子の気持ちを分かってやれなかった、分かるうともしなかった。妻が見たら呆れていただろう」

マリウスの母であり、ノルアの妻であつた彼女は儚げな容姿とは裏腹に、芯のしっかりした女性だった。彼女を失ったことで、ノルアは息子まで失うことを恐れた。

魔導師となれば当然、危険は付き纏う。だからノルアはマリウスが魔法医療師を目指すことを許さなかった。

それに反発したマリウスが家を出たのが三年近く前のことである。

「……あの子のことはいい。それより、ラグナ。最近、クリスの様子が少しおかしい。なにか心当たりは？」

「心当たり、ですか？ 残念ながら私にも。疲れていらっしやるのでは？ リフィリアの一件でも色々ありましたし」

いつも以上に真剣な表情で尋ねるノルアに、ラグナは平静を装って答えた。

いや、本当はその理由を知っている。

《学園》の学園長にして、ノルアの親友でもあるクリスは、色彩

都市リフィリアで大悪魔アスタロトの呪いを受けたのだ。それもシグフェルズと同じく死を齎す、咎の烙印を。

クリスには他言無用だと釘を刺されたため、その事実を知るのにはその場に居合わせたラグナと魔法医療師フィン・ジェオードのみ。親友であるアルノルドにすら話すなと念を押されたのだ。

クリスに呪いを掛けたアスタロトは、魔王ルシファアの側近と呼ばれる地獄の公爵で、四十の軍団を率いる大悪魔である。

格で言えば、あのベリアルと並ぶほどの力を持つと謳われるほどだ。呪いを解くにはシグフェルズと同じく、アスタロト本体を滅するか、彼に呪いを掛けたアスタロトの契約者の命を絶つしかない。

「クリスは昔から隠し事が下手でね、すぐに分かるんだ。疲れているだけならいいんだけど……」

ノルアがクリスと出会ったのは自分がまだ、一介の悪魔被いであった時だ。

初めて会った時からクリスはクリスだった。何百年の時を生きているとは思えないほど無邪気で、隠し事が下手な彼。

しかし本気を出した彼は普段の彼とは百八十度違う。年を経た老獯な魔導師のそれだ。かと思えば、外見そのままの青年であることもある。

「ノルア様……」

「勘違いならいいんだ。クリスにもよく言われるから。アルは心配しすぎて」

勘違いならいい、そう言って微笑むノルアを見てラグナの心は揺らいだ。クリスが咎の烙印を受けていることを知れば、ノルアは全

力で親友を助けるだろう。彼の力を持つてすれば例え契約者やアスタロトであっても遅れは取らない。

しかし、クリスに釘を刺されていることもある。それにクリスがノルアに呪いのことを話すなど言った理由がちゃんとあるのだ。

ノルアはもう、昔のような一介の悪魔被いではない。行動にも制限が付き纏い、自らの意思だけでは動けない状況だ。教皇なのだから仕方がない。

しかしノルアは親友のためなら、喜んでそれを破るだろう。クリスはそんなノルアの性格を分かっていたから、他言無用だと釘を刺したのだ。

「ラグナの言う通り、案外疲れているだけかもしれない。何たってもう年だから」

「……それ、クリス様に言ったら怒られますよ」

本気で悩み出したノルアを見て、ラグナはつい嘖き出しそうになって口元を押さえる。当代最強の魔導師が年だからと本気で思っているところが実に彼らしい。

ラグナにとって『アルノルド』は敬うべき人物で、守りたいと思う。クリスと同じなのだ。

だがラグナはクリスにも生きて欲しいと思っていた。とても何百年も生きた魔導師に見えない不思議な青年。年相応に見えたかと思えば、ラグナが舌を巻くほどの老獪さを見せる時がある。

「そうだろうね。だからこれは私とラグナの秘密だ」

「分かりました。ノルア様がそう仰るなら」

この人のためにも、クリスを死なせる訳にはいかない。全力で呪いから解放する。

それがラグナに出来るアルノルドへの恩返しだ。悪魔祓いとしての生き方を見出してくれた彼への。

不思議な少年

力があれば、あるいは強ければ、あんな事にならなかったのだからか。

いや、違う。力があってもあの悪魔には勝てなかった。

大悪魔ベリアル。『炎の王』、『虚偽と詐術の貴公子』、『シオウルの支配者』と謳われる偉大なる公爵。例え聖人であっても彼を退けることは容易ではない。

魔力も持たず、魔術を扱えない自分など。付けられた傷は自分の無力さを突き付けられているようで嫌だった。お前などいつでも殺せる、殺さないのはただの気まぐれなのだと。

背中への傷が、咎の烙印が焼けるように痛い。焼きごてでも押し付けられているようだ。

ノルンと一緒にいる時は痛みを顔に出してはならない。分かっているのにシグフェルズの口から僅かに苦悶の声が漏れる。

「シグ？」

「大……丈夫」

「大丈夫なはずない。こんなに熱いのに」

大丈夫だと笑うシグフェルズだが、平気そうには見えない。触れた手は熱くて、体は熱を持っているではないか。

体調が万全ではなかったのか。なのにノルンは気付かなかった。そんな自分自身に腹が立つ。

「ハロルドを……」

「本当に大丈夫だから……」

ノルンには何も出来ないのだ。咄嗟にハロルドを呼んで来ようとするが、シグフェルズに腕を掴まれて思うように動けない。

どうすればいい。ハロルドを呼んでくるか、あるいは、シグフェルズを引きずってハロルドの元へ連れて行くか。ノルンが思案した時、つい先程聞いた声が降って来た。

「具合悪いのか？」

鮮やかな朱色の髪に澄み切った空色の瞳を持つ少年。レヴィウス・フォン・セレストイン。

シグフェルズを見て大体の状況を察したらしい。シグフェルズの腕を自分の首に回し、手を背中に添えて体を支える。シグフェルズの抵抗などお構いなしだ。

「ほら、医務室行くぞ。さ、ノルンちゃんも」

「あ、ありがとう……」

この少年について少し誤解していたのかもしれない。この際、いきなり名前をちゃん付けでも我慢しよう。

ノルンはレヴィウスの後について医務室に向かう。

初めは抵抗していたシグフェルズもやはり辛いのか、ぐったりしている。息は荒いし、四肢にも力が入っていない。レヴィウスに支えられてやっと歩いているという有様で、具合が悪いのは明らかだ。

「ミリアムせんせー、いる？」

「いない……？ 私、ラグナ呼んでくるから。シグを見てて」

間延びした声でレヴィウスは片方の手でシグフェルズを支え、もう片方の手で医務室の扉を開ける。

だが医務室には誰もいなかった。学園祭のため、他に呼び出されているのか。何にせよ悠長に待ってられない。言うなり、ノルンが医務室を飛び出して行く。レヴィウスが止める暇もない一瞬の出来事だ。

「あー……行っちゃった。とりあえず寝かしとくか」

困ったように頭をかいだレヴィウスは上着を脱がせ、シグフェルズを空いているベッドに寝かせる。そして自身もそばにあった椅子に腰掛けた。

レヴィウスとしてはこのままシグフェルズを置いて行ってもいいのだが、ノルンの頼みである。彼女が戻ってくるまではいるつもりだ。

「……なあ、あんた。シグフェルズって言ったよな？ あんま、無理しない方がいいぜ。それ、ノルンちゃんに内緒なんだろ？」

足を組み、頬杖をついたレヴィウスは荒い呼吸を繰り返すシグフェルズに言った。その顔はどこか呆れたようではありながらも、仕方のない馬鹿を見るように穏やかでもあった。その表情といい、とても国一番の貴族には見えない。

「何の……ことを？」

「だから、それだよそれ。背中にあるやつ。咎の烙印だろ？」

咎の烙印。核心を突いた一言にシグフェルズの表情が強張る。まさか彼が一目で見破るとはシグフェルズも思わなかったのだ。否定しようとして、口から出たのは渴いた小さな声だけ。焦るシグフェルズに比べ、レヴィウスは笑みを堪えていた。

「何で分かるかって？ これでも魔力感知はプロの魔導師以上って言われたクチだからさ。ま、国一番の貴族も大変ってことで。父も母もそんなところだけは無防備だからさあ」

レヴィウスがシグフェルズの背中から感じたほんの僅かな力の気配。巧妙に隠されているが高位の、それも公爵級の悪魔のものだ。セレストイン家の跡取りであり、魔導師でもあるレヴィウスは呪いに精通している。魔導師の才を持たない両親の代わりに自分がしっかりしなければ、と。

「あんたってさ、何か後輩に、マリウスに似てるだろ？ ほっとけないんだよな」

「そう、かな……？」

視界は白く霞んで体が熱い。けど、こうして話をしてくれる方がありがたかった。気を抜けば意識を失ってしまいそうで。

マリウスに似ている、と彼は言った。ほっとけないと笑う彼はきつと優しい人なのだ。

でなければ、わざわざつい一時間ほど前に知り合った自分を助けたりしない。

「なあ、あんたたち。ノルンちゃんもだけど、学園の生徒じゃないだろ？ 俺さ、生徒の顔は全部覚えてるんだよね」

あっさりと言つてのけるレヴィウスにシグフェルズは返答に困っていた。さらりと言っているが、全校生徒の顔を全て覚えているというのは尋常ではない。

「ラグナ、じゃなくてハロルドのお仲間？」

「え……」

レヴィウスが口に出した名は更にシグフェルズを驚かせた。彼はラグナ、いやハロルドのことも知っているというのか。きっとこの少年に隠し事は無駄だ。それにハロルドのことを知っているのなら、話しても問題はないはず。

そして、シグフェルズはこの少年のことが嫌いではなかった。後輩に似ているから放っておけないという彼は。

「僕とノルンは悪魔被い見習いなんだ」

「ん、でも、シグって。あ、長いからシグでいいよな。魔力ないだら？ 悪魔被いって魔力なくてもなれたっけ？」

レヴィウス話を聞きながら、シグフェルズは不思議な気持ちになった。セレストイン家はこの国最大の貴族。本来なら一般人に過ぎないシグフェルズが気軽に話せる相手ではない。

なのにレヴィウスは長いからと言って愛称で呼ぶし、態度だって変わらない。

もう少し、らしい話し方をしなくていいのかと、こちらが心配してしまうほどだ。

「なれるよ。でも少ないんだ。僕はバクルスの適性があつたから。それに魔力はなくても“目”はあるからね」

シグフェルズは息を整えながら、レヴィウスの疑問に答えた。悪魔被いに魔術を扱う者が多いため、誤解されがちだが、必ずしも魔術を使える必要はない。

ただ悪魔と戦うということから、どうしても魔導の才を持つ者が多いのだ。

シグフェルズは他と比べてバクルスの適性があり、精霊因子を見る才を持つため幸運にも見習いとなれたのだが。悪魔被いも魔導師同様、狭き門である。

「なるほどな。まあ、ノルンちゃんにはれないよう、気をつけた方がいい。彼女、きつと薄々気付いてる。知られたくないんだろ？」

少し心配そうな表情で頭をかくレヴィウスを見て、シグフェルズは苦笑した。彼にはなにもかもお見通しらしい。会って間もないのに、彼と話していると長年の親友であるかのような気がしてくる。

「心配……かけたくないから」

「……そっか。っと、ノルンちゃん戻って来たな。積もる話もあるだろ。俺も行くわ。がんばれよ」

シグフェルズがありがとう、と言うとレヴィウスはにっと笑って医務室を出て行った。本当に不思議な少年である。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8966w/>

誓約の翼

2011年12月3日20時54分発行